
Red Shot

ひゐらぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e d S h o t

【Nコード】

N 4 7 2 7 X

【作者名】

ひぬらぎ

【あらすじ】

『スピラ』とは魂や心の力。それを使える人間、またはそれを使って魔物を退治する人間を、人々は『スピラ使い』と呼ぶ。銃使いのエンジと魔法使いのルーナもまた、共に強力なスピラ使いである。しかし二人は非常に仲が悪く、会話すらしようとしない。幼馴染で、昔は仲の良かった二人。何故二人の仲はこじれてしまったのだろうか、理由は誰も知らない。しかし『黒の日』から十年が経とうとしたていた春、不動だった二人の関係が徐々に動き出す。異世界の大陸を舞台にした、多分普通のファンタジー。

登場人物紹介

・エンジ

十九歳 ヒューマ族 スピラ使い・銃使い
クラン・ギルド『ノーウエン』に所属する青年。実力はギルド内でもトップクラス。しかし泳ぐことが出来ない。

・ルーナ

十九歳 ヒューマ族 スピラ使い・魔法使い
『ノーウエン』に所属する佳人。強い魔力を備えていて、魔法だけではなく錬金術も使える。

・カロン

十六歳 レイモン族 スピラ使い・剣士
『ノーウエン』に所属する亜人の少年。精神年齢がやや低め。自身とほぼ等身大の大剣を振るう。

・センファイ

十六歳 ヒューマ族 スピラ使い・弓使い
『ノーウエン』に所属する、スピラの動きに鋭い少女。

・ロロロネ

十五歳 ウロウ族 スピラ使い・錬金術師
『ノーウエン』に所属。見た目がユニセックスなため性別がわからない。甘いものが好物で、カロン同様に幼い。好奇心旺盛。

・シギ

二十二歳 ヒューマ族 スピラ使い・魔法使い

『ノーウェン』に所属している、口数の少ない男。双子の弟と妹を常に気にかけている様子。

・ウールカ

二十一歳 レイモン族 スピラ使い・槌使い
『ノーウェン』に所属する、いつも笑顔の男。ウサギを髭髯させる帽子を被っている。まともに話したことが無い。

・デイーモ

年齢不詳 見た目は三十代前半 種族も不明 スピラ使い
『ノーウェン』をまとめる謎の多いリーダー。大体おちゃらけている。

・ヴィス

二十八歳 チェイシャ族 スピラ使い
『ノーウェン』に所属する女性のチェイシャ族。主にデイーモの秘書のような仕事をしている。

・ネジュア

二十五歳 ヒューマ族 元スピラ使い・短剣使い
以前は『ノーウェン』に所属して魔物と戦っていた女性。いまはスピラ使いをやめて酒場を経営している。

・ジエード

十歳 ヒューマ族
ロゼラスの街に住む子供。シギの弟で双子の兄。怖いもの知らず。

・シェーラ

十歳 ヒューマ族

ロゼラスの街に住む子供。シギの妹であり双子の妹。やんちゃな
ジエードと違って大人しい。

・フレイヤル

年齢不詳 見た目は二十代半ば 種族も不明。
妙に白い肌をした男。十年前の『黒の日』の首謀者。

・イーシア

年齢不詳 見た目は十代後半 魔人
金髪の少女の姿をした魔物。勝気で高飛車。笛を吹くことで魔物
を操ることが出来る。

用語・世界・種族説明

用語説明

・スピラ

全ての生き物に備わっている、魂や心の力。使える者とそうでない者がいるが、大半の者はスピラを使えない。

・魔力

別名上級スピラ。スピラ的一种で特殊なスピラ。普通のスピラとは違って自然を操ることが出来る。

普通のスピラを使った戦闘は、自身からスピラを表に引っ張り出し高密度なエネルギーとして相手にぶついたり、自己強化する戦い方。

魔力を使った戦闘は、普通のスピラと同じ攻撃も出来るうえに、魔力を自然のエネルギー（火や水、風など）にして攻撃できる。

・スピラ使い

上記のスピラ・魔力を使いこなせる者のこと。またその力を使って魔物退治をする者のこと。

・クラン・ギルド

スピラ使いの集まり。どの街にも一つはあり、本部を構えている。魔物退治の依頼を主として様々な依頼が集められ、そしてそこに所属するスピラ使いたちが依頼を任務として受理してこなす。ちなみにどの本部も居住可能になっていて、スピラ使い達が生活している。

・『黒の目』

十年前、ロゼラスの街に大量の魔物が攻めてきた日のこと。魔物の王といわれたドラゴンまでもが十数頭現れ、ほとんどのスピラ使いが戦死し街の住民の多くも死に追いやられた。

舞台となる世界のこと

・イデイルゲニア

物語の舞台となる異世界の大陸。他に大陸は無い。大昔には王国があつたというが、いまでは滅んでいる。

・ロゼラス

イデイルゲニアの東にある街。十年前、『黒の日』があつた街。

・クラン・ギルド『ノーウエン』

ロゼラスの街にあるクラン・ギルド。謎の多い男ディーモが率いている。

・『夕闇の森』

ロゼラスの街から南に行ったところにある森。スピラ使いの間でも、非常に危険な場所と噂される。

種族のこと

イデイルゲニアでは八割方が人間であるが様々な種族が生活している。

・ヒューマ族

つまるところ普通の人間。他の種族に比べてスピラが強力。

・レイモン族

亜人の一族。先のとがった耳に鋭い牙、浅黒い肌を持つ。また怪力を備え五感も人間より優れているが、鳥目であるため暗所が苦手。

・ウロウ族

亜人の一族。垂れた大きな耳にロバのような尾を持つ。魔力を備えた者が多い。水が苦手で一族そろって泳げない上に、寒さに弱い。

・チエイシャ族

獣人の一族。小柄で全身が白い毛に覆われている。そして大きな耳、三つに分かれた尖った尾、魚のような目を持つ。五感がレイモン族と同じくらいに鋭く、動きも素早くアクロバチックな動きも軽々とやる。

・魔人

人の姿をし、また人間と同じくらいに知力を備えている魔物。

プロローグ 冷たい春風（01）

乳白色のねっとりとした濃霧が、辺りにのしかかるかのようにして漂っていた。その中に呑み込まれている村には、人の姿も気配もない。それもそのはずだ、この村は当の昔に廃村となった村だ。木造の家には苔が生え、壁には植物が這っている。窓ガラスはどれもみにくく割れていて、家の中は例の濃い霧が蛇のように居座っていた。

エンジはその村の、他に比べてまだ幾分か状態のいい家の中に身を潜めていた。割れた窓の下に片膝をついて屈んでいた。手に真紅の拳銃を握り目を閉じて、感覚を研ぎ澄ませ続ける。だが、しばらくこうしているも、周囲に変化を感じない。ゆらりというよりもぬめりと動く、乳白色の霧が肌を撫でる気味の悪い感覚だけが、先程から感じるものだった。

しかし不意にどこからか乾いた音が聞こえてくると、エンジはゆっくりと目を開いた。だがまだ動かない。その音に集中する。乾いた音は一定のリズムを刻んで、徐々に大きくなっていく。こちらへと近づいているのだ。

乾いた音。それは紛れもなく蹄の音で、馬の足音だった。

音がエンジのすぐそばまでやって来た。この民家の壁の向こうで鳴っている。それでもエンジはまだ動こうとしない。しかしこの壁の向こうに敵がいると認識すると、片手に握った赤い銃を無意識に硬く握り締めてしまい、鼓動も少し速くなる。何度も魔物を倒してきているが、やはり緊張してしまう。しかし恥じることはないとわかっている。魔物を倒す者達なら、こんな状況に置かれ

ば誰もが緊張するはずだ。魔物退治の仕事は、いつだって死と隣り合わせなのだから。命知らずや怖いもの知らずだからといって、それが強者であるとは誰も言わない。そんな者は、孤独な者であり、守るべきものがない者であり、命の価値を知らない者だ。しかし、そういう者ほど恐ろしい。彼らは自分の命すら大切にしないのだから。

と、何を考えているのだろうと、エンジはゆっくり首を振った。どうもこの冷たい空気は気分を狂わせる。

妙な気分だ。いままでの魔物退治の任務で、これほどにおかしな気分、これほど不安になることはなかった。気味の悪い霧のせい、または鼓動のリズムとよく似たこの乾いた音のせい。理由はわからないが、とにかく不安になってしまう。

不意に例の音が鳴り止んだ。

息が勝手に止まる。

——見つかったか？

鼓動が一瞬だけ鳴り止む。

周囲は再び静寂に包まれた。ただ先程とは違い、緊張が電撃のよう

に走っている。しばらくその静寂と緊張感が場を支配した。しかし再び蹄の足音がリズムを刻み始めると、エンジは肩の力を抜いた。

足音は先程とは違い、段々と小さくなっていく。エンジのいるこ

の場所から、足音の主が遠のいていく。

エンジがは静かに立ち上がった。そして壁に身をぴったりとつけ、割れた窓から外をちらりと覗く。村の中は相変わらず濃霧で満ちていて様子がよくわからない。しかし、その霧の中へ進んでいく黒い馬の姿が一瞬だけ見えた。

——あれが今回のターゲットか。

この任務をエンジは三日ほど前に受けたが、その退治すべき魔物が一体どういった魔物であるのかは、いまの今までわからなかった。そもそもこの黒い馬——クローディと呼ばれている——は全く確認されない、珍しい魔物だ。どのような場所に生息している、何に弱い、どういった力を持っているかなんて全く知られていない。しかし非常に厄介な魔物であることだけは確かで、だからこそ退治の依頼もきた。

エンジがクローディを見たのは一瞬だけだったが、その姿を確認するには十分だった。体躯は普通の馬よりも一回り大きい。鋭く長い一本の角を額から生やし、四肢の蹄は白い炎に包まれている。そして同じような炎が鬣のように背で燃えていた。白い炎の先からはまた白い煙が出ていて、それが周囲に広がり、霧になっている。

この霧は、クローディから発せられているものなのだ。

クローディの姿が霧の向こうに消え、エンジは音もなく割れた窓から外へと出た。そしてクローディを追って霧の中を静かに進めば、先程霧に吞まれたその黒い影がゆっくりと進んでいるのが見える。クローディは止まる様子もなく、かといって足を速める様子もなく、ただ単調に歩いていく。

——一体どこへ行く気だ。

まるで行く当てもなく気まぐれのように進む黒い影を追いながら、エンジは考える。

しかしその黒い影が、不意に霧散するかのようにして白い霧の中に消えた。同時に蹄の足音が消える。

——消えた？

エンジは足を速め、その場へと急ぐ。地面を見ればクローディの足跡が残っている。それを追ってエンジは霧の中を突き進む。しかし彼はすぐに立ち止まってしまった。

クローディの足跡が、何もないところで途切れていたのだ。

——見失った。

周囲の霧中を見回す。しかし黒い影はどこにもない。やはり先程隠れているのがばれて、それで逃げられてしまったのだろうか。はたまた尾行しているのがばれたか。それともただ偶然に消えたのか。

考えている暇はなかった。クローディはまだ遠くには行っていない、この霧の中にはいるはずだ。クローディがどこか遠くへ移動するのなら、クローディが原因であるこの霧も消えるか薄くなるはずだ。しかし周囲の霧にそんな様子はみられない。

またクローディを見つけ出さなければ。振り出しに戻ってしまった。

先程のような待ち伏せはせず、エンジは霧の中を歩き出した。この霧の中にいるのは確かなのだ。

手に握った銃を腰のホルスターにしまう。この霧の中、唐突にクローディが飛び出してくることもないだろう。奴が近くにいるのなら、先程のように蹄の足音がするはずだ。

そうして銃をしまった次の瞬間だった。

驚くほど近くで、蹄の音が聞こえた。

エンジは反射的にすぐ横の地面へと転がった。そして先程まで彼がいた場所を、クローディが額の角を光らせて突進して通っていく。だがクローディはすぐに踵を返し、地面に膝を突くエンジへと向かって突進してくる。

「やっぱりばれてたか」

エンジは苦笑いをしホルスターから素早く銃を抜き、構える。そして向かってくるクローディへ引き金を引く。

本来の銃のような重い発砲音はしない。いくつもの鈴を一齐に鳴らしたような発砲音が霧で満ちた大気を振るわせる。そして銃口から放たれるのは鉛色の銃弾ではなく、ルビーのように赤く輝く閃光。それが長い尾を引いて、クローディをめがけて一直線に飛んでいく。そしてその黒い身体に衝突するとまた鈴を鳴らしたような音をたてて炸裂する。

クローディが嘶き、その場に止まり身体をよじる。そこにエンジはもう二発、閃光を打ち込みながら立ち上がり、クローディから距

離をとる。そしてまた発砲。

しかし立ち上がってから発砲した閃光は、何故かクローディに当たることなくその身体をすり抜けて霧の向こうへと飛んでいった。

「！」

エンジは目を開いた。

クローディの黒い身体が徐々に透けてゆく。そして周囲の霧に溶け込むように霧散し、姿を消す。

その場にエンジン一人が残った。周囲を見回しクローディの姿を探すも、どこにもない。

——また消えた。姿を透明にする力を持っているのか。

——違う。

背後で何かが動いている。

エンジはすぐに振り返った。

そこでは霧が渦巻き、一点に集まっていた。集まった霧は黒く染まり、そして形を作り、クローディの姿を構築していく。胸から上を霧から実体化させたクローディは、その一本角を黒く輝かせる。

——こいつ、霧になれるのか。

エンジは動けなかった。クローディの角の先から大きな黒い魔方

陣が展開される。そしてそこから放たれた黒い光球がエンジンに当たり爆発する。そうしてエンジンは突き飛ばされ、すぐ近くの民家の壁に背を打ち付けてくず折れた。

ブローグ 冷たい春風（02）

クローディは倒れたエンジを見つめながら、体の全てを霧から実体化させる。そして立ち上がろうとするエンジにゆっくりと近づいていく。

エンジは落としてしまった銃を握り直し、片膝をついて顔をあげた。顔の左半分に生温いものが流れているのを感じる。血が流れているのだろう。その血が目に入りしみるも、エンジは目を見開いてクローディを見据えた。視界がかすれてよく見えない。しかしも迫り来るクローディを睨み銃を構え、銃口を向ける。クローディもエンジを睨み返し、一本角を輝かせる。

「エンジ！」

と、ボーイソプラノの呼び声が霧中に響いた。それと共に、近くの民家の屋根から小柄な人影が飛び降りてくる。

屋根の上で待機させておいたカロンだ。

カロンは着地するなりクローディへと突進、そして小さな背に背負った巨大な剣を両手に取り、クローディをなぎ払うように振るった。しかしクローディは瞬時に自身を霧にさせ、大剣の刃を逃れる。

だがカロンは剣を振るうことを止めない。剣を振るい続け、霧となり曖昧な姿のクローディをその場から退かせる。そしてある程度クローディを追いつめるとカロンは唐突に後方へ跳ね上がり、頭から血を流しながら立ち上がったエンジの元へと駆け寄り、血で染まったエンジの顔を覗き込む。

「大丈夫かあ？」

「なんともねえよ。血が出ただけだ」

エンジは流れる血を手で拭く。しかしカロンは、

「でも、なんか変な魔法をかけられたんじゃないの？ さっき魔方阵出してたじゃん、あいつ」

「なんともねえって。心配ねえよ」

そうしてエンジがクロードイの消えた霧の向こうを睨むと、カロンは肩に大剣を担いで安心したように溜息を吐いた。エンジはカロンを見下ろす。

「ほら、休んでる暇はねえぞ。——奴は絶対に戻ってくる。人間の感覚じゃ分からない、カロン、お前なら分かるか？」

先の尖った耳に鋭い牙、そして浅黒い肌を持つカロンは人間ではなく亜人だ。また怪力を持ち、そのために自身とほぼ等身大の大剣を振り回すことができ、そして鋭敏な五感をも備えている。

カロンが濃霧の向こうを見つめる。

「——来てるよ。真っ直ぐこっちに。正面から来るよ」

「おし、お前は正面からいけ。俺はお前の後方から撃つ。それからわかってると思うけど、あいつは霧になる。霧になったら俺には奴の気配がわからない。お前、わかってるみたいだからその時は奴を追いかける。そしたら俺はお前についていく」

「りょーかいっ……とっ！」

カロンは返事をすると共に突然剣を振り下ろす。そして剣を滑らして空を斬る。時折カロンの剣の流れる先に、黒い霧が見える。クローディがそこにいるのだ。するとクローディは一瞬で姿を作り、カロンの剣を避けて踏み込んだ。そしてカロンに体当たりしようとするも、カロンはそれを避けてまた剣を振るう。同時にエンジはカロンの後方で銃の引き金を引きクローディに攻撃する。しかしクローディは一瞬姿を現したかと思うとまた霧と化してしまい、二人の攻撃は全く当たらない。

——攻守の入れ替えが速い。

エンジは舌打ちをした。これでは一向に攻撃できない。埒が明かない。

相手が霧に戻る前に攻撃しなければならない。しかしクローディが実体化するのは、こちらに攻撃をしかけてくる一瞬だけだ。

ならばその一瞬に攻撃を仕掛ければいい。

しかしエンジの銃弾では、クローディのその一瞬に間に合わない。クローディの攻撃は本当に一瞬だけだ。姿が現れてから引き金を引いても、銃弾がクローディの到達するときにはもうすでに相手は霧になっているだろう……そうすると、カロンに任せるほかない。

「カロン！」

エンジは叫んだ。

「奴からの攻撃がきたら、避けるんじゃないで押し返せ！」
「ふえ？」

カロンが一瞬だけ振り返り、間の抜けた声を出す。エンジは再び叫んだ。

「いいか、奴に攻撃するようにうまく促すんだ。それで奴が踏み込んできたらお前も踏み込んで剣を振り下ろせ！」

「わかった！」

そうしてカロンは大剣を振り回すのを止め、数歩退く。その間にエンジは近くの崩れた民家の影に身を隠し、両手で銃を握った。銃口の先に、小さな赤い光が点る。それはゆっくりと瞬きながら、徐々に大きくなっていく。そうしながら、エンジは少し離れた場所にいるカロンへと顔を上げた。

カロンは剣を肩に担いでその場に突っ立っていた。クローディの様子を見ているらしい。時折一歩だけ後退する。と、その次の瞬間、カロンの目の前にクローディの胸から上が現れ、カロンへ向かって黒く輝く頭の角を突き出した。

カロンは避けなかった。クローディの角先から発射された黒い光球がその身体にめり込むも、彼は大きく踏み込み肩に担いでいた剣を振り降ろす。振り下ろされた剣の刃はクローディの首に深々とした斬り筋をつけ、そして重い音を立てて地面に刺さる。それと共にクローディの黒い光球が爆発する。大剣を手放したカロンの小さな身体が宙に舞い、すぐに地面に叩きつけられた。

クローディが頭を振り、首から血を吹き出しながら嘶いた。霧となっていた身体が姿を現し、前足で地団駄を踏む。その目は怒りに燃えていて、角を再び輝かせると倒れたカロンへその先を向けた。角の輝きは、いままでよりもずっと黒く、大きい。

そしてエンジは民家の影から躍り出た。先程よりも数倍に大きくなった赤い光をつけた銃口を、クローディにしっかりと向ける。

「てめえの敵は一人じゃねえぞ」

銃の引き金を、引く。

銃口の先の光が爆発した。光の中央から、先程の弾丸よりも輝く大きな銃弾が発砲される。それと共に、小さな銃弾もいくつかが発砲される。小さな弾丸は大きな弾丸の周囲を回りながら宙を駆ける。

エンジの発砲した銃弾。それはまさに赤い光の奔流だった。

周囲が赤い光に照らされる。クローディの姿が赤い奔流に飲まれる。赤い光の中、クローディの嘶きが聞こえる。

エンジの銃弾はしばらく経つと、徐々にその光が弱まっていき空気に溶けるようにして消えた。光が消えた濃霧の中、全身から白い煙をたたせるクローディが立っていた。しかし、クローディの身体がゆっくり傾いたかと思うと、大木が倒れるかのようにして地面に倒れた。もう、動かない。

エンジは銃をホルスターにしまうと、カロンの元へ歩いた。少しぼろぼろになったカロンは、そこにぺたりと胡坐をかいて座っていた。

「エンジのスピラ、いつ見てもすごいな」

カロンはエンジを見上げていった。するとエンジは腕組みをして

溜息を吐いた。

「でも、あれはそう何回も撃ち出せるもんじゃねえんだ。一発撃つだけで、結構疲れる。それよりカロン、攻撃を避けるな、なんて無茶言っただけだったな。怪我は？」

カロンは跳ねるようにして立ち上がると、威張るようにして、

「どうってことないよ。そもそもオレは人間より身体丈夫だし」

そうして、倒れたクローディの近くの地面に刺さっている大剣を抜いて、その先でクローディの身体を突つつく。

「一体何なんだこいつ、霧になったりして」

「やっかいだったな」

エンジンもカロンの隣で、クローディを見下ろす。

と、周囲の霧が唐突に渦巻き始めた。激しい風が吹き荒れ、霧はクローディの死体に吸い込まれていく。そして全ての霧が吸い込まれたかと思うと、クローディの身体は小さく霧散し、空気に溶けて消えてしまった。

濃霧のためによく見えなかった廃村の中が、よく見える。空を見上げれば、晴れていた。

カロンがあっけにとられて口を開けている。

「消えちゃった」

「ああ、消えたな」

カロンは不思議なものをみた様子で首をかしげた。大剣を、背負った鞘にしまう。

「本当に変なヤツだったな、あの馬。最近は変な魔物ばかりだ。みんないろんなところで暴れてる」

カロンがそんなことを言ったので、エンジは鼻で笑ってしまった。

「ほんと、最近の魔物は活発だな……そのためにも、早くギルド本部に戻るか」

「えー。オレ、疲れたあ。ギルド帰ってもまたすぐ任務だろー？すこし休みたいよ」

不満そうな声をカロンは上げた。しかし、エンジは肩をすくめて、

「おいおい、そんなこと言うなよ。俺達はスピラ使いだ、魔物を退治するのが仕事だろ？」

「……ちえー」

カロンが口を尖らせる。だがエンジはそれを気に留めず、村の外へ向かって歩き出した。

「でも、ま、ゆっくり帰るか？」

後ろを追ってきたカロンへ振り向いて、そう聞く。

「とりあえず近くの村まで戻るぞ。お前、いま、腹減って死にそうだろ？」

「おー、ごはん食べる！ お腹すいたようー！」

そうして二人は廃村を後にする。

ふと、エンジは空を見上げた。空は青で澄み渡っている。風が吹けば、どこから運ばれてきたのだろうか赤い花びらが舞っていた。

春だというのにまだ寒い。空気も風も、いまだに冷たい。

プロローグ 冷たい春風 終

第一章 スピラの輝き（01）

ロゼラスの街にあるクラン・ギルド『ノーウェン』の本部内は、今までにないほど静かだった。とりわけエンジの使っている部屋のある三階には自分ともう一人しか住んでいないためより静かだった。しかもそのもう一人の住む部屋はいくつもの空き部屋を挟んだ先にあり、またその一人もいまはギルドにいない。ギルドに所属するスピラ使いのほとんどが、魔物退治のために不在なのだ。そんな人気がない静寂の中、エンジは一人、自室のベッドの上に横になっていた。

窓の外を見ると、太陽はもうすでに空高くにある。それでもエンジは身体を起こそうとしなかった。寝ているわけではない。目を覚ましたのは何時間も前のことであるし、そのときに寝巻を着替えていつでも任務にいけるようにした。それでもこうして部屋にいるのは、任務がないからだ。任務がないのなら射撃の練習でもしようと思ったが、上から「休め」と言われて禁止された。練習しなければ、鈍ってしまうのに。

だからエンジはこうして暇を持て余していた。街へ出歩く気もなく、ただ自室で物思いにふけて時間を潰す。たいしたことは考えていない。とりとめのないことを考えながらエンジはベッドに横になり、天井を見上げていた。

ふと寝返りをうつと、ベッドの横に備え付けられた小さなテーブルが目に入る。その上にホルスターに入ったままの銃が置かれている。通常の弾丸ではなく、使用者のスピラを撃ち出すように作られた銃だ。それをホルスターから出し、手に取る。

美しい赤色の銃身だが、よく見ると小さな傷がいくつもある。こ
こ十年間大切に使ってきたが、傷付くのは避けられなかった。戦場
で使う武器だ、傷付くのは仕方がない。その上古いものであるから
毎日欠かさず手入れをしないと調子が狂ってしまう。今日の手入れ
は、すでに今朝済ませた。スピラをこの銃に流し込み引き金を引け
ば、銃弾が飛び出す状態にある。

と、突然ドアをノックされる。乾いた音が昼の静寂に響く。エン
ジは身を起こし、ホルスターを腰に付けて銃をしまうと、ドアを開
いた。

「昼間からもう寝ているんですの？ それとも昼間まで寝ているん
ですの？」

ドアを開けた向こうには、緑の服を着た犬とも猫ともつかない生
物が手を後ろに回して立っていた。身長は十歳ほどの子供と同じで、
全身は白くて長い体毛に覆われている。三本に分かれた尾があり、
頭には大きな耳、そして魚のような瞳。

チエイシャ族のヴィスだ。

「寝てねえよ。横になってただけだ」

エンジはヴィスを見下ろした。ヴィスはふむ、と鼻で笑うように
目を細めた。三本の尾がゆらりと揺れる。

「それで？ なんの用だ？」

エンジはドア枠に寄りかかり、ヴィスにそう聞く。するとヴィス
は片目だけを閉じ、諭すような素振りで答えた。

「デューモが呼んでいますわ。それだけですわ……」

それだけ言うと、ヴィスはエンジに興味を無くしたように廊下の向こうへ行ってしまった。その後ろ姿を見ながら、エンジは部屋の外へ出てドアを閉めた。そしてなぜ呼ばれているのかを疑問に思い、首をかしげる。

廊下を進み階段へ向かう。それまでに誰ともすれ違うことがなかった。階段まで来ると、上の階へ向かう。四階を通り過ぎ、その上の五階へ——最上階へとやってくる。

最上階には廊下がない。階段が終わったかと思うと小さな間があり、その向こうに扉が一つだけある。エンジはそのドアをノックした。

「入っていいぞ」

中から男の声が返ってきた。エンジはドアを開けて中に入った。

部屋の中は、書物と書類、それから白い鳥の羽で散らかっていた。書物のほとんどは図鑑のように分厚いものばかりで、見たことも無い文字で書かれたものもちろはらと散らばっている。書類は白紙のものから任務の内容が書かれたものまであり、果てには落書きのよくなものである。そして何故あるのか理由のわからない白い鳥の羽は、枕に詰められているような小さくて柔らかいものから、羽ペーンに加工すれば立派なものが出来そうなほど大きなものまで、様々な形のものが散らばっている。他にも棚やテーブルがいくつかあるが、骨董品のような代物で溢れている。それらがドアの正面にある大きな窓から差し込む陽光に照らされていた。エンジがドアを開

けた瞬間、数枚の書類といくつもの羽がその光の中に舞う。

これがクラン・ギルド『ノーウェン』のリーダーの部屋である。

ふと横を見れば、書類と書物に溢れたテーブルにヴィスがいた。三本の尾を別々の動きに揺らしながら、難しい顔をして一枚の紙を睨んでいる——『ノーウェン』に集められた依頼をまとめるのが、ヴィスの主な仕事だ。

正面の大きな窓の前には大きな机があり、その向こうでこのクラン・ギルドのリーダーである男、ディーモが回転椅子に座ってぐるぐると回っていた。何故こんなことをしているのか、もちろんエンジにはわからない。

「ディーモ、俺に——」

何の用だ、とエンジは聞こうとしたが、その瞬間くしゃみが出てしまった。この部屋にある羽のせい、というよりは埃のせいだろう。どうもこの部屋は荒れていて埃っぽい。

くしゃみをした瞬間、ディーモはぴたりと回るのを止め、しかし次は反対周りに回転し始めた。ディーモの座る椅子の近くにある羽が、ふわりと舞い上がる。そんなディーモの様子を、エンジは鼻をすすって見ていた。

「ディーモ、俺に何の用だ？」

再び尋ねる。しかし回転するディーモは答えようとしなない。ぐるぐると回転し続ける。助けを求めてヴィスを見つめるも、ヴィスは相変わらず紙を睨み続け、こちらの様子に気づいていない。仕方な

く、エンジはただじつとその場に立ってディーモの返事を待った。

しばらくすると、ディーモは窓の方を向いて回転をやめた。そしてエンジへと向き直り、

「……おええ、目が回る、回る、世界が回転しておる」

「目え回すなら回り続けるなよ……」

エンジは呆れてディーモを見た。ディーモはけらけらと笑っている。

「いやあ、すまんの。日に当たっていたら心地よくての、つい楽しくなって回ってしまったんじゃ」

ディーモは見た目は三十代半ばだが、何故か口調は老成している。

「しかし本当に目が回ってしまったのう。少し気持ち悪いくらいだ。……うむ、わしはエンジを見ているつもりなのに、わしの目はお前の隣にある小箱を見ようと勝手に動いてしまう」

そう言われてエンジは自分の傍らにある小さなテーブルの上を見た。そこに積み重ねられた書物の山の中に、蔦の細工が施された小箱が一つだけ埋まっていた。

「美しい小箱じゃろ？　これほど珍しいものは他にないぞ。中には希望が詰まっている」

第一章 スピラの輝き（02）

そしてまたけらけらと笑う。そんな様子のデューモとは反対に、エンジは無表情だ。

「それで俺に何の用だって、聞いてるんだ。気まぐれで呼んだのか？」

「いやいや、そんなからかうために呼んだわけではない。——そうかりかりするんじゃない、練習を禁止されたくらいで苛立っているなんてのお」

デューモの笑いは止まらない。ついにエンジは眉間にしわを寄せた。

「休息も大事だって事はわかってる。練習禁止されたくらいで苛立たねえよ」

「そんなことはわかつとるわい。ふむ、わたしにはわかってるぞ、エンジン。何故お前が苛立っているのか。それはつまり、このわしの態度に問題があるのだな」

またデューモは声を上げて笑う。しかし不意に黙ったかと思うと、

「そして昔のことを思い出していたのに、そんなときにヴィスがやって来て、わしのところへ来いなんて言って回想の邪魔をしたから、余計に苛立ってるのだな」

エンジは表情を一切変えなかった。しかし内心では驚いていた。

デューモは時折、このように凶星を指してくる。というよりも、

何もかも知った上で相手をからかっている気がしてならない。それは知ったかぶりの可能性もあるが、この得体の知れない男はやはり何もかもがわかつているような気がする。

「さて、まあ、お前の有意義な時間を邪魔して悪かったの。しかしこちらも緊急での」

そうしてディーモは、机の上にあった書類の一枚を手に取り、エンジンに差し出した。エンジンはそれを受け取る。

「任務か？ さっきは休めだの何だの言っていたくせに」

「うむ。休息はとても大切じゃな。スピラの使いすぎはよくない、死に至ってしまう。だがこの任務は急ぎである上に、いまこの本部に残っているスピラ使いでは、お前が一番頼りになりそうなるから……お前、退屈で退屈で死にそうだったろ？ 昔のことを考えてしまつくらいにの」

「その話は終わりだ」

書類には任務の内容が書かれていた。どうやらこのロゼラスの街を取り囲む防壁の外、そのすぐ近くにやっかいな魔物が巣を作ってしまったらしい。ターゲットとなる魔物は、このあたりでは『毒狐』と呼ばれるたちの悪い魔物だ。正しくはヴォルニトという名だが、名称の通り狐の姿をしていて毒を持っているからロゼラス周辺では『毒狐』と呼ばれている。この毒が非常にやっかいなもので、死には至らないものの、体内に入ってしまうと高熱や感覚の麻痺といった症状が二週間は出てしまう。

「久しく増えているの。まあ所詮は雑魚なんだがの、ふふ、最近は本当にどの魔物も活発じゃ」

元気がありすぎて困る、とデューモは腕を組んだ。

「とにかく、その任務は任せたぞ。……あー、カロンのいま本部内にいるが、あいつは置いてってやれ。接近戦タイプだからのも、もしものことだがうっかり狐の毒を受けましたなんて、この時期非常に困るからな。ただでさえ少ないスピラ使いが、これ以上減ってしまふと話にならん。ま、頼んだぞ」

「わかった——行ってくる」

エンジはデューモに背を向け、リーダー室を出た。そのまま階段を降り、一階へと向かう。ギルド本部内には、やはり誰もいない。人影一つすらもない。自分が階段を降りてゆく音が、妙に響く。

だが二階と三階の間まで降りてくると、人の声が聞こえてきた。二階まで降りてくると、廊下に人影があった。

「——あ、エンジだ」

鼻歌を歌いながらやってきたのは、レイモン族のカロンのだった。こちらに気づくと、背負った大剣の重さを何の苦ともせず軽々と駆け寄ってくる。

「エンジ、どっか行くのか？」

カロンは牙を見せて笑い尋ねる。

「任務にな」

エンジは腰のポーチから任務内容の書かれた紙を取り出し、カロ

ンに渡す。カロンはそれを見るなり顔を上げた。

「オレ、手伝おうか？　一緒に行こうか？」

だがエンジは笑って首を振る。

「いや、大丈夫だ。俺一人で十分だ」

カロンから任務内容の書かれた紙を返してもらった。それをポーチへ戻した。その時にちょうど階段が終わり、二人は一回のエントランスを進む。普段は多くのスピラ使いがこのあたりで会話をしたり、任務の手伝いを募集したりしているが、今日は誰もいない。

「誰もいないね」

カロンがエントランスの中央に立って、周囲を見回す。

「ほんと、みんな忙しいのか……」

エンジも見回しそう言った。するとカロンが笑顔を向けてきた。

「でも、今日は帰ってくる人が多いみたいだぞ。センフィとシギ、今日戻ってくる予定だし。オレ、あいつらと昼食食べる約束してんだ」

「『フレンフィール』か？」

「そう」

『フレンフィール』とは、このノーウェン本部の近くにある酒場のことだ。

「俺も任務が終わったらいこうかな」

エンジは開け放たれた外への扉へと進む。その後をカロンの追う。

「来るか？」

「考えとく」

そうして二人は本部の外へ出て、別々の方向へと向かう。

「じゃあ、後でな！」

カロンのエンジへ振り返って手を振る。

「おい、まだ行くなって決めてねえぞ」

エンジも苦笑いを浮かべながら手を振り返し、そして任務の場所へと向かった。

第一章 スピラの輝き（03）

クラン・ギルド『ノーウエン』の本部は、ロゼラスの街の中央広場に面してある。普段から人気の多いこの場所から伸びた大通りを進み、裏路地へと入れば、酒場『フレンフィール』がそこにある。小さな酒場ではあるが、賑わいに溢れているのが常の酒場である。

『ノーウエン』のスピラ使いはもちろん、他の街から来た別のクラン・ギルドのスピラ使いや、どこにも属さないスピラ使いが、食事も欲しい情報を入手するために利用している。スピラ使いだけではなく、街の住人達や旅人、商人も利用する。『フレンフィール』はその料理の味と店主の容貌で、ロゼラスの街の外でも有名な酒場だ。

そして今日も『フレンフィール』はいつもと変わらず賑わっていた。ただその賑わいが普段よりも弱い。店内は人で溢れているが、普段と比べて少ない。スピラ使い達が多忙である影響が出ているのだ。

ヒューマ族の弓使いの少女センフィは酒場のテーブルに一人座っていた。椅子に弓矢をかけ、テーブルに頬杖をついている。まだ料理を何も頼んでいないらしく、テーブルには水の半分入ったグラスが一つだけがあった。センフィは退屈そうに店内を眺めている。

扉を開けドアベルを鳴らしながら酒場の中に入ってきたカロンは、すぐにセンフィの姿を見つけた。カロンは少し大股で進み、そのテーブルへと進む。

「早くない？」

そう苦笑いして背負った剣を降ろし、壁に立てかける。センフィ

は頬杖をつくのをやめて答える。

「早く帰ってこられたのよ。簡単な任務だったし」

グラスを手に取り、水を一口飲む。カロンはセンフィの正面に座って周囲を見回し、不思議に思って首を傾げた。

「シギとウールカは？」

センフィにそう尋ねる。今日は任務に出ていたセンフィとシギ、そしてウールカの一行が帰ってくる予定であり、またカロンは彼らと昼食を摂る予定だった。だがセンフィは目前にいるが、シギとウールカの姿が見あたらない。

「あの二人はね、続けて任務があつたのよ」

センフィが答える。

「三人での任務が終わった後、俺たちはまだ任務があつて行くところがあるから先に帰ってろって、言われてね。それで二人と別れて帰ってきたのよ。帰ってくるのが少し早かったのはそのせいよ、一人旅は自分のペースで進めるから」

「そっか、シギとウールカは明日か……」

今日は久しぶりに会えると思っていたカロンは、少しだけ気落ちした。なにせ、シギとウールカはここ一週間以上顔を合わせていない。そうなるとスピラ使いとして不安になる。スピラ使いは死と隣り合わせだ、もしかすると一週間以上前にあつたその日が彼との最後の会話になってしまった、なんてことが起こりかねないのだ。

そうカロンの表情を暗くすると、センフィが溜息をついて笑った。

「ま、あの二人だから大丈夫よ。あの二人、強いし。それにあの二人が一緒に戦うときは息ぴったりだしね」

「……そうだな！」

センフィにそう言われて、カロンは笑顔になる。仲間に会えないことを悔やんでいると、そのうち嫌な考えが出てきてしまう。縁起でもないし、いつまでも気にしては自分のことに不注意になるため、こんなことはすぐにやめた方がいい。任務に出ている仲間達へすることは、彼らが無傷で帰ってくることを願うことだけだ。

「うし、メシ！ 腹減って死にそうだ」

カロンは椅子から立ち上がると、店内を見回し店主の姿を探した。しかし店主の姿はない。この店主の姿は目立つため、普段ならいつもすぐに見つけられるのだが、今日はどこにもいない。

「残念だけど、ネジュアはここにいないわよ？ 忙しいみたいで、店の奥ですつと料理を作ってるみたいよ」

センフィがカロンを見上げる。

「料理頼みたいなら、さっきから店と厨房を出入りしてる双子に声をかけたら？ あの二人、今日はネジュアのお手伝いをしているみたいだから」

「ふーん……あいつら、また手伝いしてるのか、偉いな……センフィは何食べる？」

「あたしはまだいいや。もうちょっと店が空いたら食べようかな、ネジュアも双子も忙しそうで、ちょっと声かけにくいのよ」

「なるほどね。そう言われると、声かけにくいなあ」

カロンは確かに、と思い椅子に座った。空腹であるも、たださえてんてこ舞になっている双子に何皿も頼むのは少し罪悪感がある。しかしやはり空腹は辛い。思わず俯いてしまう。

見かねたセンフィは苦笑いを浮かべた。

「そんなにおなか空いてるのなら、頼めばいいのに。あんたもうおなか空いて死にそうなんでしょ？」

「うう、でもいまお店忙しいんだろー？」

と、ふとカロンはテーブルを見て気づき、顔を上げた。

「てかこのテーブル狭くない？ オレの頼んだ料理、置ける？」

「五皿くらいまでなら平気でしょ？ 四皿があんた、一皿があたしで」

「エンジの分は？」

唐突にそう言ったので、センフィは「え？」と困惑の表情を浮かべた。

「エンジの分って？」

「エンジを誘ったんだ。後から来るって言ってた」

「なんでそれを早く言わないの？ テーブル移動しなきゃじゃない。ここ、二人しか座れないのよ？」

センフィが呆れる。そして店内を見回し空いているテーブルを探すも、どこもすでに埋まってしまっている。しばらくの間、テーブルが空く様子はなさそうだ。

「来たときにすぐにそう言ってくれば、席とれたかもしれないのに。エンジはどのくらいで来るの？」

「んー、三十分くらいしたら、かなあ。いま、外壁の毒孤を退治しにいつてるから」

それを聞いたとたん、センフィははつとした。

「ちょっと待って、外壁の毒孤退治って……どこの門近く？」

そうセンフィに聞かれ、カロンは記憶をたどる。『ノーウェン』本部を出る少し前にエンジから見せてもらった任務内容の紙には、何と書いてあっただろうか。毒孤が街を取り囲む外壁近くに巣を作ってしまった、旅人や商人達が街の中に入ってこれない、と書いてあったのは憶えている。数人の旅人が被害にあったとも書いてあった。場所は……どこだったろうか。思い出せない。しかし、

「多分……北門だと思う。北の村からやってきた旅人が被害を受けたって、書いてあったから」

「北門……ね」

センフィは何故か顔をしかめた。しかしそれはすぐに苦笑いとなる。手に負えないわがままな子供を見るような、そんな表情。

「北門なら、エンジ、多分来ないわ。このままこのテーブルでいいわ」

不意にそんなことを言う。だからカロンは首をかしげた。

「北門だと、なんかあるの？」

「うん……」

センフィは少し答えにくそうに言う。

「今日ね、確か、あたしだけじゃなくてルーナも街に戻ってくる予定なのよ、北から」

「あー……」

それを言われて、カロンは全てを悟った。

「あの二人、下手すると会っちゃうのかぁ……」

北から帰ってくる、ということは北門を利用してこの街へ帰ってくるということ。それはつまり、ルーナがエンジンに会うかもしれないということ。

エンジンとルーナ。それは『ノーウェン』の中でも強い二人のスピラ使いとされる反面、恐ろしいほどに仲が悪い二人のスピラ使い。互いに互いを避けあう、まさに犬猿の仲の二人。会話をしようとなしいし、話題に出そうともしない。出会ったときは睨み合い、互いのスピラをぶつけ合う。不仲であることが一目瞭然の、二人。

「あの二人のスピラのぶつかり合い、ほんと、凄い音がするよなぁ」

カロンが苦笑いをしながら椅子の背もたれに寄りかかる。センプイも苦い顔をした。

「あたし、あの音本当に苦手なのよね。特にあの二人のはもう無理！ あたし達もさ、強い魔物に出会ったときにそのスピラとあたし達のスピラがぶつかり合って音がするけれど、あの二人の音はそれ

とは比べものにならないほど大きな音がするし、鋭いじゃない？
しかも空気がピリピリするし……敵意むき出しのスピラよ、あの二人」

「センフィはそういうスピラの動きに敏感だからなあ。オレは音が鳴ってるなーってだけしかわかんなかったけど」

「あの二人の部屋が隣同士だったときのこと、憶えてる？ 二人が部屋の前で会々と、いつもスピラの衝突が起きてたとき。あの頃あたしルーナと相部屋で、毎日部屋の外でキンキンキン音鳴ってて死ぬかと思ったんだから！ あの音、頭にものすごく響くのよ！？」

センフィはそう叫んだとたん、急に萎えた。テーブルに肘をつき両手で顔を覆う。そして思い出したくないのか、か細い声で続けた。

「一番つらいのは外で二人がスピラのぶつけ合いを始めて、その後ルーナが部屋に戻ってきた時よ……ルーナが部屋に戻ってくると、部屋の中が急激に冷たくなるのよ。ルーナのスピラが魔力だから、空気が反応するのね……それがもの凄く冷たいのよ。しかもそれだけじゃない、空気が肌を刺すの。例えばじゃないわ、本当に空気が痛いよ」

センフィは長い溜息を吐くと、思い詰めた人のように自分の髪をくしゃくしゃと両手で握り引つ張り、そしてテーブルに自分の頭を落とした。ごん、と鈍い音がする。苦悶した様子で言葉を漏らす。

「あの頃を思い出すと頭が痛くなるわ……」

「そういや、センフィはそれで倒れたっけ……」

カロンは数年前のある日、突然センフィが倒れたのを思い出した。スピラを感じやすい体質だったセンフィが、エンジンとルーナのスピ

ラにとつと限界を迎えたときのことだった。それでようやく見かねたデイーモが、エンジンとルーナ、センフィ、そしてエンジンと相部屋だった自分を別々の部屋に移した。自分は二階の相部屋に。センフィは一階の相部屋に。そしてエンジンとルーナは三階の端と端にある一人部屋へ。

もともとスピラ使いが減少しているため、三階の部屋は誰も使っていないかった。これなら衝突が起きても誰も迷惑しない、と思ってデイーモは二人に部屋を与えたのだらう。しかしどうせならば同じ階ではなく別々の階にすればいいのに、とカロンは思う。一から二階までは相部屋となる部屋であるが、三階四階は一人部屋となっている。当時も今も、四階の部屋が全て使われているわけではないのに、何故二人を同じ階にしたのか疑問だ。

「今日の北門の見張り番、かわいそうね」

センフィがテーブルに突っ伏した状態で顔を上げる。疲れている。

「あの二人の衝突、本当に強烈だから、たとえスピラを使えない人間でも少しだけそういうセンスのある人にはびりびり来ちゃうわよ？　しかもそういうセンスがあるだけで、スピラ使いじゃないから衝突に耐性ないし、運が悪いと気絶するわね。あたしの中だと、あの二人の衝突の中でまともに立っていられると思うのは、あの二人以上に強い人が本当にスピラを使いこなすセンスの全くない人が、あんたみたいに鈍すぎる人くらいね」

「悪かったな、鈍くて」

カロンが口を尖らした。しかしセンフィが首を横に振る。

「悪く言ったつもりはないのよ。むしろそれも才能の一つよ。スピ

ラの波を感じないあんたは、例えどんな敵でも突っ込んでいけるじゃない。あたしや他のスピラ使いが、敵のスピラに圧されている中でも」

「でも風とか波とか、そういうのにされたスピラならオレでも無理だよ。それにスピラの強さがわからないから、危機感ないってことだよな？ オレ結構危ないんだぞ、それもそれで」

「こっちは危機感ありすぎて仲間のスピラでダウンするのよ？ しかも敵が強すぎてあんたみたいに勇敢に立ち向かえない。離れた場所で見てるだけ。それより全然マシじゃない。自分が情けなくて泣けてくるわよ、もう」

センフィは半分だけ水が残っていたグラスを手に取り、乱暴に飲み干す。そして空になったグラスを逆さまにし、中に指を数本入れそれを軸にしてグラスを回す。透明なグラスは店の明かりを反射して輝いている。

「もし、いま北門にルーナがやってきてエンジンと会って、それでそのエンジンがこの店に来たら最悪よ。ルーナと会った後のエンジンのスピラはもの凄くどろどろしてるのよ？ 不機嫌の塊だわ……ま、エンジン、不機嫌になったら多分こっちないと思うけど」

第一章 スピラの輝き（04）

この大陸にあるほとんどの街は、魔物のから人々を守るための厚く高い外壁に囲まれている。

ロゼラスの街も例外ではない。ただこの街は他の街と違い、外壁がより頑丈に作られている。十年前の『黒の日』以来、外壁が強化されたのだ。

大規模な魔物の襲撃。数多の魔物がこの街に押し寄せ、魔物の中でも最も強い種の魔物——ドラゴンまで姿を現し、多くの命が失われた。街に住む人々も、戦いに出向いたスピラ使い達も、その多くが死んでいった。一体何故魔物達がこのようなことを起こしたか分からないが、十年経ったいまでもロゼラスの街の人々に深い傷を残している日。それが『黒の日』だ。

外壁近くまでやって来たエンジは、その高い外壁にある門を見つけた。外壁には東西南北と門が四つあり、普段は魔物の侵入を防ぐため閉められている。外から誰がやって来たり外へ出たいと望む者がいれば、門近くの見張り台にいる見張り番が門を開閉する。

見張り台は外壁の上にある。エンジは外壁に取り付けられた梯子を上り、見張り台を目指した。地上から見張り台まで梯子を上るには、少し時間がかかる。

小さな小屋のような見張り台まで上がると、そこには誰もいなかった。おかしいな、とエンジは思う。見張り台には、見張り番がいるものなのに。

見張り台から周囲を見回す。正面を見ればどこまでも続く街の外、大地が広がっている。ロゼラスの街の近くは土と草原ばかりだが、少し奥を見れば森も見える。

振り返れば人々で賑わうロゼラスの街。『ノーウエン』本部が見える広場では、小さな子供達が元気よくはしゃいでいる。広場から伸びる大通りでは市が開かれ、活気に溢れている。十年前の大惨事からここまで復活するなんて、当時は想像もできなかった。いまのロゼラスの街は、平和そのものだった。

ふと横を見れば、街を取り囲む外壁が伸びていてる。見張り台から外壁に沿って足場が伸びていて、その先に人影が一つある。エンジはそれを確認すると、そちらへと向かった。

やはりその人影は見張り番の少年だった。街の外、外壁の下を、不安そうに見下ろしている。

「おい」

エンジがその少年の隣へ来て声をかけると、少年は気付いて顔を上げる。

「エンジさん、こんにちは」

「おう」

カロンと同じくらいの歳だろうか。その少年が見下ろしていたものを、エンジも同様に見下ろす。真下の地面にはぽっかりと穴が開いていた。魔物の巣だろうか。

「毒孤の退治に来た……あれが毒孤の巣か？ やけにでかくないか

「？」

「はい……ちょっと大きいけど、あれが巣です」

少年がそう答え、エンジはその毒狐の巣をじっと見つめる。暗い上に遠いため巣の中がどうなっているのかわからないが、何かがうごめいている気がする。と、その暗闇に小さな二つの輝きが見えた。それはすぐに奥へと消えてしまったが、間違いない、毒狐の目だ。エンジは少年に聞く。

「何匹ぐらいいるんだ？」

「十匹ぐらいです。さっきまで、その辺りをうろちよろしてました」

少年が喋っている最中だった。

地面の穴から毒狐が数匹這いずり出てきた。ぴんとした耳、狼に似たその顔つき、クリーム色の柔らかい毛に包まれた身体、尾。見た目は普通の狐と変わらないが、毒の牙と毒のスピラを持つ狐だ。外へと出てきた毒狐達は、尾を揺らしたり、耳を立て周囲を伺ったりしている。

エンジは素早くホルスターから銃を抜くと、何の予兆もなくその数匹に向かって引き金を引いた。赤い銃弾が毒狐に向かって飛び、当たり、弾ける。毒狐の身体が吹っ飛び、地面に倒れる。

「外に出ますか？ 門開けますよ」

少年が見張り台に向かって進む。しかしエンジは首を横に振った。

「いい。ここから撃つ」

巢穴の外で何かが起きていることに気がついたのか、再び数匹の毒孤が穴から出てきた。いま真下を歩いている毒孤は六匹、倒したのは二匹だ。エンジは出てきたばかりの毒孤たちに狙いを定め、また引き金を引く。放たれた三つの赤い銃弾はカーブを描いて毒孤へと迫り、狙ったうちの二匹へと命中する。しかし一匹の毒孤だけは寸前で銃弾の気配に気付き、跳ね上がり慌ててその場からのいた。銃弾は地面に当たり、消滅する。しかしエンジは間髪をいれず発砲を続ける。

「……毒孤がどんどん倒れていく」

エンジの横で、少年が目を丸くして呟く。

「やっぱりスピラ使いの人たちは凄いや……僕もスピラが使えたらなあ、エンジンさんみたいに毒孤を追っ払えるのに」

それから、つとエンジを見る。その視線に気付いたエンジは、銃口を毒孤に向けたまま少年を見返す。

「何だ？」

「いえ……その」

少年は困ったように首をかしげ、しかし口ごもりながらも答えた。エンジの銃と、そこから放たれる赤い銃弾——エンジのスピラを見ながら。

「どうやったら、スピラ使いになれるんですか？ やっぱりスピラがないとなれないんですか？」

少年が不意にそんなことを尋ねてきたので、エンジは思わず一瞬だけ呆然とした。すると少年がはにかんだ様子で笑う。

「い、いや、僕もスピラ使いになれたら、戦えるのにつて思つて…
…見てるだけしかできないなんて、悔しいんですよ」

「ああ……」

——悔しい、か。

少年は羨ましそうにエンジの握る銃と倒されていく毒弧を見つめていた。他のスピラ使いが来て毒弧を退治しているときも、こんな表情で見つめているのだろうか。

力が欲しい、と思つたことはエンジにもあつた。だから強くなろうと思つた。力がどうしても必要だつた。

「スピラはな、誰にでもあるんだ」

少年に答えるつもりはなかつた。それが少年のためだと思つたからだ。

だがいたたまれなくて、思わず言葉が出てしまふ。

「スピラは心や魂の力だ。だから生きているモノすべてに備わつて
る。俺達人にも、動物にも、植物にも、例えどんなに小さな生き物
であつてもな。魂が心がある生き物なら、スピラを持っているつて
わけだ」

「……じゃ、じゃあ、僕にもスピラはあるんですか？」

少年が目を丸くする。その目には驚きと嬉しさの色が見える。エ

ンジは小さく笑った。

「ああ、お前にもあるぞ。だってお前、生きてるだろ？」

第一章 スピラの輝き（05）

少年の表情がいよいよ嬉しそうなそれになってくる。しかしエンジはややしめ面を浮かべた。

銃の引き金を引く。毒孤がまた一匹、倒れる。

「ただ、使えるか使えないかが問題だ」

銃口を巣穴へと向ける、引き金を引く、銃弾が巣穴へと逃げようとした毒孤に当たり、炸裂する。一匹の毒孤が巣穴の前で力尽きる。

「使えるか、使えないか……？」

「そう。これが一番の問題だ。いくらスピラがあるからといって、使えなきゃ意味がないだろ？」

少年が首を傾げる。意味が伝わっていないらしい。

「……試しにやってみるか？」

エンジは握っていた銃の銃身を握ると、グリップの部分を先に少年へと差し出した。スピラを撃ち続けていた銃身は熱い。

少年は差し出された銃を見て、仰天したのかよるめきながら数歩退いた。両手の平を見せて困ったように振る。

「そ、そんな、いいですよ。その銃、大切なものでしょう？」

「ああ、俺がスピラ使いになってからずっと使っている、スピラを撃ち出す銃だ。試しに撃ってみる、お前がスピラを使えるようなら、

発砲できるから。それに、そう脆いものじゃない、簡単には壊れねえよ」

エンジは少年に笑いかける。少年はわずかに震える手で銃を受け取ると、握る。

「……結構、重いんですね」

少年は銃を両手で握っていた。しかし狙いは定めず銃口を下に向けている。それをゆっくり上へと向けて、顔の前へと持ってきた。そしてそれをまじまじと見つめる。

「あ……傷、多いですね」

「まあ十年間使い込んでるからな。いまじゃ毎日手入れをしないとうまく動かないんだ」

「えー」

すると少年は恐怖して銃をエンジの手に押し付けた。

「や、やっぱ返しますよ！　僕なんかがいじったら、壊しちゃいそうで……」

「だから平気だって、発砲するくらい」

そうエンジが笑うと、少年は恐る恐る銃を握りなおした。そしてその銃口の先を、ぎこちない動きで外壁の外へと向ける。

「地面じゃなくて地平線のほうを狙え」

「……はい」

「それから右腕を真っ直ぐに伸ばせ。それで左腕は伸ばさないで軽く折る。じゃないと、狙いがうまく定まらないぞ」

「……はい」

少年がなれない様子で銃を構える。肩から銃を握る指先までが、小刻みに震えている。

「力を抜け。それで自然に引き金を引くんだ。力むな、自然に、ゆつくりだ。それで銃に気持ちを集中させる」

少年は息を吸い込み、そしてゆつくりと吐き出す。不安げに目を開き、地平線を見つめる。

そしてゆつくりと、引き金を引く。

カンツ、と、鉄を叩いたような、少しくぐもった音が周囲に一瞬だけ響く。

銃口からは何も飛び出さなかった。しかし少年が引き金を引いた瞬間銃口の前で小さな光が爆発し、だが跡形もなく消えていった。少年が打ち出したスピラは、発砲された直後、飛ぶこともなく消えてしまった。

「あ、あれ？」

少年が困惑した表情を浮かべ、銃を引き寄せ銃口を見つめる。銃口の中は、漆黒が続いている。

「エンジンさん、いまのは？」
「おしいな」

エンジは困惑する少年を見て思わず笑った。銃を受け取ると、そ

の銃身を見つめる。銃身はわずかに熱を帯びていた。銃身が熱を帯びているのは、そこを凝縮されたスピラが通過した証だ。

「お前、スピラ使えるじゃねえか」

「えっ？」

「ほら、撃つたとき光っただろ？ あれはスピラが使える証拠だ。それに銃身も少し熱くなってる。スピラが通過した証拠だ」

「ほ、ほんとですか!？」

少年が困惑しながらも、顔を輝かせた。

「じゃあ、僕、スピラ使いになれるってことですか？」

「ああ、センスはあるってことだ……」

エンジは少年にそう答える。しかしその表情を曇らせた。そのことに気付いた少年が、無言で首を傾げる。エンジはちらりと少年を見た。そして苦笑いを浮かべ、

「でも、スピラ使いにはなるな」

きつぱりと、そう言った。だから少年は啞然とした。

「え……？」

「お前、家族がいるだろ？」

エンジは突として少年に質問を投げかける。少年は「はい」と素直に返事をした。エンジは地平線の彼方を見つめながら、少年に言い聞かせる。

「スピラ使いは死と隣りあわせだ。いつ死んでもおかしくない。そ

れに――」

毒孤の巣穴から、一匹の毒孤がゆつくりと出てきた。エンジンが銃を構えて引き金を引くと、赤く輝く銃弾が発砲される。赤く輝くエンジンのスピラは、また毒孤を捕えて炸裂し、倒す。

「スピラの使いすぎはな、寿命を縮めるんだ。だから、スピラ使いにはならない方がいい。危険だし、すぐ死ぬから」

少年は無言でエンジを見つめていた。エンジは続ける。

「それに、力にはそれなりの責任があるんだ。自分のスピラを正しく使いこなせるかとか、人を守るか、とか。そういうものを背負い込まなきゃいけない。だからスピラが使える奴がいても、スピラ使いになることを強制しない。どうしてもなりたいて奴や、家族がもういない奴がスピラ使いになるんだ……死を覚悟でな」

もう毒孤が巣穴から出てくる様子はなかった。十匹の毒孤が真下に倒れている。まだいるかもしれないが、大体は倒しただろう。エンジは銃をホルスターにしまった。

「大体こんなもんだろう。下へ降りる、門を開けてくれ」

「は、はい！」

少年がばたばたと見張り台のほうへと走る。そして見張り台にある大きなハンドルを回し始める。ぎぎぎ、と門が開く音がする。エンジは見張り台から梯子をつたって下へ降りると、門をくぐって外へと出た。街の中とは雰囲気さがらりと変わった景色が、目前に広がっていた。

毒孤の死体を避けつつ巣穴へと向かう。巣穴近くへと来ると、巣穴の大きさがよくわかる。外壁の上から見たときから想像したものより大きい。この巣穴は大人が少し屈んで入れるほどの大きさだ。こんなに大きな巣穴は見たことがなかった。通常の毒孤の巣穴は、子供が四つんばいになってやっと入れるほどの大きさだ。

「随分大きな巣穴だな……」

エンジは恐る恐る巣穴の中を覗いた。漆黒の闇がどこまでも続いている。まだ数匹、中に潜んでいるかもしれない。

腰のポーチを開け、透明の小さなボールを取り出す。中では輝く雲のようなものが蠢いている。クラン・ギルドの錬金術師が作ったスピラボールと呼ばれるものだ。中で蠢いている雲のようなものは凝縮されたスピラで、外から少しスピラを与えれば時間を置いて爆発する。

「爆弾ですか？」

少年が見張り台からエンジを見下ろしていた。エンジは何も答えずに、そのボールを巣穴へと投げ込んだ。

数秒後、巣穴の中から爆発音がとどろいてきた。地面がわずかに揺れ、巣穴は砂煙と白い煙を吐き出した。スピラボールの中にあつた凝縮された大量のスピラの爆発により、その中にあつたスピラが不可視のスピラとなり空气中に飛び散る。そしてエンジのスピラとその周りを漂うスピラをつつき揺らされると、肌を小さな電撃が走ったかのような感覚が襲う。

見張り台を見上げれば、少年がまるで寒いとでも言うように自分

の両腕を両手でさすっていた。空気中のスピラの振動を感じたらしい。

「ぴりぴりするのか？」

「はい……」

少年が苦笑いしながら答えるので、エンジンも思わず笑い返した。自分もスピラになったばかりの頃、慣れないスピラの振動にああしたっけ。いまでは強敵に会い強いスピラを感じることも、クラン・ギルドでのスピラの衝突も頻繁にあるので慣れてしまった。

第一章 スピラの輝き（06）

と、いまだに砂煙を吐き出し続ける巣穴の中に、何かの影が見えた。

エンジは目を細め、巣穴の中を睨む。そしてポーチの中からも一つスピラボールを取り出すと、再び中へと投げ込んだ。

二回目の爆発、再び地面が揺れ、空気中のスピラが揺れた。巣穴から出る砂煙の量が増える。

その煙の中で、影が動いた。

——来る。

エンジがホルスターから銃を抜いた、次の瞬間だった。

煙を吐く巣穴の中から、数匹の毒孤が牙をむいてエンジへと向かって飛び出してきた。間一髪、エンジは身体をよじって避ける。そして銃をすぐに構え、飛び出してきた毒孤へと振り返りながら発砲した。

背後には毒孤が三匹いたが、どの毒孤にも銃弾を避けられてしまった。と、そのうち一匹の毒孤が紫色の光の球を吐きだす。毒のスピラだ。エンジはその光に向かって引き金を引く。発砲された赤い光は紫のとぶつかり合い相殺を起こす。

毒孤達はその目でエンジをしっかりと捕らえながらエンジの周りをゆっくりと進み、取り囲む。エンジは動かなかった。見張り台か

ら少年の叫び声が聞こえる。エンジは銃を自分の身体に寄せ、毒孤の様子を伺う。目前にいる一匹の毒孤が、ゆらりと尾を振り目を細め、空気のおいでもかいでいるのか鼻先をひくつかせている。妙な毒孤だった。耳の先や尾の先、頬や背に赤い模様が入っている。新種の毒孤だろうか。

不意に視界の隅で、何かが動いた。視線を素早くそちらへ向けると、毒孤が跳ねながらこちらを睨んでいた。尾と耳をぴんと立たせ、口からは牙を覗かせている。その毒孤はまるで挑発するように唸り、身体の前半分を地面につけ尻尾を揺らした。だがそれだけで、何かをしてくる様子はない。しかし不意にまた跳ね上がると、そのままエンジへ向かって跳んできた。

エンジはその場から素早く飛び退き毒孤のタックルを避ける。跳んできた毒孤は地面へと落ちる。すると背後にいた別の毒孤が、間髪を入れず毒のスピラを吐き出してきた。エンジはそれも身をよじって避ける。だがその直後、今度は地面に寝転がる先ほど跳んできた毒孤が足に噛みつこうと牙をむいてくる。そして正面にいた赤い模様の入った毒孤も突進してくる。

毒孤の一斉攻撃だった。しかしエンジはステップを踏むように突進してきた赤い模様の毒孤を避け、足下に寝転がる毒孤を蹴り飛ばした。そして先ほど毒のスピラを吐いてきた一匹へと振り返り、いままさにスピラを吐き出そうとしていた所に銃口の先を向ける。

だがエンジが引き金を引く前に、突如視界の外から現れた青い炎が、その毒孤を飲み込んだ。

「!?!」

エンジは驚いて目を見開いた。その青い炎はきらきらと輝いている。まるで夜空の星雲が地上に降りてきたような、炎というよりはダイヤモンドダストが流れになり濃い霞になったようなそれは、風に流されるようにしかし激流を下るような速さで宙を滑り、他の毒孤をも飲み込みそしてエンジの周りを囲った。その渦巻く動きは恐ろしいものだが、轟音などは一切せず、そよ風が吹いているような音がしかしない。空よりも醒め海よりも深い青色をした星雲の静かな激流が、エンジを中心に渦巻いていた。エンジはどうすることもなく、銃をおろした。

——あいつか。

空気が肌を刺す。

渦巻く青い星雲は、徐々に勢いを失い弱まっていく。そうして見えた青い炎の向こうでは、赤い模様の入った毒孤が一匹、尻尾を逃がっているのが見えた。そしてエンジ同様にその毒孤を見つめる人影も見えた。大きな杖を片手に握っていた。その杖の上部には青く輝く水晶が付いていて、青い星雲はその水晶から溢れ出ている。背を覆う長い髪が、風になびいていた。

その人物がこちらへと振り返る。長髪が波打って揺れた。そうして見せたのは眼鏡をかけた無表情だった。ほんの少しだけ童顔を残した、しかし美麗でよく整った容貌。肌は白く、エンジを射抜こうとするような勢いで睨んでいる瞳は、よく澄み晴れた空の色をしている。

『ノーウェン』の中でも力があるといわれている佳人、ヒューマの魔法使いルーナが、エンジを睨んでいた。

青い炎が空気に溶けて消えていく。その風に舞っている火の粉が肌に触れると、冷たかった。風も冷たく、数秒前に比べて気温がずいぶん落ち込んでしまったようだ。ルーナはエンジを睨んだまま、動かなかった。ただその手に握る杖の水晶の輝きが弱くなる。スピラの中でも自然を操ることの出来る上級スピラ——魔力の放出を止めたらしい。

エンジもルーナを睨んだまま、動かなかった。銃を握る片手に、自然と力が入る。自分の中で、スピラが徐々に勢いを増しながら燃えているのを感じる。勢いをもったそれはエンジの中に止まらず、姿形をなさずに外へと出て行く。こうした「姿形のない不可視のスピラの放出」はスピラ使いにとって自ずと常に行っていることだが、いまは違う。感情の昂ぶり、強いスピラ、その二つを感じて魂が燃え上がっている。

突としてルーナの杖の水晶が眩しいほどに輝き出す。相手も感情が昂ぶり、こちらのスピラを感じたらしい。水晶の周りでは、星のような小さな輝きがふわふわと漂っている。

ルーナの見えないスピラが彼女の周りに広がる。それはエンジの見えないスピラと共に周辺の空気を混ぜる。とたんに空気がのしかかるように重くなり、どろりとした粘りけのあるそれに変化する。まるで時間が質量を持って止まってしまったかのようなだった。その中で、二人は互いを睨み合う。

——余計なことをするな。

エンジは心の中で呟く。するとエンジのスピラがルーナのスピラを押す。きーン、と透き通っているがあまりにも高い音が鳴る。二人のスピラが衝突したのだ。するとルーナのスピラが押し返してく

る。またスピラの衝突音がして、今度は空中で輝いた。

それからはスピラの衝突音が続く。二人はスピラの競り合う。衝突音が激しさを増し、頭が割れそうなほどに大きく高い音となる。しかし二人は微動だにもしない。

——……。

衝突の際、ルーナの感情が一瞬だけちらつく程度に感じる。しかしそれはあまりにも複雑でいりくんでいて、何を考えているのかわからない。だが確かに感じるものはある——怒りと憎悪、この二つだけははっきりと分かる。

——そんなに言わなくても、こっちからお断りだ、馬鹿野郎。

だからエンジンもその感情をそっくりそのまま返す。また、スピラの衝突音がする。

こちらを睨む眼鏡の奥のルーナの瞳には、瞳にルーナを移す自分の姿が映っていた。スピラを抑制せず、ありのままの感情をぶつける。どちらも引かない。どちらかが引くまで、どちらも引かない。

スピラの衝突音が響く。

エンジの背後、上空で物音がした。

すると不意にルーナのスピラが治まり、エンジンもつられてスピラを抑制する。しかし相手を睨んだままだ。だがルーナはエンジンではなく、エンジの背後、上部を見ていた。エンジンも振り返ってそれを見るとそこには見張り台があって、ところが肝心の見張り番の姿が

ない。どうやら倒れたらしい。スピラが衝突しあうあの空気に耐えられなかったようだ。

エンジは我に返り、走って門をくぐり見張り台へと上った。案の定、そこでは見張り番の少年が青い顔をして倒れていた。

「おい、大丈夫か？」

声をかけ揺さぶり、身体を起こしてやる。少年は気絶していないものの、瞳は小刻みに揺れ呆然とした表情を浮かべていた。これではすぐに治る様子がない。錬金術師に、スピラによる症状の気付け薬を貰ってこなければ。

少年を横にし、街へと振り返り見下ろす。すでに門をくぐって先を進むルーナの姿があった。エンジはその背を、また睨む。

しかしエンジは知らない。

エンジが少年の様子を見ている際に門をくぐってきたルーナが、一瞬だけ彼を振り返って首をかしげた。

「……」

訝しむように少し不安げな表情を浮かべ、しかし彼女は何も言わずエンジに背を向けた。

第一章 スピラの輝き（06）（後書き）

第一章 スピラの輝き 終

第二章 静寂の兆し（01）

杖の先についた白い半透明の球体が、全てを飲み込むような暗闇を照らしていた。しかし暗闇はそれすらをも飲み込むうとしている。そんな暗闇の洞窟の中を、エンジ達は進んでいた。

先頭に光を灯した杖を握るシギ、その後ろにはエンジとセンフィ、そして最後尾にはカロンとロロネと、五人はまとまって進んでいる。明かりは二つだけ。魔法使いのシギが握る杖と、錬金術師のロロネが被る帽子からひょっこりと生えた二本の触覚の先にある小さな二つの明かりだけ。しかもそのロロネの帽子の明かりは、その目の前しか照らし出さない。実際に周囲を照らしているのはシギの魔法だけだった。

「じめじめするうー、キモチワルイ！」

エンジが後方へ振り返ると、ロロネが跳ねていた。帽子の明かりも跳ねている。

「まだなのー？ ボク耐えられない！」

「我慢しろ。俺だって嫌だ」

そう溜息を吐くと、ロロネはふくれ面になりこちらを睨んできた。不機嫌そうに尾が揺れている。と、その尾をロロネの隣を歩くカロンがシンバルを鳴らすかのように両手で勢いよく捕まえる。ばしん、とその音が洞窟内に響く。

「痛い！」

悲鳴が反響する。ロロネが飛び上がり、自らの尾を掴むカロンの手に平手打ちした。先ほどのカロンのように派手な音はしなかったものの、それもまた響く。するとカロンは両手をそのままにしたまま、痛がる様子もなく首をかしげて、

「何するんだよー？」

「それはこっちの台詞だよ！ 尻尾はやめて、痛いから」

「でも、ぴこぴこしてると気になるんだけど」

カロンが無邪気な笑顔を浮かべる。しかしロロネは自らの尾からカロンの手を引きはがすと、その尻尾の先を自分の手で優しく握り、自分の前へと持つてくる。もう尾を他人に触らせる気が無いらしい。

「魔物にまで遊ばれたら困るもんな」

そんな様子のロロネをエンジはからかう。冗談のつもりだった。しかしロロネは顔を青ざめさせて震え上がった。

「尻尾ちゃん切られたらどうしよう……」

ロロネは自分の尾を見つめ、そして服の中へと押し込んだ。そんなに心配しなくてもエンジは思ったが、この湿気に寒さだ、ロロネは大分気が滅入っているのかもしれない。ウロウ族は水や寒さに弱いのだ。特に水に関しては、少しでも濡れること、湿気が多いこと、その程度でも耐えられない。

水が滴る音が洞窟のあちこち反響して耳に届く。五人の足音も響いている。こつこつとした岩の足下は濡れている上に水溜りがところどころにあり、気をつけていないと滑ってしまふ。空気は冷たく

冬のもののようで、ヒルのような生き物が多く見られる。壁、足下、天井、その青白いヒルのような生き物が多く張り付いている。そのヒルはシギの光に照らされると、それを嫌って五人から離れていくが、時折興味本位なのか、虫のようにシギの明かりを狙って落ちてくる。またエンジ達をも狙って落ちてくる。いままで落ちてきたものは全て避けてきたが、落ちてきたことに気付かず身体にくっついていいるのがいるかもしれない。そう思うと、気持ち悪くて仕方がない。

「わぁ！ やだ！」

センフィが悲鳴を上げる。

「くつついた！ やだ、とつて！」

青ざめた顔で自身の手の甲を見ている。手の甲には一匹のヒルがくつついている。

するとシギが振り返る。無口な青年の顔が明かりに照らし出されている。シギは無言でセンフィの手の甲にいるヒルを見ると、素手でそれを掴み取って壁へと投げつけた。ぺちやり、と気味の悪い音がする。

「何なのよこの洞窟、ヒルだらけじゃない。こんなところにいたら、いつかヒルまみれになって、血を吸われ続けて、死んじゃうんじゃないの？」

センフィは壁に張り付いている何匹ものヒルを見て、身体を震わせる。

「……こんなところに、大型の魔物なんているのか？」

シギも呟く。確かにその通りである。こんなところに魔物が住んでいれば、この沢山のヒルに襲われてしまわないだろうか。しかし巨大な魔物がこの洞窟を住処にしているという。何らかの方法でこのヒルと共存しているのかもしれない。だがその魔物を早く見つけないと、こうしてさまよい歩いている自分達がヒルの餌になってしまう。

事の発端は三日前。デーマのものに、一匹の伝書鳩が手紙を携えてやってきた。ロゼラスの街から北東へ大分離れた村からの手紙だった。だがその手紙の内容によると、その村は壊滅したらしい。巨大な魔物に襲われたそうで、この手紙は近くの別の村に逃げ延びたその壊滅した村の住人によって書かれたものだった。要件はその魔物退治の依頼。

そうしてその任務を受けたエンジ達は近くの村を拠点にし、こうして洞窟を探求していた。しかし一向に何も見つからない。長い間この洞窟を歩き続けて数回休みもした。だがこの洞窟はずっと奥が深いらしい。

不意に、先頭を歩いていたシギが立ち止まる。思わずその背にぶつかってしまう。エンジも立ち止まった。すると背にカロンがぶつかってきた。全員がその場に立ち止まる。

「どうした？」

エンジはシギに尋ねた。するとシギが杖を正面へとゆっくり振った。これから行く先が光に照らし出され、そこにいたヒルが光を嫌って這い逃げる。そうして照らし出された行く先は、二手に分かれ

ていた。

「どちらへ行く？」

シギが振り返る。エンジは首を傾げ、センフィに聞いた。

「なんか、わかるか？」

「あんまり……」

センフィはそう言いつつ、シギの前へと進み分かれ道の中央へ立つ。そしてまずは左の道へ少し入り、それから出てきて今度は右の道へと入り、そうしてシギの前へと戻ってきた。困惑したような表情を浮かべ、二つの道を睨み、

「正直、何もわからないわ。ただこっちの道のほうから風が吹いている気がする……」

と、左の道の方を指差した。左の道は、右の道よりも広い。

「……左の道にいるかもな、その巨大な魔物。こっちの方の道が広い。でかい魔物なら、こっちの道を通るだろ」

エンジは言った。すると突然背後からロロロネが飛び出し、左の道の前へと躍り出て空気の臭いでも嗅ぐような様子で虚空を見つめ、そして目を閉じた。服の下に押し込んでいたはずの尾が勢いで顔を出し、ゆらゆらと猫のそのように揺れる。

「……乾いた空気」

寝言のように、ぼんやりと呟く。

「太陽の匂いがする……暖かいの……」

そうして左の道へと駆け出してしまった。慌ててシギがその背に手を伸ばす。しかしその手も届かず、ロロロネは洞窟の奥へと姿を消してしまった。小さな二つの明かりが、消える。

「ロロ待って！ 一人じゃ危ないわ！」

センフィが叫び、その声が洞窟内に反響する。しかしロロロネが戻ってくる様子はない。

「追うぞ！」

一人にはできない。エンジが叫ぶと、シギが駆け足で先に進む。明かりが洞窟の奥へと消えていき、その後をセンフィが追う。そうしてエンジも追おうとしたが、不意に背後のカロンに服の背を掴まれた。驚いて振り返ると、エンジではなく虚空を見つめたカロンが、怯えた表情を浮かべていた。

「待って、オレ、真っ暗だと何にも見えないよお……！」

亜人であるレイモン族は、一族そろって鳥目で暗いところでは何も見えない。ロロロネの明かりが消えて、しかしまだ向こうにシギの明かりがあるにもかかわらず、何も見えなくなってしまったらしい。

「シギ！ 戻ってこい！」

エンジは叫んだ。すぐにシギとセンフィが驚いた表情をして戻っ

てくる。エンジは二人がやってくると、シギのもとへとカロンの背を押した。それで二人は何が起こったのかを理解したらしい。

「離れるな」

シギはカロンのそう言うのと、洞窟の奥へと進んでく。カロンはシギの背にびったりくっついて進む。エンジとセンフィもその後を追った。

第二章 静寂の兆し（02）

四人の足音と水の音が洞窟内に響く。耳を澄ませば、ロロロネの足音らしき音も遙か遠くから響いて聞こえる。暗い中を駆け抜ける光に驚いたヒル達が逃げている。と、エンジはふと気付く。壁に張り付いているヒルの数が、進むにつれて段々と減ってきている。それと共にこころなしか、冷たい空気が暖かくなってきたように感じる。洞窟の幅が、徐々に広がっていく。——そうして暗闇の先に小さな光が見え、四人はその光の中へと飛び込んだ。

エンジはその眩しさに目を瞑り、立ち止まった。しかし瞼を通してその光は眼球を刺激する。周囲が不意に春独特の暖かな空気に変わり、重い湿気も跡形もなく消え去り、眩しい光の中で世界が一変した。全ての音が消え、一瞬だけ静寂になる。清い水のせせらぎ、そよ風に揺れる木々の葉の音が聞こえる。それから心地のよい甘い匂いを感じた。

「何だ……」

目をゆっくりと開ける。それでも視界は光で真っ白に染まっている。しかし段々と目が慣れてくると、その様子が徐々に見えてきた。

そこは岩壁に囲まれた、楽園のような場所だった。ぽっかりと丸く開いた上空から青空が見え、温かい日光が差し込んでいる。その日光の差し込んだ先の地面を綺麗な黄緑色をした草が覆い、また美しい花も咲いている。大樹もその草地を囲むようにしてあり、どの木にも水彩画のように淡くしかし鮮麗な桃色の大きな花をいくつも咲かせている。甘い匂いがするのは、どうやらこの花のためらしい。

周囲を見回せば、花以外にも実をつけた木がある。その桃のような実をつけた木はどれもたわわに実をつけ風に揺れていた。草地の奥、影の落ちる場所には岩壁に面して大きな池があり、日光に照らされた一部がきらきらと輝いている。近くの岩壁の隙間から水が飛び出し、その池に流れ込んでいた。そこは水彩で書かれた鮮やかな風景画が、命をもつて実現したような場所だった。

ロロロネはそんな絵に描いたような美しい風景の、草地に寝転んでいた。上機嫌な様子で尾を振り、日光に全身を晒している。

「わー！」

そう声を上げてロロロネ同様に草地に身を投げたのはカロンだった。草地に寝転ぶと仰向けになり、深呼吸する。

「こんなところがあつたなんて……」

エンジンも思わず口に出してしまう。それほどに、ここは美しく、どこか神秘さも漂う場所だった。

日向へと進むと、日光がとても暖かかった。先程まで寒くて暗い気味の悪い洞窟にいた身だ、久しぶりの外の空気と日光がひどく身にしみた。そうしてエンジンは伸びをする。

と、シギが早足で歩き出したかと思うと、寝転ぶロロロネの横に立ち、見下ろす。気持ちよさそうに日光浴をしていたロロロネだが、そこへ影が落ち首を傾げてシギを見上げた。するとシギは、何の前触れもなく、片手に握る杖でロロロネの頭へ振り下ろした。杖の先の先程まで輝いていた球体がロロロネの頭に直撃し、派手な音を立てる。いまだに頭に被っている触覚のような二つの明かりが跳ねる。

「痛いっ！」

ロロロネが強打された頭を手で押さえて飛び上がる。そして涙目になって困惑の表情を浮かべ、シギを見上げた。シギは、怒っているような様子でロロロネを見下ろしていた。

「何……？」

少し怯えた様子でロロロネは身を縮めた。シギは何も言わずに見下ろし続ける。すると、シギの背後からセンフィが顔を出した。

「あんたが勝手に一人で走り出すから、怒ってるのよ。何もなかったからいいけど、もしここに例の巨大な魔物がいたら、あんた、どうなってたと思ってるの？ 危ないじゃないの」

「……ごめんなさい」

ロロロネはそう、悲しそうに誤った。いまになって我に返ったのだろう。シギは深く溜息を吐き、そうしてもう一度ロロロネを見下ろし、周囲へと視線を移した。

「気をつけるよ、お前はいつもそうやって勝手に動くんだから」

エンジは腰に両手をロロロネを見下ろす。あーい、と、ロロロネは拗ねたように返事をし、しかし立ち上がると嬉しそうに周囲を見回した。

「でもここ、すごくない？ まるで夢見たいに綺麗だよ！ 見たこともない花や果物があるし、そうだ、持ち帰って調べてみよう！ それで新しい薬を作るの！」

そうしてロロロネは立ち上がると、近くの花咲く木へと走っていった。

しかしエンジはこの場所に違和感を覚えていた。どうも妙な雰囲気があり、顔をしかめて周りを見回す。カロンが寝転んでいる。ロロロネが木を見上げている。センフィは影にある池を見下ろしている。

シギと目が合う。シギは相変わらず無表情でこちらをみつめていた。そしてつと、首を傾げる。シギもこの場に、何か違和を感じているらしい。

エンジは一体これは何が原因なのかと、その理由を探し今度は細かいところまで周囲を見回す。あの洞窟が地獄なら、ここは間違いなく楽園だろう。清らかな水に沢山の果物、自然に溢れている。もちろん先程の洞窟の中のようにヒルなんていない。あのヒルは洞窟のように寒く暗い場所にしか住めないのだろう。

と、エンジはそう考えて、違和の正体に気がついた。

ここには動物の姿が見られないのだ。

水もあり、食べ物もある。環境もいい。そうであるにも拘わらず、動物の姿が一つも見られない。鳥のさえすりすら聞こえない。こんな場所なら、鳥が群れていてもおかしくないのに。

「動物がいないんだ」

エンジはシギに言う。シギは首をかしげたままだ。

「動物がいなんだよ。こんなにいい場所なら、動物がいてもおかしくないだろ？ てか、動物がいらないとおかしいんだ」

「……何故動物がいらない？」

「それは……」

そう言われて、考える。何故こんなにもいい環境に動物が一匹もいないのか。考えられる理由は、一つ。

「ここはとんでもない奴がいるってことか？」

「……巨大な魔物」

二人は顔を見合わせ、確信した。エンジは足下に寝転がるカロンをつま先で軽く小突き、「起きろ」と言って立たせる。そしてロロネが向かっていった木の根元へと行き、いつの間にか木に登って花と実を集めていたロロネを見上げる。ロロネはエンジに気付くと笑顔を見せる。そして手に持つ沢山の花と実を見せ、

「ねえ見て！ いっぱい集めたよ」

しかしその笑顔は消えた。

「でも鳥がいらないね。珍しい花と実があるから、珍しい鳥もいるのかなって思ったけど、全くないね」

「ああ、他の動物もいないんだ。とりあえず、降りてこい。どうやら俺達は地獄から楽園へ来たと思ったが、ここはまだ地獄の続きらしい」

ロロネは首をかしげた。しかし何も言わずに降りてきた。抱える沢山の花と実を肩にかけてバッグへと押し込む。

次にエンジはセンフィを呼ぶ。

「センフィ！ ちょっと来てくれ」

しかしセンフィは影の落ちた大きな池のほとりに立ったまま、動かない。池を見下ろしている。

「センフィ！」

もう一度声をかける。しかしやはりセンフィに動く様子はない。聞こえているのだろうか。カロンが呟く。

「センフィ、どうしたんだろう」

と、センフィがこちらを振り返る。その表情は何故か少し青ざめていて。

エンジはセンフィのもとへと駆け寄った。何かあったのかもしれない。しかしセンフィの隣に来てみるも、彼女に変わった様子はない。ただ、顔をこわばらせて池の中を見下ろしている。

涼しげなせせらぎが間近に聞こえる。水面は陽光に柔らかく輝き、静かに波立っている。池は思った以上に底が深いようで、覗き込むと漆黒がどこまでも続いていた。センフィはその闇を指差す。

「何かいる。この奥に、強いスピラを感じるの……」

そうしてエンジへと顔を向ける。

「間違いない。この池の底に、例の巨大な魔物っていうのがあるわ」

第二章 静寂の兆し（03）

「どうする？」

池のほとりに立ったエンジは、振り返って尋ねる。

「センフィが言うには、その魔物、この奥でいま眠ってるらしい。寝込みを襲えば簡単に退治できると思ったけど……相手は水の中だ」「爆弾放り込もうか？ あ、それか魔法をぶち込むのもいいかなあ？」

シギの背に上り肩を掴まったロロロネが尾を振りつつシギを見た。大きく垂れ下がった耳の片方が、シギの頭の上に乗っている。一体いつの間にこうなったのだろうか。しかしシギは頭を傾けているも、迷惑そうな表情は一切していない。いつも通り、無表情だ。

シギはロロロネを背負ったまま池のほとりまで進み、そして中を覗き込んだ。

「……俺の魔法じゃ底まで届かない。そもそも水と相性が悪い」「じゃあ、爆弾？」

ロロロネがバッグから黄色い紡錘形のそれを一つ取り出す。その手に収まる程小さい、レモンのようなスパイラル。しかし見た目に反して恐ろしい威力を発揮する、ロロロネお手製の代物だ。だが、

「お前のレモン爆弾でも、底までいかないだろ」

「うう……」

「じゃあ、どうするの？」

センフィが腕を組み、首を傾げる。エンジも腰に両手をあて、溜息をついた。

「どうするって……潜るか？」

「潜るのか！」

そう言ったとたん、カロンの跳ねた。

「潜って寝てる奴のところまで行って、ぼこぼこにするんだな？」

「ああ、そういうことだ」

「でも……誰が潜るの？」

センフィが困惑した表情を浮かべて両手の平を見せた。そして周囲の仲間を見回し、

「ロロは水ムリでしょ？ ウロウ族はみんな水がダメだから。それにシギも自分の魔法が水と相性悪いって言うし、私も弓矢よ、水の中じゃあ、ちよっとね……。カロンは鳥目だから底まで行って見えるかどうか……。それでエンジは……カナヅチでしょ？ 正直いま、池のほとりに立ってるのも嫌なんじゃないの？」

「ああ……」

そう言われ、エンジは申し訳なさそうに池のほとりから離れた。正直、ここに立っているのは辛かった。水を見ていると吸い込まれそうになり、落ちてしまいそうになる。

「じゃあ、オレ行く！」

と、カロンの両手を挙げた。

「オレ行つて、ぼこぼこにしてくる！　それで誘き出してくるから、準備しといて！」

「でもお前、暗いと何にも見えないだろ？」

「大丈夫！　多分見えるから！」

そうしてカロンは体験を手にすると、エンジの止める声も聞かずにすぐ池の中へ飛び込んだ。派手な音がし、水しぶきが上がり、水面が波立つ。中を覗き込めば、底のほうへと泳いでゆくカロンの後姿が見えた。その姿が徐々に闇へと消えていく。

「あーあ、行っちゃった」

ロロロネがシギから降り、池のほとりにしゃがみ深みを見下ろす。だがふとエンジを見上げると、

「ていうか、エンジって、泳げないの？」

「……ああ」

エンジはあまり肯定したくはなかったが、そう返事をする。するとシギがロロロネの横にしゃがみ込み、耳打ちする。

「昔リクペ川に落ちて、死にかけたらしい」

「……リクペ川って、ロゼラスに流れてる、あのめっちゃ流れが速くて怖い川？」

「そう」

「よく死ななかったね」

「それ以来水がトラウマらしい」

「……なあシギ、内緒話、聞こえてるぞ」

目を据わらせてエンジはシギを見下ろす。シギは立ち上がり、やはりなんともないような無表情をエンジへと返す。

「お前、変なところでお喋りになるよな」

シギは何も言わなかった。

エンジは再び池のほとりに近づいて、深みを見つめる。カロンの姿はもう見えなくなっていた。

水の中はひどく冷たかった。気持ちの良い冷たさではない、身を凍らせようとするような切れる冷たさだ。あの楽園のような場所にあったにもかかわらず、身体を締めるように冷たく身に染みる。それでもカロンは池の奥底を目指して泳いだ。大剣を握っていない方の手で水をかき、足を動かす。泳ぐことは苦手ではない、むしろ得意だった。しかし思うようにうまく進まない。大剣を握っているせいではない、この水が、この池があたかも地獄へと続いている道であるかのように、得体の知れない何か恐ろしいものをはらんでいる。そのためなのか魚の姿が一つもない。

底へと進めば進む程、空から差し込んでくる日光が薄れ水中は暗くなっていた。そうなつてくると、カロンは段々と不安になってくる。「多分見える」と言って四人を置いてこの池に飛び込んだものの、やはり暗いと見えなくなってしまう。もうすでに、ぼんやりとしか見えていなかった。

そうしていいよ日光がわずかになり、ついにカロンは何も見え

なくなってしまう寸前に来た。カロンは進むのを止め、その場に留まる。これ以上進めば、暗くて何も見えなくなってしまう。このま奥に進んでも、それでは意味がない。下手するとこの奥に潜む魔物に突っ込んでしまいかねない。

——仕方ねえや。

カロンは上を見上げた。わずかに差し込む日光が揺れている。と、その日光が落ちてきた。

「？」

落ちてくる小さな二つの日光は、まるで沈むかのようにゆっくりと降りてくる。カロンはそれに手を伸ばした。

ロロロネが被っていた、触角のようなライトのついた帽子だった。

こうして自分が暗闇を前に留まってしまうことを予想したのかもしれない。そうしてこれを水の中へ投げ込んだのだろう。だがロロロネのことだ、落としてしまっただけかもしれない。どちらにせよ、ありがたいことだ。

カロンはその帽子を被り、足下の暗闇を見下ろす。まだ暗いが、先ほどよりはずっとよく見える。

息はまだ持つ。カロンは更に奥へ奥へと深みへ泳いでいく。底へ向かえば向かうほど水が冷たくなる。といっても、いくら進んでも底は見えない。底は無いのだろうか。ここは何も無いただの漆黒の空間のようだ。

と、その空間にようやく底が見えた。そしてそこに巨大な丸い影があった。

——これが？

カロンはその巨大な影に近づいてみる。巨大な影には細かな毛が生えていて、それが水に揺れている。しかし、近づいてよく見るとそれは毛ではなく、羽毛だった。羽毛の巨大な塊は、わずかに膨らんだり縮んだりしている。生きているのだ。

——巨大な、魔物？

底にこれ以外のものはない。息もそろそろ苦しくなってきた。

カロンは大剣を両手に握り、そこへ自信のスピラを集中させる。大剣が熱くなり、刃を取り巻く水の中に小さな気泡が発生し、それに包まれた大剣は真っ白な泡の塊となる。

カロンはそれを、足下の羽毛の塊へ振り下ろした。

第二章 静寂の兆し（04）

「——来る！」

池のほとりに膝をつき水面を見下ろしていたセンフィが不意に立ち上がった。目が覚めるような鮮やかな萌黄色の弓と、銀に輝く鏃をつけた矢を背の矢筒から一本手にし水面の奥の深みに狙いを定めて構える。弦が引き伸ばされ、弧がゆっくりと曲がる。すると銀に輝く鏃の先に、震える小さな光球が生まれる。

エンジも無言でホルスターから銃を手にし、水面へと向けて構えた。ロロロネもバッグからレモン爆弾をいくつか取り出し、シギも自身の杖を両手で握る。

池に変わった様子はない。そこは先程と変わらず水の流れる音と風が草木をくすぐる音しかない、静かな場所だった。池の深みにも、変化はない。

だが、突然池が派手で大きなしぶきを上げて吹き上げた。爆発だった。そして楽園に響き渡るのは、甲高く耳障りな獣の叫び声。ビリジアンカラーの巨大な何かが、池の中から飛び出してきた。

それは鳥と魚をあわせたような奇妙な生き物だった。顔は鋭く細いくちばしを持つ鳥の顔、頭には派手なとさかが生えている。背中のは深い青緑色の羽毛に覆われていて、尾は蛇のように長くしなやかで三叉に分かれている。だが飛び上がった際に見えた腹は虹色に輝くうつろこにびっしりと覆われていて、広げた翼は白いらのようである。

——こいつが村を潰した魔物。

と、その魔物の青緑の背に何かがいた。カロンだ。カロンが魔物に深々と突き刺さったままの大剣を握っている。だが魔物が飛び上がったために、カロンの身体は浮いている。どうやら、魔物は大剣に刺され飛び上がり水の中から出てきたが、大剣を刺したカロンまでもを連れてきたらしい。

「オワソン！」

ロロロネがその魔物を見て何かを叫んだ。飛び上がった魔物は池のほとりへと、ちょうどセンフィがいるあたりへと落ちてくる。

センフィが急いでその場から横へと動き、直後に魔物がその場へと落ち地面に叩きつけられる。その衝撃に平穏だった楽園が激しく揺れ、木々の葉が舞いいくつもの実が地面へと落ちた。エンジンも思わず体勢を崩してしまうも銃はしっかりと握り続ける。

魔物が地面に倒れた瞬間、その背にいたカロンが大剣を手放し地面へと落ちた。カロンの姿が魔物の影へと消える。

その直後、エンジは銃の引き金を引いた。赤い閃光が飛ぶ。それと同時にセンフィも矢も放たれた。

エンジの銃弾は真っ直ぐに魔物へと向かって爆ぜたが、センフィの矢は違った。矢が放たれたとたんに鏃の先にあった光が輝き、その光が放たれた矢を囲むようにして広がる。そして光は五つの矢の形になり、宙を飛ぶ矢に引き連れられるようにして魔物へと飛んでゆく。そして矢と光の矢が魔物の青緑の羽毛に突き刺さり、その直後に光の矢だけが輝いて爆ぜた。

魔物がまた悲鳴を上げ、こちらを睨んできた。そして自身のもとへと走ってくるシギに気がつき、その嘴をわずかに開けて目を細めた。しかしそこへ今度はロロロネが攻撃を仕掛ける。

「おーい、こっちだよ！」

ロロロネは声を上げ、手に握ったレモン爆弾を魔物へ投げつける。それが何であるか知らない魔物は避けることもなく身に受け、爆弾は盛大な音を立てて破裂、爆発した。中に詰まっていた圧縮されたスピラが、目に痛いほど激しく輝く光となって放出され、空気中のスピラを揺らす。エンジはその光に耐えられず目を伏せた。それでもしみるように目が痛く、おまけにレモン爆弾の衝撃で周囲と自身のスピラが揺れ、全身を針で刺されているような感覚が襲う。センフィを見れば、弓矢を手にし続けているも彼女は座り込んでしまっている。あの爆弾で攻撃されていなくとも、彼女にはきついのだ。

しかしそれだけのことがありながら、使う価値はあった。魔物が身をよじって悲鳴を上げている。その間に魔物の影に走りこんだシギは、そこに倒れていたカロンを肩に担ぎ、急いでその場から離れる。そして振り返り、片手に握る杖を掲げる。その先についた水晶球が電撃を帯び、電撃は宙を走り魔物を捕えるようにして襲い掛かった。電撃は消えずに、あたかも網のように魔物を縛る。

その間にシギはエンジの隣までやって来た。背負ったカロンを、ゆっくりと降ろす。

「大丈夫か？」

エンジはカロンに声をかけた。地面に降ろされぐったりと座り込

んだカロンは不調そうに目を閉じ首を傾げて、

「うーん、びっくりしたあ。あいつ、いきなり飛び上がったぞ？」

そして目を開けて、目前で電撃の網から抜け出そうと暴れている青緑色の巨大な魔物を見上げた。

「あーあ。剣、置いてきちゃったよ。どうしろっていうんだ……」

と、センファイが疲れた様子でこちらへ走ってきた。息を切ってこちらまで来ると、両膝に手について呼吸を整え、そして顔を上げる。

「あれなんなのよ……。大変そうよ、スピラ、強いもの」

「あれはオワソン」

センファイの背後から、ロロロネが出てくる。

「前、ディーモの部屋にある本で見たよ！ いまじゃあんまり見られない魔物だよ！」

「……ディーモの部屋にある本で見たって？」

ディーモの汚い部屋に山積みになれ崩れているあの沢山の分厚い本のことだろうか。エンジは思わず顔をしかめた。あの中にある魔物について書かれた本は、伝説の魔物であつたりいまは絶滅してしまった魔物について書かれたものばかりだ。ロロロネの言うことが正しいければ、どうやら自分達はとんでもないものに遭遇してしまったらしい。

「しごとそうだなあ……どうする？」

カロンがあたかも幼い子供が母親に「あれは何？」と尋ねるように首をかしげる。どんな時でもカロンはこんな調子だ、緊張している様子なんて、微塵も見られない。

その時「あつ」と小さく声を漏らしたのはシギだった。直後に何かが破れるような音と、頭をしめつけるようなオワソンの甲高い咆哮が楽園に響き渡った。魔物の叫びは強力なその不可視のスピラの波に乗せた風となり、楽園の中を吹き荒れる。そしてこちらへと押し寄せ、エンジ達をなぎ払う。

強いスピラの波を感じ、反射的にエンジのスピラが高ぶり身体の中で燃え上がった。それが見えないスピラとなり、周囲を漂う自分のスピラが濃くなる。そして押し寄せてきたオワソンのスピラと目前で衝突した。

高い不協和音が鳴り響き、スピラは火花が散るように輝いた。盾と化した自分のスピラと、押し寄せてきたオワソンのスピラが競り合っている。魔物のスピラに押されそうになるも、エンジは一步踏み込み更にスピラを燃やした。すると先ほどとは違って澄んだスピラの衝突音が爆ぜた。その輝きも火花のようにいくつもの細かなものではなく、拒絶を形にしたような一つの激しい光となってオワソンのスピラを押しつける。

隣をちらりと見れば、シギが自身の前に風のバリアを作って魔物のスピラとその風圧に立ち向かっていた。シギのバリアの後ろにはカロン、センフィ、ロコロネがいる。

と、その四人に大きな黒い影が落ちた。

「お前ら伏せろ!!」

エンジは声を張り上げ銃を四人の上空へと向けた。そして一発、二発と発砲する。放たれた閃光は、四人を狙って落ちてきていた濁った緑色をした巨大な針を貫通した。そのとたん針は空中で粉碎し、粉となって霧散した。――凝固したスピラできていたのだ。

オワソンの放った不可視のスピラが弱まってきた。顔をあげると池の前に自由の身になったオワソンが立っていた。低く唸り、こちらを睨んでいる。威嚇している。と、そのえらのような翼を広げた。するとオワソンの前に大きさは先ほどよりも小さいが、針の形をしたスピラの結晶がいくつも形をなして現れる。矛先は全てこちらへと向けられている。

「わお」

間の抜けたロロロネの声。その直後に針が一齐に放たれた。

しかし誰かにも刺さりはしなかった。エンジとロロロネは右へ、カロンとシギは左へと避ける。後方へと跳ね上がり針を避けたセンフィは、地面に着地する前にはもう弓矢を構えていた。針の雨が止み地面に片膝ついて着地すると、構えた三本の矢を握った右手を放した。スピラを纏った三本の矢が、風を切ってオワソンの喉に刺さる。しかしオワソンはそれに構わずセンフィをついばもうと素早く頭を下ろしてきた。センフィはそれをまた跳ね避ける。

「ロロロネ、ゴーレムを」

エンジは銃口をオワソンに向けながら、傍らのロロロネに声をかける。

「奴の動きを止める。あんなでかいのに暴れられたら厄介だ」
「分かった。時間かかるから、助けてね」

そうしてロロロネはバッグの中から透明な液体に満ちた小瓶を取り出すと、そのコルクを抜いて中身を足下の草地へと流す。草地はその液体を全て吸い取った。そしてロロロネはそこにしゃがみ、またバッグから取り出した小さな鉄片を地面に置く。その鉄片に、ロロロネは銀の針で何かを刻み込む。するとそこを中心にして、地面付近に魔法陣が姿を現した。錬金術による、魔力を使った錬成の際に現れるものだ。

第二章 静寂の兆し（05）

向こうではシギが魔法を唱えていた。不意に握る杖の水晶球が輝いたかと思うと、シギはそれを地面へと刺す。するとそこから太い緑のツタが何本も溢れ出し、オワソンの足へと絡みついた。ツタはそこから身体へと這い上がり、オワソンの身体を拘束する。

しかしそれだけでオワソンを止めることはできなかった。オワソンは絡みつくツタから抜け出そうと暴れる。這い上がってくるツタをついばみ、食いちぎっている。そうして魔物がツタに気をとられている間にエンジはまた発砲した。離れにいるセンフィも矢を放っている。発砲音と矢が風を切る音が鳴りやまない。

すると不意にオワソンが怒った様子で鳴き声を上げた。そして突然長い尾を振った。長く大きな三本の尾は、地面近くを鞭のように風を切ってしまった。

しゃがんでいたロロロネには、頭の上を通過するだけで当たらなかった。だがエンジはそれを避けられなかった。鞭のような三本の尾が身体にめり込むようにして衝突する。エンジは踏み込んだがそれもかなわず、そのまま薙ぎ払われ虚空へと投げ上げられた。しかし、銃は手放さない。

「エンジー!!」

自分の名を呼ぶ悲鳴が聞こえた。カロンの声だ。そう思ったとたん、一瞬の浮遊感が失せ落下が始まる。その際にちらりと見えた地面は遠かった。目前を、自分を薙ぎ払い打ち上げたオワソンの尾の先が揺れている。

考えるよりも先に、エンジは銃を握っていない左手をそのオワソンの尾へとのばした。そして何が起きても放さないようにしっかりと握る。その次の瞬間、尾が激しく揺れた。視界に映る景色が飛び、遠心力が襲う。しかしエンジは手を離さなかった。

ちょうどその時、ロロロネが練成に成功したようだった。地面がずん、と一回揺れる。すると激しく揺れていた尾が大人しくなり、ようやくエンジはオワソンを見下ろした。見ると、オワソンの前にこげ茶色の岩のように厳つい巨人がオワソンの首と左の翼の付け根を巨大なその手で握り締め、動けないようにしている。土で練成されたゴーレムだ。

と、オワソンがそのゴーレムに抵抗して暴れ出す。しかし身体から土くれを少しこぼすだけでゴーレムは全く動かなかったが、オワソンの動きに伴って尾が激しく揺れた。するとまた飛び始めた景色の中、尾がよくしなって曲がり地面が間近へと迫ってくる。その瞬間、エンジは尾から手放し、地面へと転がった。衝撃が身体を襲い、全身が痛む。しかしすぐに片膝をついて起き上がると、狙いを暴れるオワソンへと定めた。銃に集中し、スピラを溜める。赤い光が銃口の先に灯る。

カロンが駆け出しているのが見えた。武器も何も持たないカロンはゴーレムの背後まで走ると、あたかも木登りでもするよにその土の背に跳び乗った。そしてそこからゴーレムの頭へ、そこでとまらずまた跳ね上がったかと思うと危険を顧みず、なんとオワソンの身体へと跳び移った。

しかしゴーレムに抵抗しているオワソンは、そんなカロンを気にも留めない。だが、カロンはオワソンの身体の上を駆け、そこに突

き刺さったままの自分の大剣をためらうことなく引き抜いた。切れ目からは黒色のような血が勢いよく噴出す。

オワソンが悲鳴を上げる。そして目の前のゴーレムから自身の上にいるカロンへと標的を変え、振り返った。

刹那、エンジは引き金を引いた。十分にチャージされた強力な銃弾が発射され、それは巨大な流れ星のような形でオワソンの鋭い右目へと飛んでいく。以前クローディと戦ったときに使ったスピラの奔流のようなものではない。一点に狙いを定め、そこに全てのスピラをぶつける、集中型の銃弾だ。

銃弾はオワソンの顔へと向かって宙を駆け、そしてそこで輝いた。オワソンが悲鳴を上げる。それと同時に、カロンがオワソンの身体の上を走り、三本の尾の根元へ向かったかと思うとそこで思いきり剣を振り下ろした。すでに血で濡れていた刃は三本の尾のすべてにやすやすと切り入り、そして三本とも切り落とした。

切り落とされた三本の尾が、地面に落ちる。尾があつた場所からはその瞬間血が噴水のように吹き出た。オワソンはもう、悲鳴を上げることもできない様子で痛みに身をよじった。

そこへシギが魔法を唱える。先程から輝き続けていた杖の水晶が、いよいよ増して光り輝き青紫色の電撃を帯びる。そしてそれが音を立てながら天へと打ち上げられた。眩しい日光の中で青紫色の電撃の塊が輝き、それが細長い形を成して棒のようになって下へと落ちてくる。

それは槍だった。落ちてきた雷の槍はその先が真下に向いたと思つたその直後、短いが大きな音を立ててオワソンの身体を貫いた。

ゴーレムがオワソンから手を放し、一步退く。暴れていたオワソンが、その瞬間不意に止まった。失われていた静寂が、刹那に戻ってくる。しかし雷撃のわずかな音がしたかと思うと巨大な槍が細い電撃に変わり姿を消し、そしてオワソンがゆっくりと倒れた。

オワソンが倒れ、また地面が揺れた。草木もゆれ、水面も波立って揺れる。落ちた葉が、風に待って地面に落ちた。

スピラ使い達は誰一人として動かなかった。ただ、倒れたオワソンを見つめる。

「……倒したの？」

ロロロネがゴーレムの背後からオワソンを見つめる。と、オワソンの青緑の中からカロンが顔を出した。

「死んだみたい」

カロンにそう答えられ、ロロロネは好奇心に満ち溢れた笑顔でオワソンへと駆け出した。ロロロネはこういった未知の魔物が好きだ。その上錬金術師だ、素材となるものを集めたがる。

向こうを見ればセンフィが座り込んでいる。もともと戦闘に向いていない彼女だ、少し疲れたのだろう。

シギは敵がいなくなった今、杖を背負っていた。そしてオワソンの頭の前に立っている。オワソンの頭を、何か奇妙なもの見るような表情で見つめている。

シギが何を見て何を考えているのか、知らずにエンジは分かっていた。エンジはシギの隣まで進むと、シギが見つめている先へと視線を移した。そこにはオワソンの顔がある。開いたままのいまだに鋭い目、人を一口で飲み込めそうな巨大な嘴。しかし嘴は大きくかけていた。自分が放った強力な一撃が、そこに当たってかけたのだろう。

「……お前の腕を疑っているわけじゃない」

シギがその嘴を見つめたまま言う。

「目を、狙ったんだな？」

「……ああ」

エンジは静かに肯定した。

だが銃弾は大きく的外れて、目ではなくこうして嘴に当たっている。時折狙いがずれるということは自分でも皆も知っている。しかしこれはあまりにも大きく外れていた。

「……少し、休むか」

そうしてシギは座り込んでいるセンフィのところへと歩きだす。エンジはそこに立ったまま、かけたオワソンの嘴を見つめていた。

何故こんなにもずれたのだろう。思い当たることは、何もない。

手に握る銃を見つめる。今日もいつもと同じく手入れをした。銃に問題はないのだろう。

顔をあげる。オワソンの身体の上を、カロンとロロロネが跳ねている。

右目をこする。そしてもう一度顔を上げる。二人は変わらず楽しそうに跳ねている。

第二章 静寂の兆し（06）

街の市場の通りはいつものように活気に溢れていた。多くの人々が会話し笑いあいながら行き交い、通りの横では並んだ露店が声を上げている。その棚に並ぶものは見慣れたもの、あまり見ないもの、果てには知らないもの、用途の分からないものまである。こうした数々の露店は、そもそも街にある店のものだったり、いままでの旅で得たものを売る旅人のものであったり、遠方の地からその土地でしか手に入らないものを売りに来た隊商のものであったりと、売られているもの同様商人も様々だ。市場はこの街だけではなく、遠方の街とふれあえる場だ。そのせいか、こうして見ているだけで楽しくなってくる。

「中々、良い魔石ですわね」

そんな声がして、周囲の店を眺めていたルーナは振り返った。ここでは先ほどからこの店の売り物を見つめていたヴィスが、棚に山積みになされていた輝く小さな石の一つを手にとって見つめている。猫のような髭が、前へ向いていた。

「ふうん。どれも質が良いですね」

「最近採れる魔石はどれもいいものばかりだね」

カウンターの向こうに立つ、この露店の主である鉦山夫が笑う。そう言われてルーナもその山積みになれた魔石を見つめた。どれも濁りが少なく、きらきらと輝いている。長年地の中でスピラや魔力を吸い、力が染み込み満ちている証だ。

「買いましょう、ルーナ」

と、ヴィスがこちらへと顔を上げる。だからルーナは一步前に出た。ヴィスはすでに両手いっぱい荷物を抱えていて、もうものが持てない状態だ。その上魔石は石だ、それなりに重い。ヴィスの抱える荷物の上に置くことができて、ヴィスがそのまま持ち歩けるか怪しい。それに比べ、杖を背負っているとはいえどもルーナは小さな袋を片手に提げているだけだ。魔石を持つのは当然のことだろう。そもそも、ルーナはこのためにヴィスと共に市場へやってきたのだ。

「どのくらい要りますか？」

ヴィスに聞く。しかしヴィスは「さあ？」と首を傾げた。

「何に使うか分からないんですの。なんせ、デイーモに頼まれた買い物ですからね」

それは仕方がないと思う。デイーモは欲しいものだけを口にして、何に使うか、どのくらい必要なのかを全く言わない。

仕方なくルーナは適当な数を鉱山夫に伝えた。結構な数だった。しかし鉱山夫は少し大きめの紙袋にその魔石を全て詰めてくれた。そうして言われた金額は、この量と質よりも安いものだった。

「悪気がしますね」

そう言いつつも、ルーナは言われた金額を手渡し紙袋を受け取った。紙袋は思ったよりもずっと重かった。だがルーナはそれを両手で抱え、ヴィスと共にその店を後にした。

「ごめんなさいね、こんな荷物持ちなんてさせてしまいました。本当はウールカに手伝ってもらうつもりだったのですが、あの野郎、いつの間にか消えてしまいましたの」

ヴィスのしゃべり方はおかしい。丁寧と見せかけて時折そうではない。

だがもう慣れている。ルーナは笑った。

「平気ですよ。少し重いですが」

「カロンやシギに手伝わせても良かったのですが、任務から戻ってきたばかりでは少し言いにくいですし、いつ戻ってくるか分からないですの。そう考えると、あなたしかいませんでしたの」
「カロンやシギ、今日帰ってくるんですか？」

ヴィスが頷いた。

彼らは今、この街から少し離れた村に遠征に出ているはずだ。それが今日、ここへ戻ってくるのか。

つまり——エンジが戻ってくる。

深い溜息を一つ吐く。するとヴィスがちらりとこちらを見てくる。

「腹立たしいのですか？」

「はい」

正直に答える。あの男は見るのも辛い。顔をあわせるのも嫌だ。会話するなんて論外だ。

「ところで、これらは何のために買ったんですか？」

エンジについては考えるのも煩わしい。ルーナはすぐに話題を切り替えた。

「一部はクラン・ギルド内で使うもの、あとの殆どはディーモが使うものですわ。最近はやたらと魔物が活潑ですものね、ディーモも何かと対策を練っているようですわ。こうした道具を使って何かしているみたいですからね」

「そうなんですか……」

ディーモについてはよく分らない。

ルーナがクラン・ギルド「ノーウェン」に入っしたのは六年前のことだった。その時から今まで、ディーモという人物の下で戦ってきた。しかしディーモが戦っているところを一度もみたことがない。というよりも、ディーモがスピラまたは魔力を使っているところを一度もみたことがない。おそらく、他のスピラ使いも見たことがないのだろう。隣にいるディーモの秘書のような存在であるヴィスマでもが知らないのだ。だが、今日市場で買ったのは殆どが錬金術に使う素材だ、いま自分とヴィスが抱える荷物の大半がディーモの使うものであるのなら、ディーモは錬金術が使えるのかもしれない。

そんなことより、と、ルーナは思う。

そんなことより、どうしてこんなにも魔物が活潑なのだろう。各地から魔物による被害を受けたという話がこの街に流れ込んで耐えない。そのため街の中では十年前のようなことが起きるのではないかと怯えている人々もいる。クラン・ギルドのスピラ使い達も、その殆どが魔物退治の任務で街にいない。かくいうルーナ自身も昨

日魔物退治の任務から戻ってきたばかりだ。しかし今日一日を休んで明日になれば、また新たな任務を任せられるのだろう。

任務を出すデイーモも、本当は帰ってきたスピラ使いにまたすぐ別の任務を与えて魔物退治に向かわせたいに違いない。しかしデイーモがそうはせずに帰ってきたスピラ使いを休ませる。疲労が残った状態で次の任務に向かわせると危険だ、下手をすると死んでしまいかもしれない、魔物に殺されてしまいかもしれない。任務から帰ってきた後こうして一日休めるのは、デイーモの気配りのおかげだ。謎の多い人物ではあるが、仲間を大切に思っているのは間違いない。

グイスの後に続いて歩き、気が付けば市場を出て広場近くの大通りまで来ていた。市場に比べ、少し人氣が減る。道の向こうに広場が見える。「ノーウェン」の本部はすぐそこだ。

帰ったら、傷薬をいくつか練成しようなんて考える。ルーナは魔法使いではあるも、錬金術も一通り使える。そもそも、魔法を教えてくれた師匠は――厳密に言うとな魔力の使い方を教えてくれた師匠だが――魔法使いではなく錬金術師である。錬金術に関する知識は一通りある。その上魔法使い同様に魔力を力とするため、錬金術師は少ない。するとクラン・ギルド内で支給される錬金術で作った薬もあまりない。帰ってもどうせやることなんて腕を磨く他あまりないのだ、魔物退治で忙しいこの頃、せめて仲間の役に立つことを一つや二つしたい。それに薬の練成はそう疲れるものではない。

そうして薬を作って、皆が命を落とすことのないようにしたい。そんなことを願う。

憂鬱に深く溜息を吐き、目を閉じる。通りを行き交う人々の雑踏の賑わいが遠のく。

だが、何か妙な気配を感じ、すぐにうつすらと目を開いた。と、
ヴィスが不意に立ち止まり、ルーナも歩みを止めた。ヴィスの白い
毛に覆われた長い尾が、不思議な動きで揺れている。

「何かが、通り越していききましたわね」

ヴィスはこちらを振り返らずにそう言った。目を閉じ、空気のに
おいをかぐように顔をつと上げる。揺れていた尾がぴたりと止まる。
そうして目を開け、遙か前方を見つめた。

「ふうん、あの女ですわね、妙な気配がするのは」

ヴィスの視線の先に、一人の少女がいた。十代半ばくらいの歳の
少女だ。長い茶色の髪を揺らしながら、向こうの広場へと走って行
く後姿が見える。

特に変わったところはないが、何か違和を感じる。

少女の姿が人ごみに紛れて見えなくなる。ヴィスが早足で進み出
した。

「変なものだったら面倒ですわ。追いかけましょう」

そうしてヴィスも人ごみの中へ紛れてしまう。ルーナも慌ててヴ
ィスに続いた。ヴィスの動きは速い。人ごみの中、人を避けてすい
すいと先へ進んでいく。ルーナもその後を懸命に追う。

二人は、広場へと出た。そのとたん、場所が広がったせいか人
ごみが一気に薄くなり動きやすくなる。広場はいつもと変わらない。

中央にある噴水が日光を受けて輝き、その周りでは幼い子供達が駆け回り、スピラ使いと思われる見知らぬ人々が立ち話をしている。街に住む人々もこの広場を横断したり、近くにある店で買い物をしている。

あの少女の姿はどこにもない。そう思ったときだった。

「あのアマ、何の用ですの？」

ヴィスが耳をぴんと立て、そして口から小さな牙を見せて何かを睨んでいた。その視線の先にあるのは「ノーウェン」の本部、その入り口だ。少女はそこにいた。門をくぐり、中へ入ろうとしている。

「魔物にただで侵入される訳にはいけないのですが……」

不意にヴィスが抱えていた荷物を足下に落とすように乱暴に降ろした。そして屈んだかと思うと高く跳躍する。まるで、木葉が強風に吹かれて突然舞い上がるかのように軽々と宙に上がり一回転し、そして離れた場所であつたにも拘わらず、ヴィスは「ノーウェン」本部の門を越え、いまにも中へ入ろうとしていた例の少女の前に着地した。

突如目の前に下りてきたヴィスに驚き、少女が数歩後退る。そこへヴィスが追い詰めるように一歩前へ出た。

「我がクラン・ギルドに、何の用ですの？」

少女は何も言葉を発さない。ただ怯えてまた一歩退いた。その時、離れにいたルーナは少女の顔を見た。色白で細目である以外、何の変哲のない顔だ。しかし見た目は普通の少女でも、その気配は何故

か妙だ――魔物の気配がする。

第二章 静寂の兆し（07）

少女の顔に一切の表情はない。困った様子も怯えた様子もない。問いつめるヴィスを見下ろしている。ヴィスは目を細めて少女を見上げた。

「ここは、お前のような者が来る場所ではありませんよ。とっとと街から出て行きなさい。さもないと、害をなしていまいが刺身にしますよ」

と、ルーナは周囲の空気が僅かに重くなるのを感じた。

空気中の見えないスピラの濃度が上がり、じわじわと高まっている。

ルーナは抱えた荷物を投げ出した。乱暴に投げ落とされた紙袋から魔石が飛び出し、地面に転がる。しかしルーナはそれを気に留めず、背負った杖を手を取った。

「避けてくださいヴィス！」

そう叫んだのと同時に、少女の華奢な身体が紫の業火に包まれた。そしてそこを中心に、発せられた見えないスピラの波が高い音を立てて広がる。

とっさにルーナは杖を自身の身体の前を立てた。そこから白く輝く大きな魔法陣が盾になるように現れ、迫ってきたスピラの波を防ぐ。スピラの衝突音がし、魔法陣の盾が揺れた。

スピラの波はすぐに治まり、ルーナはすぐに掲げた杖を下ろした。魔法陣が消え失せる。目の前に広がる光景は先程と一変していた。子供達が突然のことに倒れ、泣き叫んでいる。街の人々が悲鳴を上げている。スピラ使いらしき人々は驚いて何かを見つめている——紫の炎に包まれた少女が、こちらへと振り返っている。彼女のすぐそばにいたヴィスの姿はない。

「皆さんいますぐ逃げてください！ 危険です！」

ルーナは叫んだ。紫の炎は爆ぜる音を立てながら勢いを増している。強大なスピラの塊だ。炎の中の少女がこちらを睨み、獣のように低く唸りだす。人々が怯えて逃げ出す。

「そのあなた達、子供達を」

杖を構えて前へと進み、そこにいたスピラ使いらしき人々に声をかける。蒼白な顔をした彼らは言われてすぐに頷き、そして噴水の周りで倒れている子供達を抱えて広場から離れていく。そうして、広場はルーナと少女だけになった。

少女は低く唸り続けたままルーナを睨むだけで何かを仕掛けてくる様子はない。だがその紫の炎は先程よりもずっと勢いを増していた。変化はそれだけではない。低く唸る少女の細面の顔が崩れていく。口が裂け、そこから毒々しいほど赤い、蛇のような舌がだらしなく垂れ下がり涎を滴らせる。目も人間のものではなく、残忍な光を宿した巨大なそれになっている。顔ばかりではない。小さな白い手も巨大化し骨張った齧ついそれへと変化し、爪も鋭く細くなる。

人間だった少女が、獣へと変化してゆく。

ルーナのすぐ隣でふわりと空気が揺れた。見れば、ヴィスがそこに片膝をついていた。

「後は任せますわ、ルーナ」

不意にそう言われたものだから、少し驚いてヴィスを見下ろす。ヴィスは少し困ったような表情を浮かべていた。

「刺身にする、とは言ったものの、武器は本部に置いてきてしまいましたの。戦えませんわ——私はこの近にいる人を避難させますわ」
それでは、とヴィスが高く跳躍し広場に面した店の屋根に着地する。そしてまた飛び上がったかと思うとその建物の影へと姿を消した。

「……一人ですか」

残されたルーナは溜息を吐き、しかし獣のような少女を見据えた。先ほどまで立っていた少女は四つんばいになっている。指先から生えた鋭い爪が、広場の地を覆うレンガを削り、食い込んでいた。と、少女がいまにも飛びかかろうとするように身を屈める。

ルーナは杖を掲げ、そこで一回転させた。杖についた大きな水晶が宙に弧を描き、なぞられた場所から光球が現れ宙に並び、杖が一周し円を描くと同時にその光球も円を描くように並んだ。そのとたん、すべての光球が少女へと向かって放たれた。

しかし少女は四つんばいになったその手足で地を駆け、飛んできた光球を避ける。そして克蘭・ギルドの本部の門前から、噴水を

通り過ぎルーナへと迫り、目前までやって来ると飛び上がり鋭い爪の生えた片手を振りかぶった。爪先がルーナを狙う。

ルーナは焦った様子も恐怖した様子も見せなかった。

その瞬間、先ほど放ち避けられしたが、いまだに敵を追っていた光球がついに少女を捕らえた。避けられた光球は地にぶつかる寸前でターンし、そして少女へと迫りその背や足、手首に衝突すると輝きを爆ぜさせる。いまにも攻撃しようとしていた少女が悲鳴を上げ、ルーナの足下にうつぶせに倒れた。

少女の背にその輝きがのしかかっていた。背だけではない。輝く縄となった光球が少女の四肢にからみつき地面に根を生やし、少女を拘束する。少女が怒り狂った獣そのものの悲鳴を上げ、地に這った状態でもがく。しかし魔法の縄は切れない。

——これは一体何だろう。

ルーナはもがく少女を見下ろした。もしかすると何か良くない魔物がこの少女に取り憑いているだけかもしれない。それが正体を現すまではとどめが刺させない。

「あなたは一体何者ですか？ 正体を現してください」

少女を睨む。しかし少女は暴れて唸るだけで、意味のある言葉を発しようとはしない。言葉が通じないのだろうか。

正体を現さないのなら、もう少し追い込む必要がある。ルーナは口を固く結んだ。この少女自体は人間であるかもしれないが、仕方がない。

水晶の輝く杖の上部を、少女の顔の目前へと降ろす。そして杖に魔力を注ぐと、水晶が目映いばかりに輝く。

先程から唸っていた少女が、ヒステリックに苦しそうな悲鳴を上げる。水晶の輝きから逃れようとし、更にもがいた。そして不意に――その身体を包む紫色の炎が爆発した。広場中が紫の炎に包まれる。

予期していなかったルーナは身構える間もなくその炎に吹き飛ばされた。握っていた杖が手元を離れ、身体はすぐそばの店の壁に叩きつけられ、そのままくずおれ座り込んでしまった。

それでも顔を上げると、紫の炎に包まれた広場が目に入った。しかしスピラの塊であるその炎は何も燃やさず、その場に張り付いている。

どこかで見たことのある炎だった。それも昔ではない。最近見たような炎――スピラの塊だ。

先程まで自分がいた場所では、うつぶせになった少女が身体を起こしていた。どうやら縄は切れてしまったらしい。少女は元のように四つんばいになると、座り込んでいるルーナを睨んだ。先程まで身に纏っていた紫の炎はない。と、再び少女の身体が紫の炎に包まれ燃え上がる。

その時少女の姿がぐにやりといびつに歪んだ。そして次の瞬間、少女の姿は一匹の狐の姿になった。

――毒狐？

この前北門の近くに巣を作っていた毒孤だろうか。そういえば数匹逃がしてしまったのを憶えている。

と、その毒孤の姿がまたぐにやりと歪む。炎の勢いが増すのにつれ身体が膨れあがり巨大化し、また一本だった尾も、その根本から新しいものが生えてきて九本となる。黄色だった体毛も色素を失い銀になる。

九本の尾を持つ巨大な銀の狐が、そこに姿を表した。

——九尾。

とつさにその単語が頭に浮かぶ。何かの本で見た、九本の尾を持つ狐を表す言葉だった。

九尾はルーナを見て、目を細めた。そしてその巨大な尾を振る。

まずい、と思っテルーナは慌てて立ち上がった。しかし、何故か身体が思うように動かない。非常に重く、だるい。どうやら先程の紫の炎の爆発——毒のスピラの爆発の際、幾分かその毒が身体に入ってしまったらしい。少しの毒だ、魔力を持つてすれば解毒できるだろう。しかしそんなことをしている暇はない。

杖は噴水のそばに転がっていた。噴水までは遠い。それでもルーナはゆっくりと歩き、杖を拾いに向かった。

だがもちろん、九尾は黙っていなかった。九尾はよろめくルーナへと駆け出すと、その牙をむき飛びかかった。避けるすべもないルーナは目を閉じることもなく飛びかかってきた九尾の口の中を見た。

鋭い牙がいくつも生えていて、奥からは深紅の長い舌が垂れている。

第二章 静寂の兆し（08）

九尾の生臭い息がかかる。

鈴をいくつも鳴らしたような澄んだ音が聞こえた。

突如目の前が深紅に染まった。血の色ではない、赤く輝くスピラがルーナの視界を覆った。

再び鈴のような澄んだ音。それに伴い獣の悲鳴。目前まで迫っていた九尾が、飛んできた赤い閃光の勢いに飛ばされ地面に転がった。赤い閃光は九尾の横腹に刺さり、九尾の身体を貫通している。刺さった部分から、閃光とはまた別の赤色をした血がにじみ出し、銀の毛皮を染める。

鋭く刺さった赤い閃光が、空気に溶けるように消え失せる。それと同時に九尾の血の量が増え、銀の身体の下に血溜まりができはじめる。ルーナはそれを見つめ、そして振り返った。

誰もいない通りの向こう、そこに銃を構えたエンジの姿があった。こちらへと向けられた銃口からは、赤い光が漏れている。

——帰ってきたんだ。

エンジがこちらへと走ってくる。ルーナはよろめきながら進むと杖を拾い、しかしその瞬間不意に息苦しくなり胸を押さえた。立つ力も徐々に抜けていき、その場に座り込んでしまう。全身の感覚もわずかに薄れていく。毒孤の毒が回り始めたらしい。

顔を上げて振り返るとエンジンがすぐそこにいた。何も言わず、無表情でこちらを見下ろしている。

戦わなくては、と思い、ルーナは慌てて立ち上がろうとする。しかし身体は先程よりも言うことを聞かず、重い。

解毒をしなければ。身体の中の魔力を静かに燃やす。すると体内に入り込んでいた毒のスピラが焼け、消滅する。身体が幾分か軽くなる。

その時、九尾が唸りながらゆっくりと身体を起こし始めた。赤い血が滴っているも、牙をむいている。その口からは紫の炎が溢れている。蛇のように九本の尾の先にもその炎が灯っている。そして鋭い瞳は、ルーナではなくエンジを睨んでいた。

九尾が跳ね、近くの民家の壁に着地するように四足で壁に張り付く。するとエンジはルーナと九尾の間に入るようにして立った。握った銃の銃筒の中から、赤い光が煙のように流れ出ている。

エンジンが連射する。銃を構えた瞬間、銃筒から漏れていた光が消えたかと思うとそこから赤い光球がいくつも飛び出す。九尾は壁を走って屋根へとのぼり駆ける。だが赤い閃光が九尾を追う。九尾は民家の端まで来ると、すぐ近くの民家の屋根へと飛び移る。と、九尾はそのまま走り続けずに、何の予兆もなく下へと飛び降りた。着地したのは噴水を越えた向こう側。噴水が壁になり、エンジは繰り返し引き金を引いていた指を止める。すると九尾は跳ね上がり、清い水が溢れ出す噴水の中央にあるオブジェの上に跳び乗った。そしてエンジンへと向けて紫の炎が溢れる口を開いた。

吐き出されたのは、あまりにも巨大な紫の業火だった。エンジンだけ

ではなく、ルーナをも飲み込もうと宙で広がる。

これではエンジの銃弾でも抑えきれない。ルーナは座ったままだが杖を掲げた。

しかしその腕をエンジに掴まれる。

「!？」

一瞬身体に電撃が走ったような感覚があった。それからわずかに、どろどろした何かの感覚。

力強く引き寄せられる。突然のことに驚いたルーナは抵抗もできなかった。その力に従って立ち上がる。

エンジはルーナの腕を引っ張りつつ、瞬時にその場から数歩退いた。そしてルーナを投げるようにして自身の背後へと勢いよく回し、手放す。不意に乱暴に手を放され、ルーナはエンジの背後でふらついた。先程まで自分達がいた場所——エンジの向こうでは紫色の炎が燃え盛って地面を覆っていた。そしてその奥の噴水のオブジェには、あつたはずの九尾の姿がない。

突如燃え盛る炎の中から、同色の光球が三つ、エンジを狙って飛んできた。エンジはそれに気付いて、慌てずに身体をよじって避ける。しかし、一つの光球が左肩をかすめた。左肩の部分の服が小さく音を立てて一瞬燃え、そして焼けた後からは火傷した肌が顔を出した。

——……。

それがルーナは信じられなかった。何故あの程度の攻撃を避けられない。

エンジは傷に構わず紫の炎へと銃口を向けた。銃口からは赤い光が立ち上っている。すると地面に張り付いていたはずの紫の炎がエンジンへと迫ってきた。炎の中を良く見ると、九尾の姿があった。しかしエンジは逃げる素振りも避ける素振りもなく、その引き金を引いた。

澄んだ音が数回響く。最後の一発だけは、町中にこだました。

銃口から放たれたのは赤い光の奔流だった。エンジが最も得意とする、強力な技だ。赤く輝く奔流はうねりながら紫の炎へと迫り、捕える。そして紫色を飲み込み、全てが赤くなった。

その眩しさに、ルーナは目を瞑ってしまった。エンジの強力なスピラに、肌が粟立つ。目を閉じていても、瞼を通してその赤い光が瞳へ入ってくる。

光が徐々に治まる。それからルーナはゆっくりと目を開けた。目の前には、噴水の前で動かなくなつた九尾を見下ろすエンジの姿があった。銃をホルスターにしまい、そして開いた右手で左肩の傷を押さえている。と、エンジがこちらへと振り返る。エンジは冷めた目でこちらを見ていた。するとあたりの空気が重くなる。エンジのスピラが、ルーナにのしかかろうとしている。

またか、とルーナは思う。またこの男は私に文句を言ってくる。言葉ではなくスピラのやりとりのため、なんと文句を言っているのかはわからない。しかし、相手が怒りと憎悪を抱いていることはわかる。のしかかろうとしているエンジのスピラは、まさにその塊だ。

ルーナはエンジを睨んだ。そして同じく見えないスピラで、エンジのスピラを押し返そうとする。

しかし、その時に気付いてしまった。エンジを睨んだその時に、すぐそばの噴水が眼に入る。そこで気付いてしまった。

自分の中で高まっていたスピラが、一気に冷める。そしてルーナは驚いた顔をしてエンジを見た。エンジにとって、それは驚いた顔というよりも、恐怖した顔に見えたかもしれない。

エンジの不可視のスピラが急に大人しくなる。そして驚いた顔をした。

「何だよ？」

エンジがそう言った。おそらく、思わず言葉が出てしまったのだろう。きっと、自分があまりにも驚いた顔をしているから。

ルーナは何も言わずにうつむいた。口を固く結ぶ。息が少し上がっている。毒のせいではない——噴水にある、エンジの銃弾の跡のせいだ。

噴水には銃弾の跡がいくつかあった。エンジが九尾に止めを刺す前に、走ってくる敵の足を止めようとしていくつか撃ったものだ。実際エンジは走ってくる九尾の前足を撃ち、足止めし、それで止めを刺した。

それなのに、何故噴水に銃弾の跡がある。

エンジの銃の腕はかなりいい方だ。走ってくる九尾の前足一本を狙って撃つなんて、一発引き金を引くだけでできるはずだ。しかし噴水には四つほど銃弾の跡がある。一発だけではできなかったということだろうか。もちろん、エンジンにだってミスがあることはわかる。しかしこつも四発もミスをするだろうか。何より、こんなにも大きく狙いがずれるものなのだろうか。

ルーナが顔を上げると、エンジは通りの方へと進んでいた。通りの向こうには、カロンとロロロネが走ってくる姿が見えた。二人の後ろには、センフィとシギの姿も見える。エンジは四人の方へと、よろよろ進んでいく。どうやら毒が回り始めたらしい。

ルーナはエンジの後姿を見つめ続けた。そして考える。

何故狙いがずれたのか。何故単純な攻撃を避けられなかったのか。それだけではない。

エンジに腕を掴まれたとき——妙な気配がした。気味の悪い、不吉な何かを感じた。

普段のエンジも何かがおかしい。妙な気配がする。何かがおかしい。

エンジのもとに、ロロロネが走り寄って来るのが見えた。ロロロネはエンジの左肩の傷を確認すると、バッグから小さな小瓶を取り出した。解毒剤だろう。これだけ対応が早ければ、数日に渡って毒が身体を蝕むことはない。

静かに溜息を吐く。しかしまだ不安の残る表情でエンジを見つめ

る。と、ロロネの持つ小瓶を見つめるエンジの左目に違和感を覚え、そこを凝視する。

赤みを帯びた茶色の瞳。いつもと変わらない瞳。しかし一瞬波打ったかと思うと、その瞳が急に黒ずみ漆黒になった。

――！

息が止まる。からん、とルーナの手から杖が離れ、地面を転がる。

しかし次の瞬間には、瞳は元の色に戻っていて。

「……」

ルーナは下唇を噛み締め、俯く。転がった杖を拾い上げる。

そしてその場から逃げるようにして、ギルド本部の中へと早足で進んだ。

第三章 暗闇の囁き（01）

暗い中を一人歩く。他に誰の姿もない。

暗いといっても、暗黒であるわけではない。雲一つ無い晴れた夜空には月が輝き、地上を照らしている。

あたりからは虫や夜禽の音がする。ここ、ギルド本部の裏側にある訓練場は小さな林だ。上を見上げれば緑が広がっていて、その隙間から月光が降り注いでいる。それを頼りにルーナは木々の間を進んだ。杖を明かりにすればもっとよく見えるのだが、いまは使わず背中に背負っている。明かりをつけると目立ってしまう。誰かに見つかることだけは、避けたかった。

しばらく進むと開けた場所に出た。木々のない草地に、月光が落ちている。開けた場所の奥には的がいくつかある。どうやらここが、弓や銃の稽古場らしい。

ルーナは並んだ的へと静かに進んだ。どの的も、矢の刺さった跡や銃弾の貫通した跡がある。それを一つ一つ見て行く。すると、どの的よりもボロボロになった的があった。至る所に銃弾が貫通した黒い跡がある。しかし肝心の中央だけは貫通しておらず、無傷だ。中央のすぐ近くならいくつもの弾痕がある。狙っているのに中々当たらない、といったところだろうか。的の周辺を見てみれば、地面にも弾痕がいくつがある。

ボロボロの的に手を伸ばし、触れる。そして目を閉じて集中すると、的が温かくなってくる。この的に当たったスピラの僅かな名残が、触れた手の下へと集まってくる。この的にあるスピラの名残が、

使用者を教えてくれる。

ルーナは目を開けた。スピラの名残が集まってきた的を、そっと撫でる。そして下唇を噛みしめた。

的から手を離し、再び数々の弾痕を見つめる。

片手から本が滑り落ちた。地面に落ちた本は栞の挟みであるページを開いた。そのページに描かれた黒い馬の絵が、月光に照らされる。

「どうしよう……」

言葉が漏れる。

「どうしよう……！」

声いきゅつと高くなる。我慢できなかった。

月光に照らされた視界が歪む。眼鏡を外して目をこすると、手は涙で濡れていた。それを見ると、また視界が歪んだ。涙が溢れてくる。こぼれ落ちた涙は、落ちた本の開いたページに落下し、紙に吸われてシミになる。

もう泣かないと、十年前に決めた。泣き虫だった自分は十年前に消え去ったはずだった。それなのに涙が溢れてくる。

だから駄目なのだ。悔しさも混じって涙が止まらなくなる。

気分が悪かった。喉の奥、胸の中に、熱を持ったもやもやが渦巻

いている。吐き気すらもした。それほどに恐ろしく、焦っていた。

本を拾おうとしゃがみ、眼鏡を持たない手を伸ばす。伸ばした手は震えていた。

「……そんなに焦らんでもいいだろうに」

背後から声がした。涙と震えが止まる。振り返ると、歪んだ視界の中に人影があった。ルーナは慌てて涙を拭って眼鏡をかけ、本を拾って立ち上がった。

「根っこはやっぱり泣き虫だの」

デイーモはこちらへと歩いてくると、顔を見てそう言った。だからルーナは俯いてしまった。するとまた泣きそうになる。視界に人がいないと、いつもの自分に戻れない。仕方なくルーナは顔を上げ、デイーモを見た。涙が一筋頬を伝う。しかしデイーモはそれを見て満足そうに笑った。そしてポロポロの的に手を伸ばし、撫でる。

「しかしこれはよくないのお」

デイーモは目を細めて弾痕だらけの的を見下ろした。

「これを見たところ、大分きているの。死ぬまであと数日というところか」

——死ぬまであと数日。

「詳しく言えば十日ぐらいか」

——十日。

——十日で、死んじゃう。

ルーナは息を止めた。そして吸い、ゆっくりと吐く。焦燥と不安で胸がいつぱいだった。

「あなたは……知っていたんですね？ エンジのこと……」

「ああ。奴が例の任務から戻ってきた時から気付いたよ。呪いの気配ですぐわかる。ま、ほっといたが」

——どうして、あなたは。

どうしてあなたは気付いているのに放っておいたんですか？
そう聞こうとした時だった。

「お前さんが気付くと思ったのじゃ」

質問をする前に、答えが返ってきた。

「お前さんに気付かせたかったのじゃ」

「私に、ですか？」

うむ、とデューモは頷いた。そしてからかうように笑うと、開けたこの場所の中央へと進む。

「進展が欲しいだろう？ 十年続くこのケンカに」

からからと笑いながら、月光に照らされたデューモは回る。

「さてルーナ。お前はどこからことを始めればいいかわかっているのか？ 呪いはどうやってたら解けるのかわかっているのか？ 材料に何がいるのかわかっているのか？ 多分お前はまた泣いて進まないだろうから、わしから一つ、ヒントをやるぞ」

ルーナは困惑し、デイーモへと一歩歩み寄る。デイーモは回るのをやめて空を指さした。それは南の方角だった。

「『染まる光の呪い』——この呪いを解くに必要なものはどれも大変珍しいものじゃ。しかし、だ。この呪いを解く材料の殆どは、あの『夕闇の森』にあるんじゃないよ……光はいつも闇の中にある、ということじゃな」

「『夕闇の森』……」

それは、スピラ使い達の間でももっとも危険な地域のひとつとされる、ロゼラスの街を出た南にある森だった。

「そうじゃ。あの森は恐ろしいところぞ。心を惑わし魂を食う。だがそこに光はあるぞ。過去の記憶を頼りに進むがよい」

デイーモはルーナに背を向け、薄暗い林の中へと入っていく。そして振り返らずに五本指を見せた。

「期限はいまから五日後までじゃ。そこが限界じゃ。呪いは病と同じ、弱りきった身体に薬を与えても手遅れじゃ。——エンジの隠す呪いのことを知っているのはただ一人、お前、ルーナだけじゃ。お前だけが呪いについて知っている、お前だけが呪いを解ける。——殺される前に殺すのじゃ」

デイーモの姿が薄闇に飲まれて消えていく。そうして姿を消した。

ルーナは何もせず、聞いているしかできなかった。しかし南の空を見上げて口を固く結んだ。

「『夕闇の森』……」

電撃が走ったかのように身体が震える。幼い頃の恐怖が、記憶の奥底からよみがえってくる。暗黒に包まれた森を、一人歩いた恐怖。

——それでも、そこに光があるのなら。

——トラウマを超えなければいけない。

——借りは返さなくてはいけない。今度は私がエンジを助けなければいけない。

満天の星を見上げる。どの星も空が暗闇であるからこそ、こうして綺麗に輝いている。

何も持たない手をぎゅっと握りしめる。幼い頃に強く手を握ってもらった、あの感覚がよみがえる。

第三章 暗闇の囁き（02）

窓からは見える空の半分は茜色に、もう半分は紺碧に染まっていた。空を飛ぶ白い鳥の群れが、紺碧から逃げるように茜色の空へと飛んでいる。茜色の空の端には沈んでゆく太陽が、紺碧の空の端には昇りつつある欠けた月がある。

赤い夕日が家々に差し込むこの時間は、酒場『フレンフィール』が人々で賑わい混む時間帯の少し前だ。夕食にしては早い時間であるし、呑むにしてもまだ早い。

カロンとセンフィは、少し早い夕食を摂っていた。普段からよく使っている二人席のテーブルには水の入ったグラスが二つに料理の皿が五皿ある。五皿のうちすでに三皿は平らげてあつて何もなく、まだ半分ほど料理の残っている皿をセンフィが、もうすでに料理がなくなつてしまひそうな皿をカロンが突っついていた。

カロンはパスタを流し込むように食べている。果たしてしっかりと噛んで食べているのだろうか、センフィは疑問に思いつつ自分の皿のサラダにフォークを突き刺した。カツツと硬い音がする。そして口へ運ぼうと思うにも、やはり気になつてしまひ考え込み、フォークを握つたままもう片手で頬杖について溜息を吐いた。

「どうした？ 腹減つてないの？ オレ食べるよ？」

パスタを全て平らげたカロンが顔を上げ、首を傾げる。センフィはカロンを見据えた。

「あんた、もう四皿食べたじゃない」

「まだ食べれるよ?」

「……ほんと、よく食べるのねー」

「おう」

するとカロンはテーブルに身を乗り出し、センフィの皿へと手を伸ばしてきた。センフィは慌てて皿を持ち上げカロンの手から皿を引き離す。

「ばか。なんであたしの食べようとするの?」

「お腹すいてないんじゃないのか?」

「すいてます! 勝手に食べようとしなideよ!」

声を上げて睨みつける。カロンは「なんだよー」と口を尖らせて元のように椅子に座った。それをセンフィは確認すると、料理の皿を元の場所に戻し、鮮やかな葉が刺さったままのフォークを握った。そして口に運ぼうとしたが、

「で、どうしたの?」

カロンが首を傾げ、こちらを見てくる。センフィは葉の刺さったフォークを前にして口を開けたまま固まる。しかしフォークを皿へと戻すと、溜息を吐いた。そして悩む。なんとやっていいのか、言葉が見つからない。しかし据わった目をカロンに向けて答える。

「何か……ヘン」

「……オ、オレが!??」

カロンは目を丸くして椅子から立ちあがった。テーブルの上にある皿が揺れてぶつかり合い、音を立てる。すでに水の入っていないカロンのグラスが倒れる。一体何事か、と、店内の客の視線がカロ

ンへと集まった。しかし当のカロンは気付いていないのか、気にも留めない。両手を自らの頬や頭に当てる。

「オレ、変か！？ 確かに最近寝癖が増えた気がしなくもないんだけど……あっ！ ロクのジュースを飲んだせいかな？ めううん？」

頬を指でつねり、頭をかきむしる。そして自身の全身を見下ろし、首を傾げる。そんなカロンの様子に、センフィは思わず吹き出してしまう。

「あんたは最初っからヘンよ」

センフィは周囲を見回し苦笑いする。誰もが神妙な顔をしてこちらを見ている。

「あたしがヘンだって言ってるのは、あんたのことじゃないから……座って？」

カロンは大人しく座る。そして興味津々に、

「じゃあ、何がヘンだ？」

「うん……」

改めて聞かれて答えようとするも、センフィは言葉に詰まってしまった。

「うん、なんだろうなあ……」

この曖昧な感覚をなんとなく言っているのか、わからない。どう表現したらいいのか、よくわからないこの感覚。

「なんか……全部ヘン」

考えた末に出てきたのは、自分でも良く分からない、曖昧すぎる言葉だった。苦笑いして答えたものの、カロンはきよとした。

「全部ヘン？」

「あー、うん……何か、ヘンな感覚がするっていつか……その」

この感覚を表せる言葉を、頭の中で一生懸命に探す。しかしやっぱり見つからない。

「空気が変わった、っていつか」

「……？」

「その、とにかくヘンなのよ！ 全部が！」

「ダメ。わかんない」

カロンは笑顔でそう返してきた。だからセンフィは深く溜息を吐いてサラダにフォークを刺した。

「じゃあいいわよ、もう」

鮮やかな色をした小さな葉を口へと運ぶ。シャク、と口の中で音がした。

もうじきこの店が混み始める時間だ。夜は昼よりも混む上に、呑んで酔う者も少なくはない。妙な人間も集まってくる。自分やカロンはスピラ使いと言ってもまだ純に大人ではない上に、厄介な人間に絡まれるのは避けたい。酔っ払い達はすぐに厄介ごとを起こす。店主にも迷惑をかけたくない。そろそろ店を出なければ。

「そろそろ店でないとね。沢山の人が集まってくるわ。ちょっと待ってね、すぐ食べちゃうから」

センフィは急いでサラダを食べ始める。カロンは何も言わずに、空の皿を重ね始めた。それから倒れたグラスを立て、そこでふと、

「へんって言えばさ、最近エンジンとルーナへんだよね」
「へっ？」

不意にそんなことを言われ、センフィは首を傾げた。エンジンとルーナは、最近見ていないからよくわからない。しかしカロンはそのことを口に出した。

「最近、エンジンもルーナも見ないんだ。センフィ見た？」
「ううん。全く見てない。任務じゃないの？」

カロンは首を振った。

「それが違うみたいなんだよねー。二人とも任務には出てないって、デイーモ言ってた」

「へえ……じゃあどっかいるんじゃないの？」

「でも街や本部を探してもどこにもいない。へんでしょ？」

ふうん、と生返事を返す。確かにそれはへんだ。しかしそれと同時に、特に気にすることではないのでは、と思う。二人がどこかでスピラのぶつけ合いをしている、よりも大変なことではない。そもそも、どこかに姿を隠してしまうスピラ使いなんて珍しくはない。ウールカは気付けばどこかへ行ってしまう、また気付けば果物を手に抱えて帰ってくる。錬金術達は薬草採取に出かける。エンジンやル

「ナがない理由だって、少し考えれば分かる。

「きつと、エンジは街の近くで実戦訓練みたいなこととして、ルーナはどこかで薬草探しでしょ？ 気にすることないわよ」

第三章 暗闇の囁き（03）

そうかもしれない、とカロンは笑った。

「ルーナはよくわかんないけど、エンジはいつも熱心だもんな。訓練かも。昔、『強くなってくる』って言って、一年ぐらい消えた事あったらしいし」

「出た。意味のわかんない噂。あれってホントなの？」

センフィはテーブルに身を乗り出した。からかうような笑みを浮かべたものの、内心ではその真偽を本当に知りたかった。スピラ使いの中でも、そんなことをするような者は聞いたことない。ましてや一年間全く姿を現さなかったという噂だ。果たしてエンジはそこまでしたのだろうか。

しかしカロンは首を横に振った。

「ホントなのはオレも知らないよ。エンジに聞いて見ようにもさ、ちょっとためらっちゃって」

「なんでためらうのよ？」

カロンは首をすくめ、苦笑いをした。

「だって、なんでそこまでして強くなろうとするのか、わからないんだもの」

「……………」

確かに。

一年間をも姿を消してまで修行して、一体何をしたかったのだろうか。修行をするからには強くなりたかったのだろう。しかしそれで一体どうしたかったのか。

強くなることは悪いことではない。強力なスピラ使いになれたならば、魔物との戦いも楽になる。死んでしまう可能性だって低くなる。

死ぬのが怖いのだろうか。

しかしそうであれば「修行のため」と街の外へ出て、誰にも気付かれない場所に行き、一年間も姿を消すだろうか。外よりも、街の中の方が断然危険が少ない。そもそもスピラ使いは死と隣り合わせのもの。イレギュラーな者も一部いるが、死ぬのが怖いのなら、まずスピラ使いになんてならないだろう。ましてやあの『黒の日』以降にエンジはスピラ使いになり克蘭・ギルドに仲間入りした、とセンフィは聞いている。センフィ自身は体験していないが、『黒の日』はスピラ使いがいかにか死と隣り合わせであるかを人々の目に焼けた日だ。その日以降、スピラ使いになる者は減ってしまった。そんな時期に何故エンジはスピラ使いになったのだろうか。

「……思えばエンジって、ヘンなところが多いわね」

センフィはぽつりと呟く。

一年間にも渡る失踪、スピラ使いになった時期、そして少し貪欲なほどに力を求める事。

そもそも、その一年間の修行の成果なのか、エンジのスピラは普通のスピラ使いより強い。

エンジは一体どこまで強さを求める気なのだろう。

強さを求めることに、際限はない。センフィは少し怖くなった。

と、聞きなれた子供の声が入ってきた。店の奥を見れば、厨房へと続くドアが開き、そこから十歳程の子供二人が飛び出してきた。

ジェードとシェーラだ。この街に住む双子で、シギの弟と妹だ。

どうやら二人は今日もこの店の手伝いをしていて、それがいま終わったらしい。二人は店の奥から入り口へと走りぬけると、ドアベルを派手に鳴らしながら店を出て行く。そういえば、今日彼らの兄であるシギが街に戻ってくる日だ。手伝いを終えた二人は、これからシギに会いにギルド本部へと向かうのだろう。二人が出て行く際、妹であるシェーラは自分とカロンに気がついたらしく、こちらに小さく手を振った。センフィとカロンも慌てて手を振り返したが、その時すでにシェーラは外へと出て行ってしまった。元気な様子の双子を見て、センフィは笑った。

双子に続いて、厨房から人影が出てきた。この店の店主である、ヒューモ族のネジュアだ。

「二人とも、何の話をしてるの？」

ネジュアは近くの誰も使っていないテーブルから椅子を一つ掴むと、センフィとカロンのテーブルへと持ってきて座った。雪のような髪が明かりに輝いた。銀の瞳も、無邪気な子供のように輝いている。

酒場『フレンフィール』が街の外でも有名な理由の一つが、ネジユアのこの容貌にある。もちろん料理の味が良いという噂でも有名であるが、「銀の容貌を持つ女店主」というネジユアの容貌についての噂の方が有名だろう。その言葉が表すとおり、ネジユアは銀の容貌を持っている。珍しくも美しい輝く銀の髪、銀の瞳。肌も白く雪のようで、性格は子供のように無邪気で気さくである。少し驚いてしまう容貌だが、この性格のため客は親しみやすく、そこも『フレンフィール』が有名である理由だろう。

「ネジユア、仕事は？」

カロンがネジユアに聞く。ネジユアは足を組んで椅子の背もたれに寄りかかった。そして片足でバランスを取りながら椅子を傾けて揺らす。

「ちょっと休憩。それに、何かあんた達が楽しそうに話しててさ。何の話をしてたの？」

「楽しそうって……」

センフィは思わず苦笑いを浮かべた。楽しそうに見えたのだろうか。するとネジユアは、

「なーんか真剣に話しててさ。何？ 噂話？ 隠し事？」

「そ、そんなじゃないわよ。エンジの話をしてただけ」

エンジの話？ と、ネジユアは首を傾げた。だからセンフィが先程までカロンと話していたことを伝えようと口を開くも、ネジユアは手でそれを遮って考える素振りを見せた。

「待つて、当てる。考えさせて」

そしてしばらく考えて、答える。

「わかった。川とか池に落ちて死にかけたんでしょ。子犬みたいになっちゃったんじゃないの？」

「子犬みたいにつて何よ。違うわよ」

溺れたエンジを見たことはなかったが、思わずセンフィは笑ってしまう。

「んー、じゃあ、長年仲の悪かったルーナと仲良しになった？」

ネジユアは続けて答える。今度はカロンが否定した。

「絶対ありえないよ！ 違うよ」

「じゃあ、何？」

傾けていた椅子を正し組んだ足も元に戻してネジユアが首を傾げる。センフィはカロンと顔を見合わせ、溜息を一つして答えた。

「エンジつて、ちょっとヘンつて話をしてただけよ」

「ヘン？ どの辺が？ あの子は兄よりまともだけど？」

「何か色々ヘンなのよ。スピラ使いになったのが『黒の日』の直後だつて言うし、一年間失踪してまで修行したつて言うし……」

「あー……」

するとネジユアは笑みを浮かべた。

「成る程ね、成る程ね。確かにヘンね。うん……」

「ネジユア、何か知ってるだろ？」

妙な様子のネジユアに、カロンが立ち上がって目を輝かせた。しかしネジユアは片手で頬杖をついてカロンを見上げた。

「知らない。ドラゴンでも倒したいんじゃないの？」

「何それ。いくらエンジでも、無理があるわよ……」

センフィは苦笑いをしながらネジユアの冗談に返した。しかし、そう答えた直後にそうなのかもしれない、と考える。『黒の日』は魔物の王とも呼ばれるドラゴンをも姿を現した日だ。それも一頭や二頭だけではない。十数頭が姿を現し街を襲った。もともと姿をあまり現さない上に、現したときは十人近くのスピラ使いが協力しないと倒せない強力な魔物である。何人ものスピラ使いがこの『黒の日』に亡くなったのは、このドラゴンのためだと聞いている。そんな中、エンジはスピラ使い達が死んでいくのを見たのだろうか。そして絶望の街の中、何かがあって闘志を燃やしたのかもしれない。

そう考えると、その何かの見当は大体つく。——エンジは天涯孤独を理由に、危険な任務を自ら請け負うことが度々ある。

しかしいくらエンジでも、ドラゴンは倒せないだろう。センフィはドラゴンを見たことはないが、エンジニア人ではドラゴンは倒せないと断言できる。現に、強いスピラ使い達が多くいた十年前の『黒の日』であるが、皆ドラゴンによって亡くなっている。

「だから強くなりたいってことね……仇を取るために」
「多分ねー」

呟くとネジユアがうんうんと頷いた。しかし椅子に座ったカロン

は首を傾げている。と、カロンはふと思い出したように目を開き、ネジユアを見つめた。

「そういえばさ、エンジの話をして思い出したんだけど、ネジユアってエンジに詳しいか？」

「うん？ どうしたの突然。まあ詳しいっちゃあ、あんた達より知ってるかな。あいつの兄と友達だったし」

カロンはそれを聞くと笑った。しかし少し困った様子で、

「じゃあさ、オレ、気になってることがあってさ……」

「何？」

「その……」

カロンは何故か店の様子をちらりと見た。まるで話してはいけないことを話そうとするように。

そして口を開いた。

「エンジとルーナは昔仲良しだったって噂……あれ、ホントなのかな？ 信じられないんだけど」

私も信じられないよ。センフィは心の中で呆れた様子混じりで呟いた。

よく聞く噂である。どこから流れ出したのかは知らないが。

あまりにも信じられない噂だ。そもそも、エンジとルーナが出会ったのは八年前。ルーナが『ノーウェン』にやってきたそのときから、何故かすでに仲が悪かった。エンジはロゼラスの街の育ちで、

ルーナはロゼラスの街から東南にある湖の近くの村の出身だと聞いている。「昔仲が良かった」の、「昔」はないのだから、明らかに嘘の噂だ。

こんな噂を信じているのかと思うと、カロンのことが少し不安になってくる。このくらいは分かってもらわなければならぬ。

しかし、ネジユアは笑って答えた。

「なんだ、そんなことか——本当のことよ。いまものすごい仲悪いけど」

第三章 暗闇の囁き（04）

誰もいない広いエントランスに声が響く。その声はギルド本部全体へと反響するほどだった。

「いいから医務室に来るのーっ！ くーるーのーっ！！」

ロロロネは半ば悲鳴のような叫び声を上げてエンジの右腕を力尽くで引つ張り、一階の廊下へと連れていこうとする。相当力んでいるらしく、筆のような尾も上を目指して逆立ち伸びていた。しかしそれでも非力だった。エンジはいくら引つ張られてもそれ以上の力で抵抗し、連れていかれまいと、また一步、エントランスから本部裏の訓練所へと続く扉へと進んだ。

「心配ねえって言うてるだろうが！ ちょっと疲れて倒れただけじゃねえか！」

振り返って顔を真っ赤にしたロロロネに怒鳴る。するとロロロネは犬歯を見せて怒鳴り返してきた。

「ちよっとどころじゃなく疲れてるんでしょ！ じゃなきゃ倒れないよ！ いいから大人しく医務室来るの！」

ぐい、と不意にロロロネの腕に力が入り、エンジはバランスを崩してロロロネへとよろける。しかし抵抗をやめない。すぐに引つ張り返すと目指す扉へとまた一步步む。すると今度はロロロネがバランスを崩してよろけた。その隙を期に、エンジはまた数歩扉へとロロロネを引きずりつつ進む。しかしロロロネは手を放そうとしない。

「俺のことは心配しなくていい！　いま誰か怪我してんだろ？　それで訓練所まで薬草取りに来たんだろ？　だったらそいつの相手してろよ、俺のことはほっとけって……！」

「だめええっ！　休みたくなけても、気付け薬飲むだけでいいから来るの！　こらっ！　外いーかーなーいーのーっ！　医務室なのーっ！」

「あーもーキーキーうるせえな！　いい加減放せ！」

エンジは口口口ネに引つ張られている腕を思い切り振った。生じた遠心力が口口口ネの身体を襲う。すると口口口ネはあつけもなく右腕から手を放し、広いエントランスの中央へと転がった。萎えたかのように床に俯せに倒れる。

扉のドアノブに手をかけ、エンジは扉を開く。すると外からエントランスへと風が流れ込む。

「じゃあな口口。早く医務室へ戻りやがれ——」

そうからかうように笑いながらエンジは振り返ったが、その瞬間、からかいの表情が非常に困った様子の苦笑いになってしまった。

エントランスの中央で座り込む口口口ネが、いままで見たこともないような目つきでこちらを睨んでいた。泣き出す一歩手前のような、非常に悔しそうな目をして、歯を食いしばっている。心なしか、大きな垂れ耳の根本が立っている。尾も先程よりもずっと上を目指して立っている。

「いいいいい……」

犬のように唸っている。しかし低い声ではない、妙に高い声で唸

っている。

「……何だよ」

流石に驚き、エンジは足を止めてしまう。ロロロネは唸り続けている。

「iiiiiiiiiiiiiiiiiiii……」

何を伝えたいのかはわからないが、激怒していることに違いない。

エンジはロロロネへと向き直り、腰に手を当てて見下ろす。何故ロロロネがこんなにも躍起になって怒っているのか、その理由が見当もつかない。確かに自分は訓練中、気がついたら倒れていた。おそらく長時間連続してスピラを使い続けたため、スピラの調子が狂っただけのことだ。いまに始まったことではない。昔はよくスピラの調子を狂わせた。そのときロロロネには「少し休んで」と声をかけられ注意されるだけで済んだのだが、いまのようにこうも騒がなかった。ましてや激怒するなんて考えられない。久しく倒れたからこうも騒いでいるのだろうか、と、考えられるが、それにしてもおかしい。

「iiiiiiiiiiiiiiii……」

一体何故躍起になっているのか？

と、不意にロロロネは唸るのを止めて、背後を振り返った。ロロロネの後ろには、上の階へと続く階段がある。

「ウールカ！ ウールカ！ 手伝って、エンジ投げて！」

階段の上に人影が一つあった。レイモン族のウールカが、いつものようにここにこ笑いながらこちらを見下ろしている。

やばい、とエンジは瞬時に感じた。

開いた扉へと慌てて駆け込む。しかし一步外に出たとたん、恐ろしいほどの力で服の襟首を捕まれ、同時に景色が飛ぶ。そして激しい衝撃が全身を襲ったかと思うと、エンジは座り込んだロロネの横で仰向けになっていた。身体の中にあつた空気が、衝撃に吐き出される。

「う、うえ……」

ゆっくり起き上がって先程まで立っていた扉を見ると、そこにはウールカの姿があつた。いつもにこにこ笑い、兎やウロウ族の垂れ耳を髭髯させる帽子を被った、レイモン族のスピラ使い。どうやら自分は、この男に投げ飛ばされたらしい。

「数秒前まで階段にいたのに……速過ぎるだろ……」

エンジは驚きつつも呆れた溜息を吐きながら痛む身体を起こした。確かにウールカは数秒前まで階段の上にいたのだ、自分が振り返って外へと一步踏み出すのにかかったのは数秒だけ。その数秒の間にウールカは自分の背後までやって来た。速過ぎる。普段背負っているはずの巨大な槌を持っていないからだろうか。

ウールカは首を傾げてエンジを見下ろした。そしてロロネへと視線を移す。

「ウールカありがと！」

ロロロネはぴょんと立ち上がると、ウールカに笑顔を返した。ウールカもにこにこ笑っている。

「エンジ、医務室行くよ！」

ロロロネはエンジへと手を差し伸べる。エンジは溜息を吐くと、その手を受け取り立ち上がった。しかし、

「行かねーよチビ」

再び扉へと向かって進む。だが扉の前にはウールカが立っていて

「ウールカ、そこどけ」

エンジは吐き捨てるように言う。しかしウールカは何も言わず、にこにこ笑っている。ウールカの身長はエンジよりもある。まるでウールカは、こちらを馬鹿にするように見下ろしている。

「ウールカ、どけて」

しかしウールカは動こうとしない。いい加減腹が立ってきたエンジは、思わず怒鳴った。

「ウールカ！ 邪魔だと言ってん——」
「うー？」

ようやくウールカが言葉を発したかと思うと、その手がエンジの襟首へと伸びてきた。がしりと力強く掴まれる。だからエンジは何

も言えなくなつた。

これ以上何かすると、また投げられてしまふ。

エンジは諦めの表情で振り返つた。ロロロネが笑っている。

「医務室」

「……ちつ」

思わず舌打ちしてしまふ。ウールカの手を払いのけ、ロロロネへと向き直る。

「行けばいいんだろ、行けば」

ロロロネは嬉しそうに跳ね、そして一階の廊下へと進む。エンジも大人しくその後が続く。振り返るとそこにウールカの姿はなく、どこに行つたのかと見回すと、いつの間にか階段を上がつて上の階へと姿を消すのが見えた。一体いつの間にあそこまで移動したのだろうか。

「速過ぎるだろ、あいつ」

感心を通り越して呆れの溜息がでてしまった。

第三章 暗闇の囁き（05）

医務室へ向かうロロネの背を追う。尾がロロネ自身とは別の生き物のように揺れている。何故だろう、今日の揺れ方は、いつもの揺れ方と違う気がする。

医務室はエントランスからそう離れてはいない。だから二人はすぐに医務室のドアの前へとやって来た。ロロネはドアを開け中に入り、エンジンもそれに続く。薬のような独特のにおいが鼻を突く。そう広くはない静かな医務室だが、入ってすぐには薬の棚がいくつも並んでいる。その棚の前で、一人の少女が焦った様子で薬を探していた。確かこの子は、新入りの錬金術師だ。

「……どっかに座って待ってて」

ロロネは新入りの錬金術師を見ると、エンジンに振り返った。そして焦っている少女の横に立つと「この棚じゃないよ、こっちの棚にあるよ」と少女を連れて別の棚までやって来て、そこにある小さな紙袋を手取る。その後薬の使い方について少女に教え始めるが、何を言っているのかわからず、エンジンは医務室の奥へと向かった。医務室は仕切りによって薬棚が並ぶ部屋とベッドが並ぶ部屋に分けられている。エンジンは仕切りを挟んだ向こうへと進んだ。

窓のカーテンは閉められていた。しかし僅かな隙間から夕日が差し込み白いシーツの上にオレンジ色を落としている。カーテンが閉められているというのに、部屋全体がオレンジ色だった。と、奥のベッドに人影がある。ベッドに入ってはいるものの、上半身を起こしてこちらを見ている。エンジンは何も言わずにそのベッドへと近づいた。

「……なんだあ？」

ベッドにいたのはシギだった。そういえば、今日任務から帰ってくる予定であったのをエンジは思い出す。しかし帰ってきたシギのこの姿を見ると、任務はどうもつらいものだったらしい。シギは頭に包帯を巻いていた。簡易な服の下から見える胸にも包帯が巻かれている。袖を捲られた右腕にも包帯が巻かれてあって、それだけではなく全身のところどころに絆創膏を貼られていた。

「おい、なんだ、やばい怪我したのか？」

シギは何も答えようとはしなかった。相変わらず無表情だ。しかし、

「お前はなんでここにいる」

「なんでって……」

質問を返され、エンジは困惑する。医務室に用があるから、とは言いたくなかった。エンジは腕を組んでシギを睨んだ。

「なんだっていいだろ」

だがそう答えた瞬間、仕切りの向こうからロロロネがやって来て、

「訓練所の、誰も来なさそうなところで倒れてたの。起こしたら起きたけど」

「おい！ ロロ！ 何喋ってんだ！」

「練習してるところを誰にも見られたくないからってあんな場所で頑張っただけで、ボクが来なかったら、きっと誰にも見つけてもら

えなかったね、エンジ」

ロロネは片手に透明の液体が入った小瓶を握り、もう片手には手乗りサイズの錬金釜を乗せていた。シギのいるベッドの端に座ると、小瓶をエンジへと手渡した。

「はいこれ、気付け薬。全部飲んでね」

そしてロロネは膝の上に釜を置くと、ポケットから大きな葉を数枚取り出し釜の中へと押し込むようにして入れた。それは、先程ロロネが採取していた薬草だった。薬草を加えた釜の中を、ロロネは銀の薬匙でかき混ぜる。

「シギもうちよつと待っててね、これ錬金したら薬になるから」

どうやら、あの薬草はシギのためのものだったらしい。と、ロロネがこちらの視線に気がついたのか顔を上げた。

「うーん……どっかの誰かさんがさ、沢山傷薬を作ってくれてあったんだけど、それじゃあシギの傷に効かないんだ」

エンジは思わず眉を曇らせた。

「傷薬が効かないって、どんな怪我してんだ……」

すると、シギは無言で右腕の包帯を取り始めた。そうして現れたシギの腕に、エンジは声を漏らしてしまった。シギの腕には、青黒い小さな斑点がいくつもあった。その斑点の中央からは、黒く輝く水晶のようなものが飛び出している。それは皮膚を突き破って生えてきたかのようで、水晶の根本からは血が流れ出ている。シギの腕

は、血の流れる筋と青黒い斑点、そしてその中央で輝く水晶に侵されていた。

「何だよこれ……」

エンジはシギの腕をまじまじと見つめる。気味の悪いものだった。ロロロネも苦い顔をした。

「腕の中に魔物のスピラの塊を植え付けられたみたい。しかもただのスピラならよかったけど、これ、発芽してるんだよね」

「そんなことあるのかよ」

「植物性の魔物の中でも、上位の魔物はこうやって人間にスピラを植え付けるんだって」

ロロロネはそう答えると、釜の縁に手を添えた。すると釜を中心に小さな魔法陣が現れる。魔法陣はくると回転する。

エンジはそんな錬成模様を見ながらシギの隣のベッドに座り、受け取った小瓶のコルクを抜いた。そして一気に中身を飲み干す。気付け薬はひどく苦く、熱い。口の中に流れ込むと、喉を焼くようにして流れ落ちてゆく。堪えて全てを飲み干すと、空になった小瓶をシギのベッド脇の小さなテーブルに置いた。そして立ち上がり、廊下へと続くドアへと歩き出す。

「ちょ、ちょっと待ってよ!」

するとロロロネは釜を押しつけるように乱暴にシギに手渡した。釜を中心に現れていた魔法陣が消え失せる。ロロロネはベッドから飛び降りるとエンジを追い、その服の背を掴んだ。エンジは振り返りロロロネを見下ろす。

「何だよ」

「どこいくの？」

「さっきのところ」

「ダメ。休むの。また倒れる」

ロロロネはぐいとエンジの服を引っ張った。エンジの手をはいた。
た。

「気付け薬飲むだけでいいって言ったよな、お前。だからここにはもう用はねえ。戻らしてもらうぞ」

「だめえっ！ 無理しないで休むの」

「無理してねえって」

エンジはロロロネを無視して先へと進む。ロロロネはエンジの先へ回ると立ちふさがった。

「休むの！」

何故か必死の様子 of ロロロネを見下ろし、エンジは溜息をつく。
全く、訳が分からない。

「お前、何で今日そんなに躍起になってんだ？」

「いいから休むの！」

ロロロネは答えようとしない。というよりも、いまの問いを聞いていたのだろうか。

「ロロ……」

「うるさい！」

ロロロネの叫びが医務室に響く。何事かと、新入りの錬金術師の少女がこちらを見ている。いまのロロロネには、何を言っても怒鳴られそうだ。いったいどうしたというのだ。

「お前——」

「外だめ！ 休んで！」

「お前一体どうした——」

「だめっ！ また死んじゃったらどうするの！！」

——『また』？

ロロロネが何を言っているのか、エンジには理解できなかった。しかし、周囲を見回してすぐにその言葉の意味に気がついた。ロロロネは叫んだとたん、顔を青ざめさせた。そしていままでの勢いはどうしたのか、申し訳なさそうに俯いた。エンジにはない、エンジの背後のシギにだ。振り返ってシギを見ると、シギはいつものように無表情だったが俯いていた。

シギは今日任務から戻ってきた。強いスピラ使いであるが、こんな深手を負って。それほどに敵が強かったのだろう。しかしもちろんシギは一人で戦った訳ではないはずだ。他のスピラ使いと協力したに違いない。だがこれ程の傷を負っている。スピラ使い数人でも、手を焼く危険な魔物だったのだろう。

何があつたのか、想像が出来た。

「……誰が」

エンジは言葉を探す。しかし見つからない。

「……誰が」

「——新入りの、魔法使いだ。おそらくエンジは会ったことがないな」

エンジの半端な問いに、シギが答える。

「本当はウールカと二人だけで任務に出るつもりだったが、同じ魔法使いだから見習いたいと一緒に行った。任務の対象の魔物はそう強いものではなかった予定だったし……」

「それでとんでもないのに当たったってか？」

「……食い、殺されて、しまった」

「そうか」

胸の奥に妙な感覚が生まれる。冷たく締め付けるような、妙な感覚。それは胸の奥にもたれるようにして居座り、息を詰まらせる。

ロロロネが躍起になる理由もわかった。ロロロネはもう、誰かが死ぬなんて考えたくないのだ。

「シギごめん、エンジごめん」

ロロロネは俯き、震えていた。

「ボク、その子と仲良かったんだ……ウロウだったし……。ボク、ちょっとおかしかったね、ヘンだったね」

シギのベッドへと戻り、元のように座る。シギから練金釜を受け取ると、大人しくかき混ぜ始める。一度は消えた魔法陣が再び現れ、釜を中心に回り始める。やがて釜の中から小さな光が溢れ漂う。

エンジは溜息を吐き、何も言わずにシギの隣のベッドへと戻り腰を下ろした。

と、医務室のドアが開く音がした。足音がこちらへとやってくる。仕切りの向こうから姿を現したのはウール力だった。この場に似合わない、いつもの笑顔を浮かべている。しかしその手には、銀の小さなプレートをしっかりと握っていた。スピラ使いの墓標となる、プレートだ。

ウール力はこちらまで来ると、そのプレートと長い銀の針をシギに差し出した。シギは青黒い斑点に侵された腕を伸ばし、黙ってそれを受け取る。プレートには、中央を空けて模様が刻まれている。この模様は種族によって違う。

シギはまるでそのプレートの重さを確かめるように手のひらに乗せ、見つめた。そして静かに、プレートの上に針の先を滑らせる。死んでしまった仲間の名前を、刻んでいる。それが終わると再び見つめる。こうして名前を刻まれたプレートは、本部裏にある深い泉に投げ入れられる。大抵のスピラ使いの遺体は収容できない。だから、その泉が皆の墓となる。

いつかは自分もこのプレートに名前を刻まれ、泉に投げ入れられる。そう思うと、エンジは妙な気分になった。死ぬのが怖いわけではない。そんなものはスピラ使いになると決めたときに覚悟し、受け入れた。しかし胸の奥で居座っていた冷たい感覚が粘着性を持った水のように伸び広がり、胸を締め付ける。冷たさが胸全体に浸透する。それは、この空気の重さに似ていた。息は普通にしている、しかし何故か息苦しいと感じる。カーテンの隙間から差し込む夕日が、妙に眩しく輝かしい。

「……シギ、いまから墓の泉に行く？」

ロロロネは釜の中身を混ぜるのを止め、シギに問う。

「薬、できたよ。泉行く前にする？ 後にする？」

シギは顔を上げ、閉められたカーテンの隙間から覗く夕日を見た。そして銀のプレートを枕の下に押し込み、針をウール力に返す。

「……泉は後で。『フレンフィール』で手伝いを終える時間だ、弟達が来るかもしれない、今日戻ってくると伝えたから。薬は……すぐ終わるのか？ 弟達に見せられたものじゃないんだが」

「すぐ終わるけど、多分かなり痛いよ？ いい？」

シギは黙って頷いた。ロロロネは一旦釜をシギに渡して棚のある仕切りの向こうへ行くと、大きなバットを持って戻ってきた。釜を受け取るとそれをベッド脇の小さなテーブルの上に置き、バットをシギの膝の上に置いてシギの腕をその上まで持ってきた。

「痛いよ、絶対痛いよ。我慢してね」

ロロロネは釜の中身を薬匙ですくうと、シギの青黒い斑点の浮き出た腕にかけてゆく。その薄い黄緑色をした液体の薬がシギの腕の青黒い斑点、その中央にある水晶のようなものに触れると、じゅつと音を立てて煙が上がった。シギは無表情だが、腕が震えている。しかし水晶のようなものは煙を上げると、溶けて失せていった。

ウール力はエンジの隣に座ると、やはりにこにこしながらそんな様子を見ていた。エンジはウール力をちらりと見る。するとウール

力はこちらへと顔を向けた。やはりにこにこ笑っていた。と、ウールカの帽子の下から、包帯が覗いていることに気付く。ウールカも、何かしらの怪我をしているらしい。もしかすると、見えない部分にはシギ同様に大きな怪我があつて、それを隠しているのかもしれない。しかしウールカはそれでも笑っている。シギが大きな怪我を負つてしまつても笑っている。仲間が死んでしまつたいまでも笑っている。——まるで、悲しんでばかりいられない、と言っているようだった。

第三章 暗闇の囁き（06）

すでに漆黒に染まった雲一つない空には、数え切れないほどの小さな星が宝石のように輝いていた。その中で昇りつつある月は、銀色に輝いている。満月ではないものの、今夜の空は明るかった。

賑わってきた『フレンフィール』を出たカロンとセンフィは、そこから大通りへと続く路地を歩いていった。路地には人氣がなく、そよ風が静かに流れている。普段は薄暗いものの、今日は空が明るい
ため、そう暗くはなかった。

「結構長く話してたんだな、オレら。ほら、お月様があんなところにあるぞ」

頭の後ろで手を組み上機嫌に歩いていたカロンが、不意に立ち止まって欠けた月を指差す。月は、空の低くもなく高くもない場所に浮かんでいる。

「……月って、食べたらいしそうだよなあ。金ぴかの月はもちもちしてそう。銀ぴかの月は氷みたいに冷たそう」

カロンはどうしていつも食べることを考えているのだろう。センフィはカロンの背後で苦笑した。

「あんたが月食べちゃったら、大変なことになるわよ。夜に月がなくなったら真っ暗になっちゃうじゃない。そしたら、あんた達レイモン族はみーんな夜何にも見えないわよ」

「それは大変だなあ。オレら暗いと何も見えないから……」

カロンは困った表情を浮かべるとその場にくるくると回転した。こつも軽々しく振舞われると、彼の背負った大剣がおもちやのように見える。カロンはぴたりと動きを止め、空を仰ぐと言った。

「それにしても、噂、本当だったんだな」

そうして、カロンにしては珍しい表情——真面目な表情を浮かべた。だからセンフィは目を丸くして、

「あんた、そういう顔できるんだ」

「そういう顔ってなんだよー」

次の瞬間、センフィは思わず小さく笑ってしまった。カロンが真面目な顔をしている、と再認識すると、思わず吹いてしまった。カロンはそんなセンフィを見ると、頬を膨らまし、目を座らせてセンフィを睨んだ。

「ごめん」

センフィはただ一言謝った。しかしカロンを見ると、先程の真面目な表情が思い出される。笑いがこみ上げてくるもそれを耐え、センフィは深呼吸をして満天の星を見上げた。

「……でも、噂、本当だったわね。信じられないわ」

カロンの真面目な顔を抑え、先程のネジュアの話思い出す。仲の悪いエンジとルーナは昔仲がよかったという噂。まさかネジュアその真実を知っているとは思わなかった。そもそも、この噂はデマであるとセンフィは思っていたし、周りもそう思っているはずだ。あの仲の悪い二人に、仲が良かった時期があるなんて、誰も考えら

れないし想像できない。しかしネジユアが言うのなら、二人が仲良しだったというのは本当なのだろう。ネジユアは嘘をつかない。

『ルーナもこの街の出身なのよ?』

ネジユアは首をかしげながらそう言った。

『なんか、みんなあの子が東南の村出身だとか言ってるけど、ルーナはこの街の孤児院で育ったの。本当よ、あたし、その頃からあの子と知り合いだったもん。それで十歳くらいの時にこの街を出て、そこにいる錬金術師に弟子入りしたんだ。で、魔法を学んで、この街に戻ってきたってわけ。そのせいでみんな、ルーナが東南の村出身だと思ってるんだね』

ネジユアはにやにやと笑いながら語った。

『小さい頃のルーナってね、いまみたいに……なんていうんだろう、かつこよくないって言うか、そう、引込み思案で消極的な子だったのよ。それで孤児院では他の子の仲間に入れなくて、それだけじゃなくていじめられっ子で、いつも一人で本を読むか泣いている子だったの。で、対するエンジは孤児院では人気者、子供達の中心だった。街から孤児院へやってきては、そこでみんなと遊んでいたのよ』

そこで溜息をついて、しかしネジユアは話を続けた。

『そこである日ねえ……何があったのか知らないけど、エンジは他の子と遊ぶのをやめて、いつも一人だったルーナと遊ぶようになったのよ。何があったのかは本当にわかんないけど……多分、ルーナがいじめられてるところをエンジは見たんだと思う。ほら、あいつ、

地味に正義感強いでしょ？ だからきつと、ルーナをいじめからかはって、その成り行きで遊ぶようになったと思う。十年経ったいまでも思い出せるなあ……引つ込み思案で内気のルーナの手を引いて、エンジが街を走ってるの。そういえば、理由は分からないけどルーナが街の外に行っちゃって、それを聞いたエンジがすぐ探しに街の外へ飛び出した、なんてこともあったなあ」

信じられない話だった。

いまは非常に仲の悪いあの二人。そんな二人に仲が良かった時期があったなんて、誰が信じるのだろうか。衝撃だった。特にエンジとルーナが手をつないで遊んでいたなんて、想像できない。どう考えても、いまの仲が悪い姿しか考えられない。

じゃあ何で今はあんなにも仲が悪いの？ と、センフィは聞いてみた。しかしそこでネジユアは首を傾げ、腕を組んだ。銀髪が揺れる。

『あたしもよくわかんないのよね。気づいたら、ものすごく仲が悪くなっていたんだもの』

ネジユアですら、その理由を知らなかった。

「……あの二人、昔は仲が良かったのなら、なんで悪くなっちゃったんだろうね」

センフィは溜息をついて先へと進む。するとすでに進んでいた力ロンは歩きながら振り返った。そして声を漏らしながら考える。しかし首を振って、

「あの二人があんなにもケンカしてるんだ、理由なんて、オレ、わかんないや」

と、そう言った瞬間、カロンは立ち止まって正面を見た。センプイも思わず立ち止まる。カロンは薄暗い路地の先を見つめている。

「シェーラだ」

カロンがそう言うのと同時に、薄暗い向こうから小さな人影がこちらへと走ってきた。小一時間ほど前、『フレンフィール』で手伝いを終え店を出て行った双子の妹、シェーラだ。シェーラは息せき切ってカロンとセンプイへと走ってくる。その幼い顔はひどくつらそうな表情を浮かべていて、泣いている。シェーラはカロンの前まで来ると立ち止まった。手を膝につき、激しく咳き込む。

「ど、どうしたのシェーラ？」

カロンはしゃがみ込み、シェーラの顔を覗き込む。センプイはシェーラまで駆け寄ると、咳き込む小さな背をさすった。相当急いで走ってきたのだろう、シェーラは何か言おうとするが、咳のせいで言葉を発せずにいる。

「シェーラ、ちょっと落ち着いて」

センプイはシェーラに優しく声をかける。シェーラは涙で濡れた顔を上げ、そしてセンプイと目が合うとまた泣き出し、咳き込む。涙がぱたりと音を立てて地に落ちる。と、カロンが周囲を見回している。センプイが首を傾げると、カロンは眉をひそめた。

「ジエードは？」

そう言われ、センフィも気づいた。ジェードとシェーラは、いつも一緒の双子だ。しかし、兄であるジェードの姿がない。

「ジェ、ジェードは……」

シェーラが言葉を発する。しかしまたすぐに咳き込み、言葉が続かない。

「ゆっくり息をするの。無理に喋ろうとしないで」

センフィはシェーラの背をさすりながら彼女を見下ろした。シェーラはしばらく肩で息し続け、咳が大分治まってくると、顔を上げ二人に叫んだ。

「ジェードを、助けて……！」

シェーラは震えながらセンフィの服の裾をつかんだ。

「お兄ちゃんに会いに行こうとしてたら、広場に友達がいて、そしてジェード友達に馬鹿にされて、それで怒って……友達が『夕闇の森』行っ来いって言うから、『夕闇の森』に行っちゃった!!」

「え、本当？」

カロロンが顔を強ばらせてシェーラを見下ろす。シェーラは目をこすりながら黙って頷いた。

「センフィ、これまズくない？ 『夕闇の森』ってメチャクチャ危険だって言われてる——」

「うん……」

二人は顔を見合わせた。『夕闇の森』といえば、この街の近くにある森のことだ。非常に危険だと、教えられている。二人はしばらく何も言わずに互いを見ていたが、カロンは立ち上がるとシェーラに尋ねた。

「シェーラ、シギにこのことを話した？」

「話して、ない。お兄ちゃんには、心配させたくないから……」

するとシェーラはぽろぽろとまた泣き出す。

「お願い、ジエードを助けて！ もう、カロンとセンフィくらいしか、頼る人がいなくて……」

カロンは、ぽん、とシェーラの頭を撫でた。そしてセンフィを見る。センフィは苦笑いしながら答えた。

「急がなきゃね。いまから街の外に出れば、ジエードが森に着く前に追いつくかもしれない」

「おう。森に入られる前に捕まえないと」

そうカロンが言った瞬間、シェーラは電撃が走ったかのように震えた。カロンが驚いてシェーラを見下ろす。シェーラは、真っ青になっていた。

「ご、ごめんなさい……」

唐突に、謝る。

「ジエードが森に行ったの、大分前なの……しかも、家の子馬に乗

つて……だから多分、もう森に……」

シェーラの言葉に、思わずセンフィは声を上げた。

「大分前つて……どうしてその時にあたし達の所へ来なかったのよ！？」

「だ、だって……お兄ちゃんに言おうかどうか、困っちゃって……それに、あたし、ジェードがいないと何にもできないから……！」

そこまで言うと、シェーラはわっと声を上げて泣き出した。路地に幼い泣き声が響く。センフィは号泣する幼いシェーラを強く抱きしめた。

「ほらほら、落ち着いて、ジェードはあたし達が探してくるわ」

センフィが顔を上げると、カロンはすでに走り出していた。こちらを振り返って手を振っている。

「ギルドから馬を借りてくる！ センフィはシェーラを連れてギルドに来て！ もしすぐに馬借りられたら、センフィ達迎えに行くから、それでシェーラをギルドに預けてから『夕闇の森』に行こう！」

センフィは黙って頷いた。カロンは笑うと、路地の向こうへと走っていく。

「いい？ あたし達『夕闇の森』に行ってくるから、ギルドのみんなに何が起こっているか話してね。お願いよ。シギにも言うのよ、言われた心配よりも、言われない心配の方が重いんだから」

泣きじゃくるシェーラは黙って頷いた。センフィは笑うと、シェーラの手を引いて路地を進んだ。

第三章 暗闇の囁き（07）

『夕闇の森』について、詳しいことはわからない。恐ろしい場所であることと、奥地には素晴らしい薬草が多く生息している、という噂しか知らない。

何故詳しいことが分からないのか——それは、森の奥まで入り込んで戻ってきた者がいないからだ。だから誰も詳しいことを知らない。何が恐ろしいのか、一体どんな薬草が生えているのか、誰もわからない。そもそも、恐ろしいのは確かなのだろうが、素晴らしい薬草が生えているという噂の真偽が怪しい。森の奥に入り込んで戻ってきた者はいないというのに、何故そんな噂があるのだろうか。

「ちょっと寒いね」

センフィを乗せたままカロンは馬から降りると、風に舞うこの葉を見つめた。そして静かに待ちかまえるようにしてある『夕闇の森』の入り口を見つめる。まるで奈落へと続く入り口のようにだった。木々の間から見える闇は、じつとそこに居座り、こちらを見つめているかのようだ。しかしカロンはあまり恐怖を感じなかった。それよりも、視界の悪さに目を細める。

「中、やっぱり真っ暗なんだな。口口からライト借りてきて間違いないかったな」

カロンは首にかけたペンダントを手に取ると、その飾りにしては大きな水晶を手に握る。すると水晶は輝き、夜を照らす。本当は依然口口口ネが使っていた虫の触角のようなライトがよかったのだが、このペンダントを口口口ネから渡された。あのライトは、現在改良

中らしい。

鬱蒼とした森の入り口には、小さな馬が待つようにしてこちらを見ていた。恐らくジエードの乗ってきた馬だろう。近くにジエードの姿はない。きっと、何のためらいもなく森の中に入って言ったに違いない。

「センフィ急ごう。ジエード、きつともう森の奥だ」

カロンは少し焦った様子で振り返った。しかしそこにセンフィの姿はなく、センフィはいまだに馬に跨っていた。前方に、今さっきまでカロンが座っていた場所を空けたまま、手綱を握ることもなく呆然と座って『夕闇の森』を無表情で見つめている。

「センフィ？」

どうしたのだろうとカロンが声をかけると、センフィは我に返ったように目を見開いてこちらを見てきた。そして慌てて馬から降りると、カロンの隣へとやってくる。

「ごめん、ちょっとぼうつとしてた……」

呆けていたにしても、明らかにおかしい。カロンは眉をひそめてセンフィの顔を覗き込んだ。よく見ると、いつもよりセンフィの顔は青い。血の気を失っている。

「……どうかしたか？ 何か、死にそうだぞお前」

カロンが心配すると、センフィは難しい顔をして『夕闇の森』を睨んだ。森から流れてきた冷たい風が二人の間を流れていく。

「変な感じがするの、この森。なんていうか……この森自体が一つのスピラ、みたいな……なんだろう……」

「お前、ここで待ってるか？」

「ここまで来たんだから行くしかないじゃない……」

センフィが諦めた様子で先へと進む。首にかけたカロンと同じペンダントの水晶に手を触れると、明かりをつける。そして森の中へと入っていく。カロンは慌ててセンフィを追うと、センフィの前を歩いた。

「オレがお前の前を歩く。何か来たら、すぐに反応できるからな」
「うん、任せる。何か感じたらすぐに言うから」

森の中へと二人は進んだ。入った瞬間、まるで洞窟の中に入ってしまったかのように辺りが真っ暗になる。心なしか、空気も冷たい。振り返ると入り口がぼっかりと開いていて、そこから月光が差し込んでいて明るい。自分達が乗ってきた馬と、恐らくジェードが乗ってきたであろう馬が、こちらを見ていた。しかし、しばらく歩くと入り口はあつという間に小さくなって見えなくなり、森の暗闇が二人にのしかかった。

一歩踏み出すたび、靴の下で落ち葉や枝が折れる音がする。ペンダントの明かりで周囲を照らすと、辺りは普通の森のようだった。コケやキノコを生やした木々が点在し、シダのような植物が地面を覆っている。しかし、上を見上げるとそこは真っ暗だった。葉の間から月光が差し込んでもおかしくないのに、とカロンは思った。それと同時に気付く。何故月光が差し込んでこないのか、それはこの森の木々の枝や葉が異常なほどに生い茂り、空を隠しているからだ。

カロンはふと、地面を明かりで照らしてみた。地面には何枚か木々の葉が落ちている。葉のほとんどは緑色だが、数枚は何故か赤い。そこで近くの木にある低い枝を見てみると、そこに生えた緑の葉に混じって、赤い葉もあることに気付いた。

「センフィ見てよ、葉っぱが二色だ——」

カロンは不思議そうに言った。その次の瞬間、何かの妙な鳴き声が森の奥から聞こえてきてカロンは顔を上げた。高い笛のような、どこことなく不安になるような鳴き声だ。しかし場所は遠い。カロンは振り返ってセンフィを見た。

「何かいるみたいだけど、遠い……よ？」

しかし、そこにあるはずのセンフィの姿はなく。

「あれ？ センフィ？」

センフィがいつの間にか消えた。カロンは慌てて周囲を見回す。しかし暗いこともあり、センフィらしき人影はどこにも見当たらない。

「センフィどこ？」

来た道を引き返し、センフィの姿を探す。一体どこではぐれてしまったのだろうか。いつはぐれてしまったのだろう。こんな鬱蒼とした森ではぐれてしまえば、再会するのが難しいかもしれない。

カロンは歩くのを止めてその場に立ち止まると、目を瞑って周囲の音に集中した。下手に動くより、感覚を使って探すべきだろう。

風が枝や葉を揺らす音、何かの動物の鳴き声、様々なものが聞こえる。その中で、人の歩く音を探して神経を研ぎ澄ます。しかし聞こえてきたのは――小さな笑い声。

――誰かが笑ってる？

子供のような、高い笑い声だった。誰かが忍び笑いをしている。

ジエードだろうか、と、とっさにカロンは思った。しかし笑い声は複数聞こえる。

「一体何が――」

顔を上げた、その瞬間だった。

森の奥から切羽詰ったような甲高い悲鳴が聞こえてきた。悲鳴は森全体に響き渡る。

センフィの悲鳴だった。

森がざわつく。カロンは背の大剣を手にとると、悲鳴のした方へと駆け出した。センフィに何かあったらしい。

「センフィ！ どこ！？」

カロンは闇雲に先へと駆ける。しかし、いくら進んでもセンフィの姿はない。と、木に絡み付いていたツタの一本がうねったかと思うとあたかも蛇のように身をくねらせカロンへと飛んできた。驚いたカロンはとっさに立ち止まり、飛んできたツタを剣で払う。

「な、何だよ！」

予期せぬことにカロンは叫んだ。他のツタも、突然うねったかと思つとカロンへと殺到してくる。

カロンは目を見開いてそのツタを見ていた。しかし、すぐに横へと転がる。カロンへと迫り来ていたツタはそのまま地面へと突っ込む。しかし、それでも諦めずカロンを追ってくる。だからカロンは慌てて立ち上がると、地面に衝突したいくつものツタに向かつて大剣を振り下ろした。何本ものツタが、あっさりと切り落とされる。先を切られたツタは、その切り口から青緑色の汁を滴らせながら身をよじり、森の奥へと逃げていく。しかしまだツタは残っている。カロンは再び大剣を振り、まだ襲ってくるツタを切り捨て走り出す。こいつらを相手にしている暇はない、いまはセンフィを探し出すのが先だ。

ツタはもう追つてこなかった。走りながら背後を振り返ると、いままですき進んできた暗闇がある。そして正面を見ればまた暗闇。しかしカロンは走り続けた。

だが、頭上から笑い声が聞こえてきて、カロンは足を止めた。

「誰だ！？」

上を見上げる。するとそこには、木の枝に座る小さな影があった。人形ほどの大きさで、濃い緑のマントに身を包みフードを被っている。顔は明らかに人の顔ではない。猫のように長いひげを生やし、目は赤に鋭く光っている。耳まで避けた大きな口も真紅で、カロンを見て笑っている。

不気味な妖精がそこにいた。一匹だけではない。よく見るとあちこちにいます。皆木の枝に腰を下ろし、口の端を吊り上げてカロンを見下ろしている。

第三章 暗闇の囁き（08）

この妖精達がセンフィに何かしたのだろうか。カロンは大剣を強く握り、上空の妖精達に向かって叫んだ。

「おい！ お前ら！ センフィをどこやったんだ！？」

しかし妖精達は何も答えず、笑い声を大きくするばかりだ。と、その姿が透けるようにして、ぽつりぽつりと消えていき、全ての妖精が姿を消してしまった。カロンが慌てて周囲を見回すも、もう要請の姿は一つもない。しかし笑い声はまだ聞こえる。

と、突如木々が音を立てて揺れた。木々だけではない、地面も揺れている。葉が何枚も落ち、地面に降り注ぐ。

——地震？

カロンは立っていらなかった。よろめき、地面に膝をついてしまう。地震の中、まだあの妖精達の笑い声が聞こえる。あいつらの仕業だろうか、とカロンは顔を上げたが——目を見開いて周囲を見回した。

空を覆いつくし月光をも塞いでしまう木々。その木々が、移動している。

地面が波を打つ。すると木々はその波に乗って移動する。そうして、カロンがいままで進んできた道を塞いでいく。この森は生きている。とっさにカロンはそう思い、慌てて立ち上がると駆け出した。地面を覆う落ち葉が増え、足が滑る。しかしカロンはよろめきなが

らも走った。この森は危険だ、早くセンフィとジェードを探して脱出しなければ。胸の上で、ペンダントの明かりが弾む。

だがカロンが行く先に、木々が移動してきた。道を塞ぐようにして立った木は、生やした枝を下に向けて更に道を塞ぐ。そしてどこからともなくツタが這ってくると、また道を塞ぎ、カロンへと伸びてくる。これでは先に進めない。カロンは足を止めると、他の道へと走った。しかしその道も木々がやってきて塞いでしまう。

背後からはいくつものツタが迫ってくる。逃げ道はもうなかった。カロンはその木々が作り上げた袋小路に背を向けると、向こうから迫り来るいくつものツタへと向けて剣を構える。ふと足下を見れば、白くて長い何かが転がっている。白骨だ。恐らく、人間の。

顔を上げると、ツタがすぐそこまで迫っていた。ツタはカロンの前で立ち上がると、あたかもカロンに覆いかぶさるようにして襲い掛かった。

その瞬間、カロンは自身のスピラを解放した。スピラは体内で一気に燃え上がる。

無意識に目を見開く。大剣を握る腕が、勝手に動き出す。大剣は宙を滑り走る。

次の瞬間、迫り来ていた全てのツタの先が木っ端微塵になり消滅した。全てが切り落とされ、ツタはもたえるようにして身を震わせると木々の間へと引っ込んでいく。

それでも身体が敵を追おうと、無意識に動こうとする。そこでカロンはスピラを抑えると、勝手に動こうとしていた止まった。

道を塞いでいたツタが退いていく。カロンはその間を走った。急がなければ、またやってくる。だが、すぐに止まってしまった。道はまた塞がれていた。振り返っても道は塞がれている。どこを見ても塞がれている。閉じ込められてしまった。

ならば、木々を切り倒すまでである。カロンは大剣を振りかぶると、一本の木へと向かって振り下ろした。しかし――振り下ろすよりも先に、背後で爆発が起こった。

振り返ると、全てを塞いでいた木々の壁に穴が開いていた。そこでは白い炎が燃えて揺らいでいる。何が起きているのか、カロンは理解できなかった。

「こちらへ」

白い炎の向こうから声がした。

「こちらへ」

カロンはためらうことなく炎の中へと突っ込んだ。暗闇から白へと景色が変わり、眩しさに目を閉じる。そして炎の中を抜けると地面に転がった。膝をつき身体を起こすと、すすだらけになった顔を上げた。

「……ルーナ？」

そこは木々の開けた場所だった。だが空は相変わらず木々の枝と葉が埋めている。小さなドームのような場所だった。その中央で、ルーナが座り込んでいた。

——なんでルーナがここに？

ここしばらく姿を見ていなかった魔法使いが目の前にいた。一体、何をしていたというのだろうか。だがそんな疑問も、ルーナの腕の中を見た瞬間、頭から吹っ飛んでしまった。

ルーナは、片手に杖を握っているも、ぐったりとしたセンフィを抱えて座り込んでいた。

「センフィ！！」

安心は一瞬だけだった。すぐに不安に変わってしまう。カロンは大剣を投げ出し二人へと駆け寄った。そしてセンフィの顔を覗き込む。センフィは目を硬く瞑り、顔を青ざめさせている。

死人の顔のようだった。怖くなった。センフィが死んだなんて、考えられなかった。

「ルーナ、センフィは、センフィは——」

カロンは助けを求めるようにしてルーナを見た。言葉が震えた。手も震えている。しかしルーナは笑って答えた。

「生きてます。安心してください」

だがカロンは信じられなかった。それほどに、センフィの表情は死人のものに近かった。

「でも、でも死んじゃってるみたいな顔してる……どうしよう……」

「どうしよう……！」

「気絶してるだけですよ、だから安心してください」

「本当？」

「はい」

よく見れば、センフィは息をしていた。それを見てカロンはようやく溜息をついて安心した。みたところ、たいした傷もなさそうである。

「よかったあ……本当によかったあ……」

安心すると、全身の力が抜ける。と、背後で轟音がした。振り返ると、先程までできていた木々の壁を、移動してきた新たな木々が塞いでいた。燃えていた白い炎にはツタが伸び覆って消火している。カロンは急いで立ち上がると、投げ出した大剣を拾い構えた。だがルーナは、

「襲ってきませんよ。この森は賢いですから、勝てない相手に歯向かってきません」

ルーナを見れば苦笑いを浮かべていて。

「この森を一回燃やしましたから」

「……え？」

「この森を安全に歩くには、力を見せつけておかないといけないんです。だから燃やしました。手間がかかった上に、燃やしてもすぐ復活してしまいましたが。でも少なくとも私のそばにいれば、この森も下手に手を出してきませんよ」

ルーナが笑顔で言う。ルーナの魔力であれば、森を燃やすのは容

易いことだったのだろう。しかし大胆なことをする。カロンは思わず苦笑した。

「ルーナそれやりすぎじゃん？」

そして頭も大分落ち着き、改めて思う。カロンは首を傾げて聞いた。

「てか、なんでルーナここに？」

するとルーナは何故か難しい顔を浮かべた。

「ちょっと用がありましたね……あなた達は、ジエードを探しに来たのでしょうか？」

不意にルーナに言い当てられ、カロンは驚いた。そしてまた焦る。

「何で知ってた？ 言う通りなんだけど……ジエード見た？ あいつ、一人でこの森入っちゃったみたいなんだ……！」

すると、ルーナの背後から、小さな人影が出てきた。それは紛れもなくジエードだった。ジエードは、何か恐ろしいものを見たような表情を浮かべてカロンを見ている。

「ジエード……！」

カロンが思わず声を漏らす。ルーナが溜息を吐く。

「森が騒がしいと思ったら、この子が入り込んでいましたから、助けましたの。あなたとセンフィはこの子を探しに来たのでしょうか？」

センフィを見つけですぐそう思いました……でも、センフィをこの森に連れてくるべきではなかったですね。この森は人を不安にさせる要素で満ちています、感覚のいいセンフィには耐えられませんか」

森に入る直前の、青ざめたセンフィを思い出す。やはり置いてくべきだったのだ。カロンは申し訳なくなり、俯いた。

「あなたもあなたです」

ルーナはジェードへと視線を移す。ジェードは声をかけられ、びくりと身を震わせた。しかしルーナは容赦しない。

「カロンやセンフィ、私がいたからいいものの、勢いで危険に突っ込むなんて、どうしてそんなことをするんですか。下手したらいま頃死んでいたかも知れないんですよ」

ジェードは口を固く結び、俯いた。

「う、ごめんなさい……」

ジェードの口調は震えていた。ルーナはそれを聞いて、深く溜息を吐く。その溜息に、カロンは妙なものを感じた。呆れの溜息ではないような気がした。

「カロン、センフィをお願いします」

ルーナがカロンを見上げる。カロン大剣を背負うと、センフィを腕に抱えて立ち上がった。そしてルーナも立ち上がる。ジェードはルーナから離れカロンへと駆け寄ると、カロンの服の裾を固く握っ

た。

「外まで案内します。ついて来て下さい」

ルーナはカロンに背を向けると、先へと進んでいく。木々やツタが、行く手を阻む様子はもうなかった。それどころか、木々は移動してルーナの進む道を作っている。

カロンは黙ってルーナの後を追った。そうしてしばらく歩くと、外へと出た。そこは森の入り口だった。二頭の馬が一行を見て嬉しそうに目を輝かす。上空を見れば、満天の星が広がり月が輝いている。

「外だあ……」

カロンは空を仰ぎ、深呼吸する。そしてジェードを見下ろし、

「さあ、帰ろう。シギとシェーラが心配してるぞ」

ジェードは黙ってうなずいた。そして自身の子馬へと駆け寄る。カロンもぐったりとしたセンフィを馬に乗せ、そして自身も馬に乗る。だが、ルーナが森から離れないのに気がついた。

「あれ、ルーナ帰らないの？」

ルーナは苦笑いを浮かべた。

「私はまだ用がありますので……先に戻っててください」

用とは一体何なのだろうか。気になるも、カロンは何も言わずに

頷いた。いまはセンフィの身が心配だった。センフィはいまだに目を覚まさない。

「わかった……気をつけて」

カロンは馬を操りルーナへと背を向ける。そしてジェードについてくるように目で言うつと、走り出した。

ルーナは小さくなっていくカロンとジェードの姿を見ながら溜息を吐く。そして月を見上げ、森の中へと戻っていった。

第三章 暗闇の囁き（09）

ひどく息苦しく、エンジは目を覚まし飛び起きた。激しい動悸に耐えられず、胸に手を当てうずくまる。まるでスピラを使いすぎてしまった後のようだった。呼吸は荒く、激しく乱れている。滝のような汗が流れている。身体全体が、小刻みに震えている。三日前訓練場で倒れてしまった時と同じだった。突然動悸が激しくなり、息苦しくなり、倒れてしまった。

だが、今回は気を失うことはなかった。しばらくすると呼吸が整ってきて、動悸も治まってくる。身体の震えも止まった。しかしエンジは胸に手を当てうずくまったまま、ベッドの上から動こうとしなかった。

自室の中は真っ暗で何も見えず、おそらくまだ夜中であるのだろう。静かだった。

エンジは身体にかかった毛布をどけると、ベッドから降りて、部屋の窓へと向かった。閉められた窓を開ければ部屋の中に夜風が入り込む。汗をかいていたこともあり、風は身を切るかのように冷たいが、とても心地よかった。エンジはしばらく、窓のそばで夜風に当たった。窓の外を見ても、真っ暗でよくわからない。空を見ても漆黒である。しかしエンジは深く溜息を吐くと、その漆黒の空をぼんやりと見上げた。今晚は曇っているらしい、いつもは月がよく見えるのに。

と、何か違和を覚え、エンジは外から部屋の中へと視線を向けた。真っ暗の部屋の中、廊下へと続くドアがあるはず場所の向こうに、人の気配を感じる。

間違いない。部屋の外で誰かが立っている。

部屋の外の気配は、エンジの部屋のドアの前から一向に動こうとしない。自分に用があるのだろうか、とエンジは思うも、それなら何故ノックせずにいるのかと考える。そもそも、どうして夜中にやってきたのだろう。寝ているかもしれないのに。一体誰なのだろうか。

そう思った矢先に、部屋のドアをノックされた。やはり自分に用があるらしい。一体誰がどうしてこんな時間にやってきたのだろう。エンジは疑問に思いつつも静かにドアまで進み、ドアノブに手を伸ばした。そしてドアを開けようとするも、そこで固まってしまった。

ドアの向こうの気配が、考えられないものだった。

普段自分に敵意むき出しのスピラを押しつけてくる相手が、何故か今はスピラを押さえてそこにいる。

エンジはドアを開けることができなかった。だからといって無視することも、スピラを放出して相手を押すこともできなかった。それほどに予想外のことだ、思考が停止してしまった。エンジはドアノブに手をかけたまま、何もせず、何もできなかった。

しかし、

「——エンジン」

名前を呼ばれ、何故か背筋に冷たいものが走った。その声は紛れもなくルーナの声で。

こうして名前を呼ばれたのは、何年ぶりのことだろうか。

ドアの向こうにいるのは、確かにルーナだった。

「開けてください」

ルーナが淡々とした口調で言う。しかしエンジはそれでも動かない。ドアノブを握ったまま、ドアを見つめる。だがしばらくして、

——あいつが俺に、何の用だ。俺はお前に用はない。

ふつつつと、怒りが沸いてきた。何故こいつの命令に従わなくてはならない。何故こいつと顔を合わせなければならない。そんな道理はどこにもない。

だからドアから離れて無視をしようと思うも、身体が言うことを聞かない。ドアノブから手を放そうとしない。何故か怖かった。

ルーナが怖い、と思っている訳ではない。ルーナに逆らってはいけない、と思っている訳ではない。

むしろ、自分はルーナを越えていなければいけない。

十年前の記憶が脳裏によぎって暴れ出す。忘れたくても忘れてはいけない記憶。トラウマのような、それ。

「開けてください」

開けてはいけない。

しかし気付けば身体が勝手に動き、ドアを開いていた。

廊下は部屋と同じく明かり一つないようで、真っ暗だった。しかしすぐそこに人影が立っているのだけはわかる——ルーナだ。

一体何の用で来たのだろう。一体何を思っているのだろう。

ルーナの表情を伺う。しかし暗くて全く見えない。全てが暗く、何も見えなかった。

ドアを開けてしばらくして、ルーナは何もしようともしなかった。言葉を発する様子もなければ、スピラを発する気配もない。動く気配もない。ただそこに立っている、それだけだった。

エンジンも何もできずに、暗闇の中のルーナを見つめた。

物音一つもない暗闇の中、二人は何もせずに立っていた。

しばらくして、滴の落ちる音がした。一滴、二滴と、暗闇の中で音がする。ルーナが顔を上げたように見えた。

「……これが見えないんですね？」

不意にルーナが口を開いた。一体何のことを言っているのか、エンジンにはわからなかった。

「今晚は満月で、こんなにも明るいのというのに、これが見えないんですね？ 視界は真っ暗なんですね？」

——今晚は満月で明るい？

そんなはずはなかった。現に先程窓の外を見たとき、空は曇っていて満月なんてなかった。部屋の中だって月光はないし明かり一つもなく、暗闇だ。

一体ルーナは何を言っているのだろうか。

その直後、エンジは脇腹に異変を感じた。

全身の体温が一瞬にして下がったかと思うと、脇腹だけがじわじわと熱くなり、それが全身へと伝わっていく。脇腹が燃えるように熱く、痛い。全身から気持ちの悪い汗が出てくる。脳の奥も熱くなり、吐き気がこみ上げてくる。

「あ……？」

襲いくる全ての感覚に耐えられず、エンジはうずくまった。脇腹に手を当てると、何かが刺さっていて、そこから熱い液体が溢れだしていた。

暗闇だった視界が、何故が段々と明るくなってくる。そうして脇腹を見れば、そこにナイフが深々と刺さっていた。そしてそこから溢れ出す黒い液体は血であるのだろうか。

頭がぼんやりとしてきた。全てのものが激しく襲いかかる気持ちの悪い感覚に飲まれていく。何もわからなくなっていく。

わかることはただ一つ。

自分はルーナに刺されたのだ。

何故、なんのためになど、考える余裕もなかった。身体が痙攣している、息苦しい。エンジはナイフが刺さったままの脇腹を押さえ、床に倒れる。

ルーナを見上げる。先程まで真っ暗闇で見えなかったルーナの姿が、いまは月明かりに照らされてよく見える。しかしそれも徐々に見えなくなってくる。

最後にルーナの表情を見る。ルーナは泣いているような表情をしていた。いや、怒っているようにも見える。

ルーナの背後に、デューモの姿が見えた。

そこまでが限界だった。その直後、感覚は全て消え、意識すらも暗闇に飲み込まれてしまった。

第三章 暗闇の囁き 終

第四章 甘い迷宮（01）

クラン・ギルドの最上階の部屋に、明かりは一つもなかった。しかし部屋の奥にある巨大な窓から差し込む満月の光で、部屋の中全体がはつきりと見える。様々な本、いくつもの羽、何に使うのか分からない奇妙な品々が、こころなしか不気味に見える。デイーモは巨大な窓の前で回転椅子に座り、大きな窓の外を見上げていた。そこにあるのは紺碧の満天と、黄金の満月。

「随分綺麗な満月じゃのお」

デイーモは膝の上に乗せた一羽の白い鳩を撫でながら呟く。

「こんなに綺麗だと、感動を通り越して、何かうずうずしてこないかの？」

子供のような笑みを浮かべ、巨大な窓と月光に背を向ける。そしてデイーモは振り返り、ルーナを見た。

ルーナは階段へと続く扉の前に立っていた。俯いていて、顔を上げようとはしない。片手には根元から切り取られた何本かの白い花を握っている。『夕闇の森』の奥地で、ようやく見つけてきたものだった。デイーモはそれを見て、満足そうに笑った。

「おお、見つけてきたか。お前にしては遅かったのお、もう少し早くに見つけると、わしは考えとったんじゃが……うぬ、期限ぎりぎりになってしまったのか」

膝の上で眠る白い鳩を、デイーモは両手で包み込むように抱えた。

そして机の上に置かれた籠の中へと入れる。籠の中にはもうすでに、何羽か鳩がいて眠っている。デイーモに抱えられた鳩は驚いて一瞬目を開けるも、籠の中に入るとまた眠り始めた。

籠の中で眠る鳩達をデイーモは見つめ、そして顔を上げてルーナを見た。しかしルーナは顔を上げなかった。片手に握った花を固く握り締め、下唇を噛む。両肩が小刻みに震えていた。

「……ルーナよ、お前さんはいつまで経ってもやっぱり泣き虫なんじゃない」

しばらくして、デイーモが口を開いた。

ルーナは涙が溢れ出す目をこすり、顔を上げる。しかしそれでも涙は止まらずまた目を擦る。先程から耐えてはいるも、涙は抑えきれない。

悲しくて、どうにもできないことがあって、すると涙がすぐに溢れてくる。自分の涙を見ると、自分の弱さを思い知ってしまい、また涙が溢れる。泣き出すともう止まらない。ルーナはついに小さく声を漏らしながら、泣き始めた。手に握っていた花を床に落とし、両手で目を擦る。

「……一体何がそんなに悲しいのじゃ、ルーナ。まだエンジは生きてるぞ」

デイーモは深く溜息をついた。ルーナが口を開くのを、静かに待っている。しかしルーナはただ泣くばかりで、ものを話そうとしない。暗闇と月光の中、ルーナの鳴き声だけが響いた。だがしばらくして、ルーナは苦しそうに言葉を発した。

「な、ない、ふ……ナイフ……ナイフが……見つから、ない……」

声が急に高くなる。

「呪いを解くのに必要な、ナイフ、が、見つからないんです……！」

そこまで言うと、ルーナは先程よりも激しく泣き始めた。だがデイーモはその様子を見て、満足そうに頷いた。小さく笑みを浮かべる。それは普段のからかうような笑みとは全く違う表情で。

「ふふ、そうじゃ、言葉にせねば伝わんぞ？」

不意にそんな不思議なことを言うので、ルーナは顔を上げた。デイーモはルーナではなく、ルーナの横を見ている。

「……そこにあるものを見てみるがよい。幸せになれるじゃろ」

デイーモの視線の先には、本の山があつた。この本の一つに、何か書かれているのだろうか。だがそう思った矢先に、不意にその本の山がひとりでに崩れた。そして山の中から、小箱が一つ現れた。

「美しい小箱じゃろ？　これほど珍しいものは他にないぞ。中には希望が詰まっている——さあ、早く開けてくれ。いつまでもお前さんに泣かれていては困る。わしの可愛い鳥達が目を覚ましてしまう」

ルーナは呆然と現れた小箱を見つめた。暗くてよくはわからないが、鶯のような装飾が月光に輝いている。デイーモを見れば、早く開けてくれ、と目で訴えている。

恐る恐る小箱を手取る。思った以上に重かった。そしてふたを開け、ルーナは息を呑んだ。

探していたナイフが、小箱の中に横たわっていたのだ。

「その薬草と、そのナイフで、エンジの呪いを解くことができる」

デイーモは静かに椅子から立ち上がると、ルーナへと歩み寄ってくる。

「錬金術でその薬草とナイフを合成し、新たにナイフを練成する。そう、神聖なナイフが出来上がるのじゃな。そしてそれで呪われし者を切り裂き、血に溶け込んでいる呪いを体外へ流し出す……」

ルーナは無言でナイフを手を取った。ナイフの刃は透明だった。月光がナイフの刃の中に入り、輝いている。

ルーナのすぐそばへとやって来たデイーモは、床に落ちた花を拾い、手のひらをルーナへと差し出した。

「さあ、そのナイフをくれ。あとはわしの仕事じゃ。ご苦労じゃった」

だがルーナはその意味が分からず、ナイフを握ったまま首を傾げた。だからデイーモは笑う。

「お前さんには、『夕闇の森』に行つてこの薬草を取ってきてもらうだけでよかったのじゃ。わしが行つてもよかったものの、まあ何、ルーナ、お前さんはエンジの異変に気付いておったし、呪いを解く方法を探していたから手伝ってもらっただけじゃ。それに、手伝い

たかっただろうし……『夕闇の森』に勝てる人間なんて、お前さんくらいしか思いつかなかったからの。お前さんはもう部屋に戻って安心して寝る」

ルーナは言われるままに、デイーモにナイフを手渡した。片手に花を、片手にナイフを握ったデイーモはその二つを見つめると、回転椅子へと戻り腰を下ろした。呪いを解くのに必要な道具の二つを机の上に置き、じっと見つめる。

だがルーナは部屋から出ようとするどころか、動こうともしなかった。デイーモが机の上に並べた花とナイフを見つめたまま、動かない。その様子に気付き、デイーモは顔を上げた。

「部屋に戻っていいぞ？」

「……あとはデイーモが、全てを済ませるのですか？」

ルーナは静かに尋ねる。デイーモは黙って頷いた。ナイフを握ると、指で弄ぶ。

「ここから先、お前には荷が重過ぎるからの。なんせ——エンジを掻っ捌かなければならぬ」

軽々しく握って遊んでいたナイフを、デイーモは不意にしっかりと握ったかと思うとそれで宙を切る。すると神秘的で美しく見えた透明のナイフが、突に冷たいものとなった。優しく降り注いでいた月光も冷たくなったかのようにルーナは感じた。

「ルーナ、お前は優しい子じゃ。人を刺すなんてできぬじゃろ？ しかもこのナイフで刺すのはただの人ではない——エンジじゃ。お前の世界の中心、エンジじゃ。だからここから先は、わしが——」

「私がやります」

デイーモの言葉が終わる前に、ルーナはそう声をあげた。

「私が、エンジを助けます。エンジを助けたいんです。そのために……スピラ使いになったのですから」

デイーモは珍しく驚いたのか、目を少しだけ丸くした。そしてしばらく黙った後で、ナイフを机の上に置き、溜息を吐いた。椅子を回転させ、ルーナに背を向けて満月を見上げる。

「お前にできるとは思えん。しくじってもらうのは困る」

冷ややかに呟くように答え、振り返ってルーナを見つめる。しかしルーナは引かなかった。一步前へ進み出ると、影に隠れていたその姿が月光に照らし出される。もう涙の消え失せた凜々しい瞳でデイーモを睨むかのように見つめていた。

「できます。失敗なんて、絶対にしませんよ」

強い意気のこもった、しかしどこことなく弱々しげな声で、ルーナはまた繰り返す。

「絶対に失敗はしません。エンジを助けるためなんですから。だから——やらせてください」

デイーモは何も答えなかった。ただ静かに、月光の中のルーナを見つめていた。ルーナは凜々しい表情を浮かべている。その瞳にも意気が見える。しかしどこか脆く弱々しく、いまにも泣き出してしまいそうに見える。だが、両手は固く握られていた。

深く溜息を吐き、デューモはやはり何も答えず黄金の月を見上げた。空には雲一つなかった。

第四章 甘い迷宮（02）

そしてルーナは、ナイフでエンジを脇腹を抉った。

デーマと会話した直後、ルーナは自室へすぐに向かい、呪いを解くためのナイフを錬成した。全ての傷を癒す薬草と、全てに慈悲を与える女神の涙から生まれたといわれる薬草、そして特殊な素材でできた退魔の力を持つナイフ。この三つを一つに錬成して、どんな呪いをも解くことのできるナイフを新たに作り上げる。そう難しい錬成ではないものの、少し時間がかかった。

作り上げたナイフを片手に握り、自室を出る。真夜中のクラン・ギルド本部は静かで、しかし満月のおかげで明るかった。あとはこのナイフでエンジを刺し呪いを解く——エンジの血に溶け込み魂と身体を徐々に蝕んでいく呪いを、傷口から流れ出させればいい。それさえやれば、エンジは死ななくて済む。逆に刺さなければ、エンジはあと数日で死んでしまう。

『染まる光の呪い』——それがエンジにかけられた呪いの名だった。段々と瞳が濁っていき、果てには失明する。それと同時に魂と身体を蝕み、呪いを受けたものは最後、苦しみと暗闇の中で死んでいく。

エンジはこの呪いを、数週間前に退治に向かったクローディという馬の魔物から受けたに違いない。あの任務の後からエンジに妙なものを感じていた。嫌な予感がして様々な文献を調べた結果、ルーナはクローディという魔物のこと、そしてクローディが使ったとされる魔法『染まる光の呪い』を知った。一時は絶望したもの、こうして呪いを解くナイフをなんとか手にいれた。

あとはこれでエンジの呪いを解くだけ。それでエンジは救われる。

ルーナの部屋はクラン・ギルド本部の三階、階段の近くにある。対してエンジの部屋は同じ階であるが廊下のずっと先にある。ナイフを堅く握り部屋から出たルーナは、無言で廊下の奥へと進んだ。真夜中の静寂の中、足音一つもたてずに向かう。

しかし一歩進む度、足は重くなっていき、呼吸をするのも苦しくなってくる。焦燥がせき立てるも、何ともいえない恐怖がそれを抑制し、先へ進ませまいとする。廊下の半分ほどまで来た時には、ひどい吐き気が胸の中で渦巻き始めた。全身が震え、気持ちの悪い汗が出てくる。手に握ったナイフを滑り落としそうになる。ナイフを見れば、月光に冷たく輝いている。

いまからこれで、エンジを刺しにいかねばならない。そう考えると足の力が抜けてしまい、ルーナはその場に座り込んでしまった。

体中の感覚がおかしい。冷たいようで、しかし熱いようで、自分の鼓動が、まるで耳鳴りのようになって襲ってくる。胸の奥で渦巻く吐き気は、喉までせり上がってくるも外に出ようとせず、また胸の奥へと戻って渦巻く。全てが先に進ませまいと、ルーナに牙を？く。手元から離れたナイフが、嘲笑うかのように冷たい輝きを放っている。

エンジを助けるには、このナイフで貫かなければならない。

そうしなければエンジの呪いは解けないのに、そうしなければエンジは助けられないのに。

——身体がいうことを聞かない。

このナイフを捨てて逃げ出したい。

エンジを傷つけるなんて——自分にはできない。

例えばそれがエンジを救う結果になっても、自分にはできない。

自分はエンジを助けるためにスピラ使いになったのだ、何故エンジを傷つけないといけない。

「……うああ」

静寂の暗闇の中、声が漏れる。零れ落ちた涙が床に落ちる音が、妙に響いて聞こえる。

それでもルーナはナイフを拾い上げ、立ち上がった。眼鏡を一旦はずして涙を拭い、深呼吸する。身体の震えは止まらない、妙な感覚も止まらない、吐き気も治まらない。しかし暗闇の向こうを、エンジの部屋がある方を見据え、また一歩踏み出す。

これさえ乗り越えればいい。これさえ乗り越えれば、エンジを助けることができる。

ルーナは必死で歩き続け、ようやくエンジの部屋の前へとやってくる。立ち上がったからここまで進むのに、たった数秒、たった数分のことだったかもしれない。だが何時間ものことのように感じた。進む度に身体は重くなり、廊下は先へと長く成長していくようで。

ドアが開き、差し込む月光と共にエンジンが姿を現す。その双眸は黒い靄のようなもので濁りきっていた。もう殆ど目が見えていない証だった。その証拠に、エンジはルーナが突きつけたナイフに全く気付いていない様子で、刺すという行為自体は問題なくできた。

刺す直前のことははっきりと憶えていない。頭が混乱し感覚も麻痺し、何か会話したような気がするが、気がつけばエンジの脇腹にナイフを突き刺していた。

目前でエンジンがくず折れるのだけははっきりと見た。呪いが溶け込んでいる黒い血が溢れ出す、ナイフが突き刺さったままの傷を手で押さえ、エンジは床に倒れた。ひどく苦しそうな表情を浮かべ目を閉じ、全身を震わせている。

「——エンジンっ!!」

我に返り、ルーナは慌ててエンジの傍らへと座り込んだ。触れたエンジの身体は、恐ろしく冷たく、恐怖が波になって押し寄せてくる。

「ごめんなさい」

ルーナもエンジン同様に震えていた。

「ごめんなさい、ごめんなさい——」

先程よりも強い吐き気が渦巻いている。頭の中の一部が熱い。血のにおいで周囲が満ちる。空気が妙に冷たく、頭の中が熱い。身体も熱いのに指先だけは冷たく感じる。噴出す汗が気持ち悪く、吐き気がついに口元までせりあがってきたかと思えば、嗚咽を吐き出し、

涙が溢れる。誰かに喉を絞められているかのように息苦しい。脳裏に血を流し倒れるエンジの姿が焼きつく。

自分が刺したのだ。

自分がエンジを傷つけたのだ。

「ごめん、な、さい——！」

嗚咽交じりに言葉を吐き出し、エンジの脇腹に刺さったままのナイフの柄に手を伸ばして引き抜こうとする。しかしそのとたん、伸ばした手に電撃のように激しい痛みが走り、ルーナは思わず手を引っ込めた。

「まだじゃ。まだ抜いてはならぬ。呪いを全て出してからじゃ」

背後でディーモの声がする。振り向けばそこにディーモが立っていた。無表情でこちらを見下ろしている。

エンジは意識を失っているのだろう、固く目を閉じ、苦しそうに息をしている。身体は先程よりも冷たくなり、まだ震えている。

このまま死んでしまうのではないだろうか。ルーナはそれが怖くて怖くて仕方がなかった。

助けるはずのエンジを、自分は殺してしまったのではないだろうか。

エンジの冷たく力のない手を固く握る。そして振り返ってディーモをにらみつけた。月光の中、無表情で立つディーモはどこか冷た

く、鋭い刃物を連想させる。

「……どうして」

嗚咽ばかりを吐き出していたルーナは、息を大きく吸ってようやく言葉を吐き出す。

「どうして、私に、こんなことをさせるのですか……?」

溢れ出す悲しみの中、不意に怒りが沸いてくる。二つが交じり合っ
て出てきた言葉には怨嗟がこもっていた。しかしディーモは冷静に笑い、

「お前さん、何を言っておるのじゃ? お前がやると言っただから、
今があるのじゃ。少し落ち着け」

——そうだった。

エンジを助けたかったから、傷つけたのだ。しかしいくら助ける
ためとはいえ、本末転倒している。結果エンジが助かるという以前
に、自分はエンジを傷つけたのだ。

また吐き気がせりあがってきて、嗚咽と涙が溢れ出る。止めよう
がなかった。

「……よし、もういいじゃろう。呪いは全部出きった。もうナイフ
を抜いていいぞ」

ディーモに言われてエンジの傷を見れば、溢れ出す血は黒から赤
へと変わっていた。

「応急処置をしろ。わしは口を叩き起こしてくる。」

それだけを言うと、デイーモは姿を消した。しかしルーナは気に留めなかった。デイーモよりもずっとエンジンの方が大切だ。

床はすでに血で塗られていた。座り込んだルーナの服も血に濡れている。

エンジの脇腹に刺さったナイフを、息を止めて引き抜く。刃は真っ赤に染まっていた。そしてルーナは、手が血で濡れてしまうのを厭うことなく傷口に手を当てた。血は思っていた以上に温かった。

「……ごめんなさい」

嗚咽は少し治まってきた。しかし涙はいまだに止まらず溢れ出す。顔はもうくしゃくしゃになり、目と目元は赤く染まっていた。

目を閉じれば、溢れる涙がぼろぼろと落ちる。涙はエンジの身体と血に落ちる。涙と血が、二人の服を染めていく。

ごぶ、と不意にエンジンが咳き込み血を吐いた。驚いてエンジの顔を見れば、エンジはうつすらと目を開けてこちらをみていた。気がついたのだろうか。

とっさにルーナはエンジンから顔をそらした。顔を合わせる権利はもうないし、くしゃくしゃになりたいまだに泣き虫の顔を見せたくないかった。しかし、

「——ごめん、ルーナ」

あまりにも突然のことだった。ルーナは目を見開き、エンジンへと振り返った。

僅かに目を開いてこちらを見つめるエンジンの目に、もう濁りはなかった。

血が少し流れ出ているエンジンの口が動く。

「ごめん」

そうしてエンジンはまた目を瞑り、もう喋ろうとはしなかった。

第四章 甘い迷宮（03）

すすり泣きが聞こえる。

——また誰かに泣かされたのか？

エンジはとつさにそう思いつく。

——それとも転んだか？ 怪我したか？ ネジユアのとこ、行くか？

目前には幼い少女が立っていた。十歳程だろうか、その少女は目元を両手で拭いながらすすり泣いていた。そういえば、まだこの頃は眼鏡をかけていなかったか。涙で潤んだ瞳が良く見える。吸い込まれそうなほどに良く澄んだ、まさに晴天のような、空色の瞳。と、少女がゆっくり顔を上げる。目元を拭うのを止め両手を下ろし、服の袖の下で小さな拳を作っているのが見える。上げた顔の目元は、泣きはらしたせいなのか、擦りすぎたせいなのか、赤くなってしまうっている。空色の瞳からこぼれた涙が、頬を伝って地面に落ちる。

——違う。

胸を強く突かれたような衝撃が、突如エンジを襲う。そのとたん、心臓が爆発するのではと思うほど鼓動が一気に速まる。頭の奥がまるでそこから溶岩が溢れ出てきたかのように熱くなり、熱に染まっていく。

少女の口が動く。何か言ったように見えた。しかし声は聞こえないし、唇の動きを見ても何を言ったかわからない。だがエンジは震

えていた。

——俺だ。

——こいつを泣かせたのは、俺だ。

世界が暗転する。しかしすぐに赤色に染まる。自分のスピラのよ
うな赤色ではなく、流れ出たばかり血のような、妙に鮮やかで綺麗
でしかし恐ろしい色。そのにおいまでもがしてきたかと思うと、突
然血色は眩しい程の白になった。

目を開けると、白い天井が見えた。

「……」

身体を起こそうとすると、脇腹に鋭く激しい痛みが走った。そこ
でそろそろと身体を起こすと、自分がベッドで寝ていたことにエン
ジは気付いた。周囲を見回すと、どうやらここは『ノーウェン』本
部の医務室のようだった。鼻を軽く刺すような薬のにおいがする。
窓は開いていて、そよ風がカーテンを揺らしていた。そこからちら
ほらと見える陽光の様子を見れば、どうやらいまは昼前後らしい。

エンジは窓際のベッドにいた。先日シギがいたベットの、向かい
にいた。他のベッドには誰もいない。というよりも自分以外、医務
室に誰もいないようだ。物音も気配もしない。

一体何故自分はここにいるのだろう。何も憶えていない。

先程から脇腹が痛む。自分の身体を見下ろせば怪我人用の簡単な
服を着ていて、その下を見れば腹部に包帯を巻かれていた。どうや

ら自分は怪我をしたらしい。しかし一体何故、と考えるも、やはり思い出せない。頭がぼんやりとする。

と、ドアの開閉する音が聞こえた。そして仕切りの向こうから音もなくヴィスが姿を現した。ヴィスはエンジのベッドの前に立つと、ボタンのような目を据わらせてこちらを睨んで来た。三本の尾がゆらりと揺れる。

「……俺、どうした？」

しばらくヴィスとにらみ合い、その果てにエンジは口を開いた。するとヴィスは目を細めて首を傾げた。尾がまた揺れる。

「憶えていないのですの？ ……ま、三日ほど寝ていれば仕方ないですね」

その言葉にエンジは眉を顰めた。

「三日寝てた？ 俺が？ 何で？」

「……何も憶えていないのですの？ 全くあなたは……」

ヴィスは深く溜息を吐き、それ以上は何も言わずドアの方を見つめた。それと同時に、再びドアの開閉する音がする。かつかつと足音がして仕切りの向こうから顔を出したのは、ディーモだった。

「ふむ。ようやく起きたか」

ディーモはエンジの前へと進むと、そこに立つヴィスを見下ろした。ヴィスは振り返ってディーモを見上げ、そして何か目で会話をしたらしい、ヴィスはディーモに軽く頭を下げると、何も言わずに

来た道を進み医務室を出て行ってしまった。

「戦力となるお前がいらないせいもあっての、任務が山積みなのじゃ」

デイーモはそう言うと、エンジの向かいのベッドに腰を下ろした。

エンジはすぐに尋ねる。

「おい、俺は一体どうしたんだ、何があったんだ？」

するとデイーモは一瞬目を見開くも、からからと笑って尋ね返した。

「お前さん、ルーナにナイフで刺されたのを憶えてないのか？」

——ルーナに、ナイフで刺された？

何のことを言っているのか全く分からなかった。戯言だろうかと一瞬思っても、次の瞬間記憶の波が押し寄せてきた。夜中に目が覚めたこと、ルーナが何故か部屋にやって来たこと、脇腹に刺さったナイフのこと——頭痛と眩暈がして、エンジは思わず頭に手を当てた。

「思い出したようじゃの」

エンジの様子を見て、またデイーモは笑った。それに対してエンジは何も言わずに俯くも、デイーモは言葉を続ける。

「さて、何で刺されたのかの？ どう思う、エンジ」

「……」

少し考えるも、思い当たることは一つしかなかった。

「俺のことが気に食わないからか？」

「では、何故気に食わないのか？」

デイーモは不意に立ち上がると、ずいとうエンジへと迫った。エンジは鬱陶しそうに手で払いのけた。

「うるせえ。知るかそんなこと」

そう少し大きな声を上げると、脇腹の怪我にまた痛みが走った。エンジは思わず脇腹に手を当て、顔を歪めた。デイーモは鼻で笑うと、元のように向かいのベッドに腰を下ろし、溜息を一つ吐いてからエンジへと尋ねた。

「……お前、最近目がよく見えなかったり、息苦しくなったりしたんじゃないのか？」

関係ないだろ、とエンジはとっさに答えようと思ったが、何も言わずにデイーモから目をそらしてしまった。確かにデイーモの言うとおりだった。

「それはな『染まる光の呪い』のせいじゃ」

デイーモは続ける。

「クローディを憶えておるか？ お前とカロンが退治した、霧を出す黒い馬じゃ。そいつに呪いをかけられてたんじゃ、お前は」

「目が見えなくなってきた、息苦しくなる呪いを、か？ なかなか治らないわけだ」

エンジは苛立ちと諦めのようなものがまじった溜息を吐いた。するとデューモが眉を顰めた。

「異変があつたら何か言えと、わしは皆に教えてるんじゃない――
―その呪いは、最終的に命を奪うのじゃ」

頭を殴られたような衝撃が、エンジを襲う。驚いてデューモを見れば、デューモは神妙な表情でこちらを見据えていた。まるで諭すような、叱るような、そんな表情を浮かべている。

「お前が異変を言い出すのをわしは待ったのじゃがな……誰にも漏らさぬから困ったぞ。が、そんな時、ルーナがお前の異変とその正体を見抜いての。だからわしはルーナに呪いを解く方法を教えたのじゃ」

「……それがナイフで刺すことだったのか？」

脇腹が痛む。頭の奥が熱い。

「そうじゃ。特別なナイフで刺す。これが呪いを解く方法じゃ。そしてルーナはそれを実行し、お前はめでたく死を免れたわけじゃ……ま、後遺症は仕方がないがの。ある程度は消えておるが、お前の目は一生黒く濁ったままじゃ。また視力もある程度は回復したと思うがそこまでじゃ。動悸ももう二度と起きないとは断言できぬ」

デューモは立ち上がると、腕を組んでエンジを見下ろした。

「しかし、ルーナに感謝するんじゃない。あいつがいなかったら、お前は今頃死んでるぞ。ルーナはお前の、命の恩人じゃ」

しかしエンジは俯き顔を上げなかった。

死に対しての恐れ、またそれを免れた安堵は何故かあまりなかった。普段から隣り合わせにある死を実感し、また生きているということを実感しながら戦っているというのに、それらを凌駕して内から沸きあがってくるのは何故か怒りだった。自分に対してか、ディーモに対してか、ルーナに対してか、何に対する怒りであるのか自分でもわからないが、確かにそれはふつつつと沸きあがっていた。歯を食いしばり、シーツを力の限り握り閉める。そうして出した声は、まるで怨嗟のようだった。

「よけいなことをするな」

ディーモに対してなのか、ルーナに対してなのか。怒りも、この言葉を向けた先も、エンジ自身、わからなかった。

気付くとディーモは、仕切りの向こうに姿を消そうとしていた。

「お前、まるまる三日寝てたが、まだ癒えてないじゃろ？　しばらくは安静しろ。それから迂闊に医務室を出るな。皆お前が呪いを隠していたことに腹を立てている。外に出たらばこぼこにされるぞ」

ディーモの姿が消え、かつかつと響く足音が遠のいていく。そしてドアの開く音。

「あともう一つ」

ディーモの声が響いてくる。

「ナイフでお前を刺すのはわしでもよかったんじゃが……ルーナが

お前を助ける、と言ってその役を買って出たんじゃよ」

ばたん、とドアの閉まる音。

怒りが更に沸きあがった。エンジはかたく目を閉じた。

——助けられてはいけなかったのに。

第四章 甘い迷宮（04）

陽光の暖かさと眩しさを感じる。

自室のベッドの上、布団を頭から被って寝ていたルーナはぼんやりと目を開け、布団から這いずり出た。そのままベッドの上で正座をし部屋を見回すと、窓から差し込む夕日が、部屋中のものを全てをオレンジ色に照らしていた。

部屋の中は荒れている。いくつもの本が床に無造作に落ちていた。開かれたままの本も転がっている。窓の前にある大きなテーブルの上にも本が山積みになされている。紙の束は広がって床を覆い、ペンも床に落ちていると思いきや傍らではインクのビンが倒れ、黒い水たまりを作っていた。

普段はこんなにも荒れていない。むしろよく整理し、掃除も頻繁にする。しかし三日程前からこうも荒れ始め、整理する気も掃除する気も起こらずいまに至ってしまった。

身体がひどく重く、だるい。ここ最近はまともに眠れていない上に、食事もうくにしていない。身体が弱っているだけではない、精神的にも弱り、それが身体的にも出てきてしまっている。

眼鏡を探し、ベッドの横にある小さなテーブルへと手を伸ばす。しかしそこに眼鏡はなかった。落ちてしまったのかと思ってテーブルの下を見れば黒インクの水分がそこまで広がっていて、眼鏡はその中に落ちていた。だがルーナは気に留めず、仕方ない、とベッドの上でうずくまった。あの眼鏡がなくても、生活に支障はでない。そもそもルーナは目が悪くなかった。あの眼鏡は度のないレン

ズがはまった、ただの眼鏡だった。

寒かった。というのも、ルーナはそう厚くないネグリジエを着ていた上に、裸足だった。布団を身体に羽織るようにして巻き付ける。すると、いくらか温かくなってくる。

しばらくルーナはその体勢のまま、動かなかった。ただ時間が流れていくの感じていた。

夕日が徐々に輝きを失っていく。もうすぐ夜になるのだろう。

ふと、エンジのことが脳裏によぎる。あの夜からもう三日が経っているも、エンジが目覚めたという知らせは聞いていない。

具合はどうなのだろうか。気になるも、ルーナはやはり動かなかった。医務室に行けばおそらくエンジに会えるのだろうが、いまの自分にそんな権利はない——助けようと決意したエンジを、結果はどうであれ傷つけてしまったのだから。

胸の奥が詰まり、目頭が熱くなる。

しかし泣く権利もない。

まだ泣いてはいけない。やることは残っている。こうしてじっとしている場合でもないのだ。

やるべきことを再確認し、身体に巻き付けていた布団を取り払う。そして床から本数冊とメモ書きされた紙を一枚手に取る。それから近くに落ちていた羽ペンを一つ拾い、床に広がる黒い水たまりに先を浸す。

ベッドの上で本を一冊広げ、目を通す。そのページの内容をあらかじめ理解すると、次のページへとめくる。気になる文章や単語があれば線を書き入れる。メモ書きの紙にもその文章や単語を書き、そこから考えられることも書く。

この作業をずっと続けている。しかし、いまだに探し求めている答えは出ない。いくつかそれらしきものはあるも、確かなものは何一つない。

もしかすると、探している答えはないのかもしれない。

だが信じたくなかった。諦めたくなかった。

ただひたすらに本を見つめ、読み終わったのなら次の本を手にする。

メモ書きがいっぱいになれば、新しい紙を床から拾う。メモ書きは枕の下に入れる。枕の下には、すでに沢山のメモ書きがある。

それでも見つからない答えを探して、ルーナはペン先を走らせた。

気がつけばもう日は沈み、部屋の中が暗くなる。そこでルーナは一旦作業を止め、壁に立てかけておいた杖を手にとった。魔力を注ぎ、杖の先から小さな火を発生させ、窓の前のテーブルに置かれていた蝋燭へと飛ばす。そして蝋燭についた炎が部屋を明るく照らし始めると、ルーナはまた作業へと戻った。

部屋の外から聞こえてきたのは、その直後だった。

幼い頃から聞きなれた声が、廊下を響いている。最近あまり会っていないかったが、間違いない。

ネジユアだ。ネジユアがクラン・ギルド本部にいる。普段は『フレンフィール』にいるはずなのに。

とつさにまずい、と思い、ルーナは慌てて蠟燭の火を吹き消した。そしてベッドに戻り、布団を頭から被る。

直後にドアをノックされる。

「ルーナ？ ルーナいるんでしょう？」

ネジユアがドアをノックしている。しかしルーナはそれを無視し、その声を聞きたくないとばかりに布団を掴む。

こんな顔を、こんな状態を、見られたくなかった。それに、ネジユアの顔を見てしまえば、きっと泣いてしまう。

「ルーナー！ ルーナーー！」

ノックが激しくなる。しかし、不意にそのノックが止まった。

「あ、デイーモ！ ちょっと、この部屋の合鍵持ってる？ あるなら貸して欲しいんだけど……え、ちょっと待って、何で無視するの！？」

足音が上の階へと登っていく。それから、カラン、と金属音が響いた。ネジユアが叫んでいる。

「……これで開けろっていうの!？」
「お前さん、得意じゃろ?」

デイーモの笑い声。

そして足音が再び部屋の前に戻ってきた。

「最近やってないんだよね……あー、時間かかりそ。デイーモも素直に鍵渡してくればいいのに……てか盗んじゃえばよかったかな……」

ネジユアがドアの前で何か愚痴をもらしている。

がちやがちやと、謎の金属音が聞こえる。

「……?」

一体何なのかと、ルーナは布団の下から顔を出した。その音はドアノブから響いているようで、ドアを見れば、何故かドアノブがその音にあわせて震えていた。

——こじ開けられている?

がちやり、と鍵が外れる音がした。あの金属音が止み、ドアが開く音がする。

ドアは開いてしまったようだ。

——入ってこないで!

それでもルーナは布団を被り、ベッドの上で丸まり続ける。身体が僅かに震えていた。

「うわ……何これ、暗いし」

ネジユアが部屋の中を歩いている。蠟燭に火をつけたのだろう、部屋の中が明るくなった。本と紙束を掻き分ける音がある。

「……ルーナ、何してるの？」

声が真上から降ってきた。そして布団を引き剥がされる。ルーナは抵抗を試みるも、布団はあっけなくネジユアに奪われてしまった。

顔を上げると、口を固く結んだネジユアの姿があった。だがその表情はすぐに柔らかな笑みとなる——十年前となんら変化のない、優しい表情。

「あれ、すごい隈できてる。美人がもつたいないなあ……それにちよつとやつれてるし」

ネジユアの銀髪が明かりに輝いている。眩しかった。その瞳も月のようで。

「……うつうつ」

声が勝手に漏れる。熱を持った目頭が、限界を迎えている。

「うつうつうつうつ……！」

全てにおいて限界だった。ルーナはネジユアに抱きつくと、十年

前と同じように泣きじゃくった。

第四章 甘い迷宮（05）

「うわ、ちょっと、どうしたの？」

ネジユアはそんなルーナを、困惑しながらも苦笑いを浮かべて受け入れる。それがまたありがたくて、ルーナは更に声を上げて泣いた。かれこれ十年ほど、家族のように甘え頼り続けた相手を目前に、我慢できなかった。

「ちょっと落ち着いて、ね？」

慣れた手つきでネジユアに軽く背を叩かれ、ルーナはネジユアに抱きつくのをやめ、両手で涙を拭った。呼吸も少し荒れ、咳が出る。しかししばらく黙って涙を拭っていると、呼吸も気分も落ち着き、涙も落ち着いてきた。

ネジユアが部屋に入ってきてから数十分後、ようやくルーナは顔を上げネジユアを見た。

「ごめんなさい、急に、泣き出したりして……」

「慣れてるから平気」

ネジユアは笑って答えた。そして部屋全体を見回し、困ったように溜息をついた。足下に転がっていた本をいくつか拾うと、壁際に積み重なる。床に広がっていた紙束も拾い集める。

「でも、部屋、荒れすぎ。ちょっとは片付けなよ……それにあんた、やつれてるよ？ 最近寝てる？ 食べてる？」

ルーナは質問に答えようとはせず膝を抱えた。部屋を片付け始めたネジユアをただじっと見つめる。だがネジユアが答えを催促するように作業を止めて見つめてくると、仕方なく答えるしかなかった。

「寝てないし、食べてませんよ……できないんです」

「眠れないし食欲もないってこと？ やばいね」

それだけを聞くと、ネジユアは片付けを続けた。壁際に本と紙の束が徐々に作られていく。

「何が必要で何がいらんのかわかんないから、ゴミとか自分でやってね——うわっ！ インク！ インクの水溜りができてる！
しかもそこに眼鏡水没してる！ あんた、眼鏡なくてももの見えるの？ 大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ、その眼鏡、伊達ですか」
「へっ？」

そう答えると、ネジユアはつと顔を上げ、不思議そうにルーナを見つめた。だからルーナは首を傾げると、ネジユアは苦笑いを浮かべた。

「いや、ね。あんたみたいな子が伊達眼鏡かけるとは思わなくてね……」

そうか、伊達眼鏡、伊達眼鏡かあ。ネジユアはそうぼやくように言いながら片付けを続ける。恐らく、何故伊達眼鏡をかけているのか気になるのだろう。このことはネジユアにも、誰にも話していない。

と、冷たい空気が部屋の中に流れ込んできた。本のページや、紙

の端を揺らしている。見ると、ネジユアが窓を開けていた。

「風はなかなか、いいもんだよ」

確かに言うとおりだった。僅かに開かれた窓から流れ込んでくる風は、冷たく心地いい。誘われるようにしてルーナはベッドを降りると窓辺へと進み、そこから夜の景色を見つめた。日が沈んだばかりのいま、まだ地平線の向こうは僅かに明るい。その僅かな光に入り、ルーナは思わず両手で窓枠を握った。風は泣きはらした顔をなで、長い髪に絡んでは通り過ぎていく。空を見上げれば、星が輝き始めている。月はまだ昇っていない。

しばらく窓の外を見つめ、それから部屋の中へと振り返ると、大分片付いていた。ネジユアは部屋の中央で、腕を組んでインクの水溜りを見下ろしていた。

「何か捨てちゃってもいいタオルない？ このインク、どうにかしたいんだけど」

「……いえ、もう十分です。後は自分でできます。片付けさせてしまつて、ごめんなさい」

泣いて、風にあたつたためだろうか、それとも部屋を片付けられたせいだろうか。先程に比べて気分が清々しい。溜めてしまったものの全てを吐き出し、消化できたようだった。熱を持って混乱していた頭の奥を、風が冷やしてくれた。

「……そ、様子見にきてよかったわ」

ネジユアはルーナを見つめ、溜息を吐いた。ベッドに腰を下ろすと、足を組む。

「店の客からさ、ルーナがエンジを刺したって話を聞いたんだ。何でも、エンジンが何か呪いにかかって、それを解くためにあんたがナイフで刺したって。でも、優しいあんたにそんなことができるのになって考えちゃってさ。できたとしても、きつと罪悪感が大きすぎて倒れちゃうだろうなって思ってたんだけど……やっぱり、辛いみたいね」

ルーナは何も答えず、目を瞑って俯いた。すると脳裏にあの晩のことがありありと蘇る。

冷たいナイフの輝き、倒れたエンジン、黒い血。思わず手を、固く握ってしまう。

「私は……あの人を傷つけてしまいました」

贖罪を求めるかのように出てしまった言葉が、自分自身に鋭く突き刺さる。

「でも、それはエンジを助けるためなんでしょ？」

ネジユアが尋ねる。しかしルーナは何も言い返さなかった。するとネジユアは見かねたように笑った。

「ねえ、ルーナ。あんたは確かにエンジを傷つけたかもしれない。でも助けたの。それは、事実さ。だから自信を持ってい」

慰めるようにネジユアは言い、ルーナは僅かに顔をあげた。

「本当に、そうでしょうか？」

「そうよ。あんたが呪いを解いてなきや、エンジン死んだのよ。いまあいつが生きてるのはあんたがいたからよ——さっき会ってきたけど、元気そうだったよ？ 暇で死にそうってばやいてた」

それを聞いてルーナは目を大きくして顔を上げ、少しだけ笑った。

「目を、覚ましたんですか」

「今日目が覚めたってさ」

——よかった。

心の奥底から、安堵の波が押し寄せてくる。全身の力が抜けてしまったようだ。ルーナは窓辺から離れネジユアの隣に腰を下ろすと、ベッドの上にあった本を一冊手に取り、また羽ペンも手に取った。

「そうならば、私も急がないといけませんね」
「ん？ 何？」

開いた本をネジユアが覗いてくる。しかしネジユアはすぐに難しい表情を浮かべた。

「何これ。意味が全然分らない。何したいの？」

だからルーナは苦笑して答えた。

「呪いの後遺症を治す方法を、探しているんです」

「呪いの後遺症？」

「はい。エンジンに会ったんですね？ あの人の目、ちょっと濁ってましたか？」

ネジユアは首を傾げ、しかしはつとしたように、

「ああ、何か変だった。あれがどうしたの？」

「あれが呪いの後遺症です。呪いが解けたとはいえ、その症状がまだ残っているんです——いまのエンジは、呪いにかかる前よりも視力が落ち、また突然動悸を起こす可能性もあります。それを治す方法を探しているんです。でも、なかなかみつからなくて……」

ルーナは枕の下からメモ書きを一枚取ると、ネジユアへと手渡す。ネジユアはそのメモ書きを見て、また首を傾げた。ルーナは説明する。

「いまのところ、有力な方法です——もともと、呪いの後遺症を治す方法なんて説明されていないんです。伝えられている方法は不可能なものばかりで……」

「ふーん。どれも意味が分からないや。必要な道具も意味わかんないし」

「伝説や幻といわれているようなものばかりです、必要な道具なんて。でもそれくらいしか、頼るものがないんです……」

果たしてこんなもので、エンジを回復させることができるのだろうか。自分で説明していて、不安になる。やはり、そんな方法はないのかもしれない。

しかし見つけたかった。見つけてエンジの後遺症を治したい。呪いにかかる、以前の状態に戻したい。

と、ネジユアが眉間にしわを寄せ、メモ書きの一文を指先で叩いた。

「ねえ、『死んでしまった部分をスピラで満たす』って、どういうこと？　なんかこれだけ下に線が引かれてるけど、いい方法なの？」
「ああ、それはですね——昔からよくある古風で、でも究極の魔法ですよ」

——死んでしまった部分をスピラで満たす。

考えただけで、無理なことだとすぐに答えが出てしまう。ルーナは俯いた。

「スピラは魂や心の力——全ての生き物は、このスピラが身体を満たしているから生きています。その文の、『死んでしまった部分』とは、何らかの原因でスピラがつかえてしまったところ、または空っぽになってしまったところですよ。今のエンジの、瞳と心臓ですよ」
「ふむふむ……考えるとなつまり、エンジの目と心臓は、スピラがない状態だつてこと？」

「完全にスピラがなくなつたわけではないんです。それだとエンジは失明してる上に……死んでますよ。いまのエンジの瞳と心臓は、スピラが満ち足りていない状態です。だからそこにスピラを流し込み満たせばいいんです。でも満たすだけではやがて尽きてしまいきます。だから、満たしてあげるのと同時に、刺激してあげるんです。そうするとその衝撃で元のようにスピラが沸いてきて、全て元通りになる……そういった、方法ですよ」

「いい方法じゃん！　それでいいこうよ！」

ネジユアは嬉々として立ち上がった。しかしルーナは更に俯いてしまう。

「だめです。できません」

「何で？ この方法、嘘だったりするの？」

「そういうことではないんです……むしろ、確実な方法です」
「確実な方法なら、それでいいじゃん。なんでだめなの？」

顔を上げると、ネジユアは困惑した表情を浮かべている。確かに確実な方法であるのなら、それを実行するべきだ。しかし——できない。ルーナは溜息を吐いた。

「ネジユア……この方法は、昔からよくある古風な究極の魔法と言いましたよね——呪いによって眠り続けるお姫様を目覚めさせるため、王子様は何をしましたか？」
「へっ？」

突然のことにネジユアはあっけにとられて、しばらく口を開けたまま固まっていた。ルーナはまた溜息を吐いて自分の頬に手を当てる。ひどく熱かった。おそらく鏡を見れば、いまの自分は真っ赤になっているのだろう。

冷たさを求めて、再び窓辺へと向かい外を見つめる。先程よりも風は冷たく、ひどく心地よかった。

「つ、つまり、です。その魔法……スピラで満たすというのは……スピラを与える者が自身のスピラを、キ、いえ、く、口移しで、回復させたい者に与えなければなりません……しかもそのスピラは強力なものでないとならないし、スピラを与える者、与えられる者の二人のスピラの相性がよくないと成功しません……だから、私には……できません」

そして振り返る——また、泣き出しそうな表情で。

「でも……私にできないからといって、その方法を誰にも教えたくないんです。その……誰にも、エンジをとられたくないんです……！ だからその方法は……見つけなかったことにします」

不意に大股で歩いたかと思うと、ルーナはネジユアからメモ書きを奪い取り、びりびりと勢いよく破いた。そして部屋の片隅にあったゴミ箱へと投げ捨て、ルーナはベッドへと飛び込んだ。布団を被り、中で震える。

エンジを助けたい。でも他の人にとられたくない。だからエンジを助けられない。

結局は自分のエゴで、エンジを助けられない。そもそもあんなひどいことをした自分に、こんなエゴを言う資格なんてないのに。自分は散々、エンジに嫌われているのに。

つくづく自分が嫌だった。

「ルーナ……」

ネジユアがベッドの片隅に座るのを感じる。布団の上から、優しく撫でられている。

「あんた……本当にエンジのことが好きなんだね」

——私には、エンジしかいなかった。

布団の中で、ルーナは涙を流す。

「私は——少しでもあの人の力になりたいだけです。嫌われてもいい

い、あの人の力になりたい。あの人が死んでしまいうリスクを減らしたい。あの人に――生きていてほしい」

十年前の『黒の日』。沢山の人々の死を見た。魔物に立ち向かったスピラ使い達の、惨めな死に様も見た。

幼い頃の記憶に、その地獄絵図が焼きついている。

そしてその後、エンジは――スピラ使いになると言った。

死と隣り合わせの、スピラ使いに。

「ねえ、ルーナ。あたし、大分前から思ってたんだけどさ……どうしてあんたはこんなにもエンジを想っているのに、仲が悪いの？」

ふと、ネジユアが尋ねてくる。

その答えは、もう、知ってるはずであるのに。

「見たままですよ……あの人は私のことが大嫌いで、私はあの人のことが大嫌いだからです」

布団の上から撫でていたネジユアの手が止まる。おそらく、首を傾げているのだろう。

「大好きだから……大嫌いなんですよ、私は」

ネジユアの疑問に、ルーナは囁くように答えた。

「……何があつたの？ 十年前に」

しばらくして、ネジュアが尋ねる。

「何もありませんよ」

ルーナは繰り返し、答える。

「何もありませんよ」

第四章 甘い迷宮（06）

ルーナはエンジのことを、昔から知っていた。彼がルーナ存在に気付く以前から、ルーナはエンジのことを知っていた。

街のはずれにある孤児院によく遊びに来る、自分と同年の男の子。孤児院の子供達のリーダーで、人気者。孤児院の広い庭で、他の子供達とよく遊びまわっていた。その様子をルーナはよく憶えている。

活発で無邪気なエンジに対して、ルーナはいつも、孤児院の図書室に閉じこもっていた。

皆に比べて身体が弱いというわけではなかった。何らかの理由で外に出てはいけないわけでもなかった。

ただ、同じ孤児院で暮らす子供達、大人達、皆に嫌われていた――ルーナの周りにいるとろくなことがない、と言われていた。

スピラ使いとしての素質があった、と言えば聞こえはいいかもしれない。しかし当時自分は溢れ出るスピラを制御する術を知らなかった。そもそも自分が何をどうしたかすらもわからなかった。感情が高ぶると、空気が冷たくなったり熱くなったりする。睨んでいたものに突然火が点いたり、コップの水が凍る。孤児院の者皆で大切に育てていた植物を、急激に成長させたかと思えば枯らして腐らせる。近くにあったものは吹っ飛んでしまったり、壊れてしまったりする。

ものに限った話ではなかった。人間にだってそうだった。誰かが

自分に害をなそうとすれば、その者はまるで鋭い風に襲われたかのような切り傷を突然負う。ひどいときには、相手を骨折させた。

孤児院でのルーナは、スピラ使いとしての将来を期待された人間などではなく、何かあればすぐに他人を傷つける、不気味な化け物だった。

ある日、孤児院の子供達を世話する大人の一人に言われた。

——あなたは化け物だから、親に捨てられたのよ。

ルーナは両親の顔を知らない。物心がついたときには、もうすでに孤児院にいた。聞いた話によると、自分はまだ赤ん坊だった時に『ルーナ』と書かれた紙と共に、この孤児院の前に置き去りにされていたらしい。

自分は化け物だからみんなを傷つける。みんなと仲良くできない。してはいけない。

幼いルーナは、そう悟った。

そして誰かと仲良くなろうなんてことを諦め、孤児院の図書室に閉じこもった。

図書室はあまり人の来ない場所だった。ここにいれば誰にも会わずに済む上に、自分がこの場にいることによって誰かに迷惑をかけるということもない。そして多くの本があり、退屈はしない。図書室は、ルーナが理想とした、世界から隔離された場所だった。

しかし——やはり一人は寂しかった。悲しかった。

窓の外を見れば、広い庭があった。孤児院の子供達が仲良く元気に遊んでいる。

子供達の笑い声は、その窓を通して図書室に入ってくる。

皆に混じって遊ぶことができたなら、どんなに幸せだろうか。皆の仲間に入れてもらえたら、どんなに幸せだろうか。

ルーナは一人、図書室で声もたてずに泣いた。

皆がうらやましかった。自分と違った皆がうらやましくて仕方なかった。

特に――エンジに憧れた。

誰とも仲良くでき、誰からも好かれる、皆のリーダーのような存在。時に危なっかしいところもあるが、明るい性格。

エンジは自分と全く正反対の存在だった。

仲良くなりたいと思った。

でも化け物の自分は他人と仲良くできないし、仲良くしてはいけない。もし仲良くできても、きっと自分はエンジを傷つけ、彼は自分を嫌うだろう。

だからルーナは、窓から皆とエンジを見るだけにとどまった。

しかし、エンジは突然ルーナの前に現れた。

拾われた日を誕生日として、ルーナがちょうど九歳になった日のことだった。このころはまだ、伊達眼鏡をしていない。

図書室の開けた窓から、不意にボールが中へと入ってきた。おそらく、外で遊んでいた子供達があやまってこちらへと投げってしまったのだろう。

図書室にいたルーナは、最初何もできずにいた。外から入ってきたボールがルーナの座る椅子の足下に転がってくる。

ルーナは黙ってボールを拾い上げた。このボールは、窓から外に戻して上げた方がいいのだろうか。とっさにそう考える。急いで外に出さないと、きっと誰かが探しにこの部屋にやってきてしまうのではないのだろうか。

それは困る。非常に困る。

そうしてルーナは、ボールを抱えて椅子から降りた。

それと同時に、図書室のドアが開いた。

——ボール拾ってくれたのか？　ありがと……って、オマエ、何で泣いてんの？　もしかしてボールあたった？

ドアの向こうから姿を現したのは、ルーナが切実に憧れた、エンジだった。

この出会いはきっと、神様からのプレゼントなのだった。

自分が化け物と呼ばれているにもかかわらず、エンジは自分に優しくしてくれた。仲良くしてくれた。

最初は少し話す程度だったが、次第にエンジは他の子供達と遊ぶのをやめ、ルーナとだけ遊ぶようになった。二人で孤児院をこっそり抜けだし、街へ遊びに行くようになった。

もちろんルーナはその理由を聞いた。自分みたいな化け物と遊ぶより、みんなと遊んだ方が楽しいでしょ？ どうしてみんなと遊ばないの、と。

エンジは笑って答えてくれた。

——だってオマエ、オレいないと一人なんだろう？ それに、オマエと街ん中走ってんの楽しいし。おい、何でまた泣いてんだよ、泣き虫……もしかして嫌だった？

涙が出るくらいに、嬉しい言葉だった。きっと、家族とはこんな存在なのだろうと思った。

エンジはまた、勇敢だった。

自分が『夕闇の森』に迷い込んだとき、エンジは一人で助けに来てくれた。

どうしても欲しい花がその森にあると聞いて、恐れながらもルーナは『夕闇の森』の中へと入っていった。しかし森は想像以上に暗

く、恐ろしく、じわじわと迫ってくるツタから逃げ、ついにルーナは足をくじいて歩けなくなってしまうた。

このままきつと、自分は魔物に食べられて死んでしまう。絶望にかられて泣いた。いつも泣いてばかりの自分が嫌になって、更に泣いた。

そこへエンジは一人現れた。心底驚いた。

エンジは帰るぞ、と言って、手を握り、一緒に歩いてくれた。その手の感覚を、今でも憶えている。温かく優しく、しかし力強く握ってくれた。

エンジに対し、森は非常に静かになった。理由はよくわからないが、恐らく森はエンジの勇氣に恐れたのだと思う。

この時エンジがこなければ、きっと自分は死んでしまっていただろう。エンジは命の恩人だった。

『夕闇の森』の時だけではない、『黒の日』だってエンジがいなければ死んでしまっていた。

多くの魔物が街に押し寄せ、多くの人が死んでいった。その中でエンジは、自分の手を引いて走ってくれた。ネジュアや、彼の兄、スピラ使い達のいる安全な場所へと連れて行ってくれた。だからいま、自分は生きている。

エンジには感謝してもしきれないほど助けてもらった。

一人きりの絶望から救い出してくれた。世界を変えてくれた。命

を救ってくれた。

ルーナにとって、エンジは世界の中心だった。

そのエンジが『黒の日』が明けた後——スピラ使いになる、と言った。

家族は『黒の日』に魔物に殺されてしまった。そして兄は、エンジの目の前でドラゴンに惨殺された。

だからその仇をとるのだと、エンジは厳しい顔をして言った。

しかし、ルーナはそれに反対した。スピラ使いにはならないでほしい、と。

『黒の日』で、魔物に立ち向かったスピラ使い達が殺されるのを何度も見た。皆、死んでいった。

スピラ使いは、死と隣り合わせ。

やっとできた、家族のように大切な存在——エンジを失いたくなかった。

だから反対した。スピラ使いだけにはならないで欲しいと。しかしエンジは聞く耳を持たず、ついに怒鳴った。

「最初から何もなかったオマエに、なくした気持ちの、何が分かる」

その言葉は、深々と心に刺さった。ルーナは泣いた。エンジにひどいことを言われたのは、これが初めてだった。

しかしルーナは顔を上げた。

エンジンがどうしてもスピラ使いになるというのなら——自分だつてスピラ使いになろう。

スピラ使いになって、家族の仇をとるエンジの力になりたい。そしてエンジンが死なないように、全力を尽くそう。

何よりエンジのそばにいたかった——スピラ使いになつたら、エンジはきつと遠いところへ行ってしまう。

「エンジンくんがスピラ使いになるなら、わたしもスピラ使いになる」

——エンジはこれに、猛反対した。

どうしてなのだろう、とルーナは思った。

自分がスピラ使いになるな、と反対しても頑なに聞かず、自分がスピラ使いになる、といえば猛反対する。

ああ、と思う。

——この人はわたしの気持ちをわかってくれない。

こんなにも心配しているのに気付いてくれない。こんなにも失うことをおそれているのに気付いてくれない——こんなにも愛しているのに、気付いてくれない。

最後にエンジは、ルーナに背を向けた。

「オマエとはもう、二度と口をきかない。オマエのことを、オレは認めない！」

そしてエンジは先へと進んでいく。その姿が小さくなっていく。

離れていく。大切な存在であるエンジが離れていく。どこか遠くに行ってしまう。

「いけないでー！」

ルーナの叫び声に、エンジは一瞬だけ足を止め振り返った。しかし、一瞬だけだった。

もうエンジは振り返ってはくれない。もう自分を見てはくれない。口すら聞いてくれない。

エンジは遠くにいつてしまったのだ。

でも、と、ルーナは思う。

きっと自分が強いスピラ使いになれば、エンジは認めてくれるのではないだろうか、と。

否、認めさせてみせる。

エンジよりも強いスピラ使いになろう。嫌われてでもいいからエンジを何度も助けよう。

杖を握り、眼鏡をかけ、そう決意する。

しかしエンジはいまも強くなり続ける。いくら努力しても、ルーナのスピラはエンジを超えられない。

あれから十年経ったいま、エンジはまだ遠くへと歩み続けている。振り返る気配は、全くない。

第四章 甘い迷宮（07）

そこは真っ暗闇だった。

見下ろしても自身の姿が確認できないほどの暗闇。明かり一つない漆黒。闇は淀めくことも渦巻くこともなく、静かに居座りそこを支配していた。音も何一つしない。

暗闇と静寂の空間だった。

しかし不意にその空間が破られる。

「暗いつ」

叫喚に似た、苛立ちの混じった少女の声が響く。そして暗闇に大きな明かりが生まれた。それは小さな光の玉でありながらも、漆黒を広く照らした。光球はたてられた人指し指の先で輝いている。色白で細いその指を持つ少女は、叫びながら光球を上空へと投げた。

「暗いつて言ってんのわかんないの!？」

少女の緩くカールした金髪がおもむろに揺れ、光球の輝きを反射する。

打ち上げられた光球は、天井にあった奇妙な形をした巨大なシャンデリアに衝突した。するとシャンデリアにあったいくつもの蠟燭全てに突然火が点り、空間を明るく照らし始める。

しかしまだ薄暗かった。次に少女は右腕をのばし、横へと滑らせ

た。すると今度は壁に取り付けられていた燭台の蝋燭全てに火が点り、シャンデリア同様にその場を明るく照らし出す。

先程まで暗闇だった広間は光に包まれた。

全ての壁は流れるようにして刻まれた文章で埋め尽くされている。その文字は、この世界で使われることのない文字。床には巨大な魔法陣が刻まれている。魔法陣の形は複雑で、壁に刻まれた文字と同じような文字も刻まれて構成されていた。それら全てが、蝋燭の炎に照らし出される。

美しく見えるも、不気味な広間だった。

少女は魔法陣の外に立っていた。そこで広間の中央――魔法陣の中央を睨んだ。

魔法陣の中央には男が一人、女に背を向けて立っていた。全身を黒い服に包み、帯剣した細い剣までもが黒い。中途半端に伸びた髪も黒い。広間を明かりで満たされたのが不満なのか、男は少女へと振り返った。気だるそうに少女の姿をとらえた瞳もまた黒く、しかし肌は血の気を感じさせないほどに白い。その男は、あたかも白と黒だけでできたようだった。

「……明るいのは好きじゃないんだ」

男は囁くように女に言った。

少女は呆れたように腕を組み、そっぽ向いた。

「明るいのは好きじゃないんだ……」

声を低めて男のまねをする。そしてすぐに罵った。

「知らないわよあんたの好みなんて！ 暗かったら普通明かりをつける、これが普通！ 何で明かりをつけないの！？ だからあんた根暗なのよ！ 言うことやることの一つ一つから根暗が染み出てる！ 気持ち悪い！！」

少女の高い罵声が広間に反響する。しかし男は何も言い返さず、溜息を吐くと元のように少女に背を向けた。

「それで僕に何の用だ、イーシア」

男は視線を下に落とし、魔法陣を見つめる。

「僕は行くところがあるんだ、何か用があるなら早く言ってくれ」

イーシアという名の少女は、それを聞いて更に苛立ったらしい。高かった声が、また高くなった。

「用？ 用なら沢山あるわよ！ やることも沢山あるわよ！ フレイヤル、あんたいつまでこうして根暗らしく引きこもってるつもりなのよ！！」

「それは一体、どういう意味？」

男は再び振り返り、気だるそうな視線をイーシアへと投げる。イーシアは額に青筋を立てていた。まるで見下すように腕を組み、声を上げる。

「根暗って意味が知りたいの？ それはあんたのことよフレイヤル

！ まんまあんだのこと！ あんたみたいにうじうじしてて気持ち悪くて意味わかんない奴のこと！！」

「……そこじゃない」

「わかってるわよ、冗談もわからないの！？ もう気持ち悪すぎて意味わかんない！！」

イーシアはまた騒がしく声を上げる。その様子をフレイヤルは慣れているかのように無視した。しかしイーシアはまだ騒ぎ続け、フレイヤルを指さした。

「とにかく！ あんたが意味わかんないって言いたいのだ！！ 何でいま今度こそロゼラスを攻め落とそうとか考えないの！？ いまがチャンスじゃない、あんたも知ってるでしょう、ロゼラスのクラン・ギルド『ノーウエン』がボロクソになってるって。あそこ強いスピラ使いがいまダメになってるって！ 銃使いの方は呪いで雑魚になって、魔法使いの方は原因不明の引きこもり！ あ、あんたと仲良くなれるかもね、その魔法使い。引きこもり、あんたと一緒にじゃん！ 根暗仲間かもよ？」

不意にイーシアは笑い声を上げた。それもまた広間に響く。しかし再び怒鳴り始める。

「じゃなくて、ほら、だから今『ノーウエン』はボロクソだからロゼラスの街なんてすぐ攻め落とせるじゃない！！ やるならいま、それに十年前よりスピラ使い少ない！ ロゼラスを攻め落とせるじゃない！！」

そこまで叫ぶとイーシアは満足したのか黙った。息を弾ませてフレイヤルを見つめ、答えを待つ。

フレイヤルは静かに向き直り、必死の様子のイーシアを見つめ返した。そしてしばらくして、口を開いた。

「いや……いまはまだ早い。それに攻め落とす必要もない」

「どうしてっ!？」

溜まりかねたイーシアは魔方陣の中へと侵入し、中央のフレイヤルへと駆け寄った。そしてフレイヤルの胸倉をおもむろに掴むと、ぐいと引き寄せる。しかしフレイヤルは表情一つ変えず、その手を払った。

「時期がまだ早いんだ。早まった行動をすると失敗する……それに、あの街には厄介な奴もいる、下手に行動できないんだ」

「何なのそれ、意味わかんないって!」

憤ったイーシアは激しく声を上げるが、ふと何かに気付き、黙って不敵な笑みを浮かべた。腕を組み、フレイヤルを見下すように言う。

「あー、わかった。もしかしてあんた、失敗するのが怖いんでしょう? 十年前みたいに」

「……失敗は、してないさ。目的を一つ達成できなかったただけだ」
「それを失敗っていうのよ——例の子供、見つけれなかったんでしょ? だからいま街を攻めてその子供を捕まえちゃおうってわけよ。下手すると匿われてるんでしょ?」

「でも街を攻める必要はないじゃないか。街に侵入して、その子供を捜して出して、こっそり連れていけばいい」

フレイヤルは深く溜息を吐く。

「——過激なのは好きじゃない、もつと隠密穏健でいくべきだ。その方が街のスピラ使い達と戦わなくて済むし」

それを聞き、イーシアは一瞬目を丸くした。しかしすぐに据わった目になる。そして、

「なるほどね……昔のお仲間さんと戦うのが嫌ってわけね、根暗蛆虫」

フレイヤルは何も答えずイーシアを見つめていた。イーシアはフレイヤルに背を向け、魔方陣の外へと出て行く。

「わかってるわよねえ、フレイヤル。あたし達、あいつら人と違うのよ？」

イーシアの言葉は冷たく、その足音共に響く。

「確かにあんたは、あたし達の中でも限りなく人に近い。でもそれはあくまで『人に近い』だけ。あたし達は魔物——魔人なのよ？そこ、わかってるわよね？」

しばらくの静寂。フレイヤルはイーシアから目をそらし、俯いた。だが顔を上げると虚空を見据えた。

「わかってるさ」

そう答えたとたん、床に刻まれた魔方陣が輝き出す。魔方陣の外にいたイーシアは、その場から少し退いた。

「話はそれだけ？ イーシア」

輝く魔方陣の中央、フレイヤルはイーシアへと尋ねる。

「いまは大人しくしている、それが僕の答えだ……もう用がないなら、僕は行くから」

「へえ？ 逃げるんだ？」

魔方陣の輝きが増す。フレイヤルの姿が徐々に光に吞まれていく。イーシアは口を尖らせ、しかし無邪気に笑った。その笑みにフレイヤルは首を傾げる。

「まあいいけどね……あんたがやらないなら、あたしがやればいいんだわ」

イーシアは鼻で笑った。しかしフレイヤルは顔をしかめた。

「だから、まだ早いつて言ってるじゃないか」

「行動するのは早いうちがいいでしょ。ふふん、十年前にあんたが起こした『黒の日』を再現してやるんだから。そしてあんたに見つけられなかった例の子供を連れてきてみせるわ」

自信に満ちた表情のイーシアに、フレイヤルは不安げな表情を浮かべた。しかし溜息を吐き、

「勝手にしたらいいよ」

それと同時に、魔方陣の輝きが爆発した。広間は更に光で溢れ、イーシアは思わず目を瞑った。そして次に目を開けたとき、魔方陣はもう輝いておらず、中央にいたフレイヤルの姿もなかった。

フレイヤルはもう、どこかへ行ってしまったらしい。どこに行ったのかはイーシアは知らなかった。そもそも、フレイヤルという男について、よくわからない。

「……ほんと、変な奴。キモイ」

そう呟き、これからの事を考える。

——ひとまずどこからかドラゴンを捕まえてこなければ。

フレイヤルの起こした十年前の『黒の日』のように、何匹ものドラゴンを従えるのは難しいことだ。

しかしいまのロゼラスの街とそのクラン・ギルド、スピラ使いは十年前に比べて人数も少ない。

ならばドラゴン一匹でもどうにかできるかな、とイーシアは一人笑う。

もちろんこの考えは甘すぎるかもしれない——しかし、フレイヤルのできなかったことを、例の子供を見つければ問題ない。

第四章 甘い迷宮（07）（後書き）

第四章 甘い迷宮 終

第五章 究極の魔法（01）

怪我が完治して数日後、日が昇って間もないときにデイーモに呼ばれたエンジは『ノーウエン』本部の最上階へと向かった。

デイーモの部屋は相変わらず荒れていた。以前来たときよりも、心なしかものが増えていく気がする。普段ヴィスががいるテーブルを見るとヴィスの姿はなかった。しかしそのテーブルの上に置かれた書類は、以前よりも確かに増えていた。

「相変わらず魔物が活発での。いよいよ増しているのじゃ」

部屋に入ってすぐにヴィスのテーブルの上の変化に気づいたエンジンに、デイーモは溜息を吐いた。デイーモはいつものように回転椅子に座り、背後の大窓から入る朝日に照らされていた。

「これから本格的に春になるからの……陽気になった魔物達が、ちと悪さをしているのかもしれないのぉ」

デイーモは頬杖をつき、扉の前のエンジを見据える。エンジはデイーモのテーブルの前へと進んだ。眩しい朝日が目に入り、思わず目を細めてしまう。それでもデイーモを見ると、デイーモの手には紙が一枚握られていた。

「様子はどうじゃ、エンジン」

頬杖をつくのをやめ、椅子の背もたれに寄りかかるとデイーモはその紙に目を落とす。そしてエンジを――エンジの少し濁った瞳を見つめる。

「その目と動悸、久しい銃、慣れたか？」

そう尋ねられるも、エンジはすぐに答えられなかった。

「……まあ」

自信なくそう答え、目をこする。

死に至る呪いは消え去ったが、その後は身体に残っている。時折動悸が起こり、苦しくなる。瞳は少し濁り、視力が衰えてしまった。動悸はともかく、目が一番の問題だった。

呪いにかかる以前に比べ、視界が悪くなってしまった。見るもの全てはぼやけて見える上に、薄暗く感じる。これでは銃の狙いが定まらない。

銃使いにとって、目の故障は致命的だった。

それでもエンジは射撃の練習を繰り返し、ひとまずおおまか狙い通りに撃てるようにはなった。しかし、以前のようにほぼ確実というわけではない。まだミスが目立つ。

自分自身ではまだ納得できない腕、それがいまのエンジンだった。

「ふむ、そうか……」

デューモはエンジの瞳をじつとのぞき込む。おそらく濁りを見ているのだろう。しかしまた手に握る紙を見つめると、それをエンジンへと差し出した。

「……どちらにせよ、行ってもらっぞ」

「もう、任務か？」

果たしていまの自分は任務を遂行できるのだろうか、不安に思いながらもエンジはその紙を受け取り、見つめる。

任務の内容は、この街から少し離れた村での魔物退治。目標となる魔物はそう強いものではないものの、複数いるらしい。

「これくらいなら、いまのお前さんにもできるじゃろ。腕試しに行ってくるがよい」

回転椅子から立ち上がり、ディーモは背後の大窓をわずかに開ける。冷たい風が部屋の中に入り、あたりに散乱するものを更に散らす。

窓を開けると、一匹の白い鳩が部屋の中へと飛び入ってきた。鳩はエンジの目前、テーブルの上に着地すると、わずかに鳴いてディーモへと見やった。ディーモは窓を閉め、元のように回転椅子に座ると、その鳩の頭を撫でる。

「不安かの？」

ディーモがそう尋ねる。最初は鳩に言ったのだとエンジは思ったが、しばらくしてディーモが自分へと顔を上げ首を傾げたため、エンジは尋ね返した。

「俺に聞いたのか？」

「お前のほかに、誰がおる？」

デューモはからからと笑った。しかし、不意に笑うのをやめたかと思えば、溜息を長く吐いた。エンジの顔と、腰のホルスターに収まった銃を見つめる。

「……まあそう不安になることはない。確かに銃使いにとって目の故障は致命的なことじゃ。だが、エンジ、お前はエンジじゃろ？ どうにかなるじゃろ。そもそもどうやってもどうにもできないとわかったら、わしはお前をここから追い出しておるよ。ここにいて無駄死にされても困るからの」

そしてまた笑い声を上げる。

エンジは思わず顔をしかめた。本当に、どうにかなるものなのだろうか。聞いた話によると、呪いの後遺症というのは治らないものらしい。

本当にそうであるならば、自分はスピラ使いをやめなくてはならない。たとえ自分自身がスピラ使いとして魔物と戦い続けたいと願っても、他のスピラ使い達に止められるだろう——実力のない者が魔物に立ち向かい無駄死にするのは困る。クラン・ギルドに所属するスピラ使い達は、魔物から人々を守るためにそうなったのだから。

デューモは冗談でここから追い出すと言っているものの、果たしてそれが本当に冗談なのか、エンジにはわからなかった。

——スピラ使いをやめるわけにはいかない。

自然と手に力が入り、堅く握る。

自分にはスピラ使いでいる理由があるのだ。

「何かあつては怖いかからの、念のため、ロロネもこの任務に同行させるぞ——あやつにはもう、この任務について伝えておる。今頃厩舎で馬の準備をしてお前を待っておるじやろ。お前も早く準備をして、厩舎に向かうがよい」

「……」

エンジは無言でデイーモに背を向けると、そのまま扉へと向かい、部屋を出た。

部屋を出た瞬間、空気が冷たいものと変わる。廊下では日に当たらずまだ温まっていないう空気が漂っている。暦の上ではもう春中旬になるも、この冷たさではまだ冬であるような気がしてならない。

階段を降りそのまま一階へ向かうのではなく、三階まで降りてくるとその廊下を進んだ。エンジは廊下を進み続け、廊下の一番端にある自室へと入ると旅に必要な最低限のものをまとめ、一つの荷物にする。そして作った荷物を持って、エンジは部屋の外へと出た。

階段を目指し、長い廊下を引き返す。廊下には変わらず人の影がない。エンジの足音だけが響き渡る。

そうして階段近くまで進み、不意にエンジは足を止めた。

横を見れば、閉じられたドアが一つある。エンジはそのドアを無言で見つめた。

そこはルーナの部屋だった。

ナイフで刺されたあの晩以来、ルーナの姿は一度も見えていない。噂によると、あの晩以来ずっと引きこもってしまっているらしい。

恐らくルーナは、このドアの向こうにいるのだろう。

—— 一体何をしているのだろう。

気になりドアに近づくも、エンジはドアノブを握ろうとはしなかった。

あの晩、ナイフで刺された脇腹に手を当てる。痛みはもうないが、まだ痛い、そんな気がした。

助けられてはいけなかった。

ルーナに何かしてもらうつもりは、さらさらなかった。

「余計なことしてんじゃねえよ……」

そつと呟くと、自分でも驚くほどの低い声になった。

エンジはその場から逃げるようにして、早足で階段へと向かい、下の階へと降りていった。

第五章 究極の魔法（02）

エンジンとロロロネが任務のため旅立ってから五日後。その日は、二人が街に帰ってくる予定の日だった。

昼下がり、空には雲一つなく晴天だった。本部裏の訓練場、カロンはその中の一本の大樹に登り、太い枝の上に横になっていた。大剣は寝転ぶのに邪魔になっってしまうため、大樹の根元に置いてきた。カロンは半分まどろみながら、緑の葉の天井を見上げていた。風が吹けば葉は柔らかな音を立てて揺れ、木漏れ日は星のように輝いている。風はまだ冷たいが、春の陽気は確かにあった。

普段であるならば、この時間帯、カロンは誰かしらと共にいて、食事をしたり話したりしているはずだった。しかしいまは仲のよいロロロネは任務に出ている上に、セファイやシギ、ウールカの姿も見当たらない。やることはなかった。だからといって一人部屋に戻って大人しくしているのも退屈だった。エントランスに行けば、誰かが任務に同行してくれる仲間を探しているのではないかと思い向かうも、誰もいなかった。そもそも克蘭・ギルド本部に人があまりいない。

何もやることはなかった。誰もいなかった。だが部屋に戻るのにはやはり退屈だった。仕方なく、カロンは気の向くままに外に出て、この大樹に登り昼寝をすることにした。

訓練場にも誰もいなかった。五日前までは病み上がりにもかかわらずエンジンが射撃の練習をしていたため、その鈴を鳴らしたような銃声がよく響いていた。しかしいまはエンジンもロロロネと共に任務に出ているため、もうその銃声は聞こえない。いまは風の音や鳥の

さえずり、動物の鳴き声といった自然の音が良く聞こえる。

カロンの寝転ぶ大樹にも、小鳥達が集まってさえずりあっている。さえずりが聞こえるほうへ目を向けると、この街でよく見かけるクリム色の小さな鳥達がいた。歌いながら跳ねている。時折身震いをしたかと思えば翼を広げ、嘴でつくろっている。

それからふと横を見れば、白い鳩がいた。この鳩も、街でよく見かける鳥だった。

と、カロンはその鳩に違和を覚え、ゆっくりと身体を起こして鳩を見つめた。

白い鳩はじつとカロンを見つめている。カロンが木の枝を這って近づくも、逃げる様子を見せなどころか、動く様子さえ見せない。

「なんだ、オマエ、腹減ってるのか？」

ふと思い、カロンは自らのポケットの中に手を突っ込んだ。中から小さな袋を取り出し、その中身を手のひらへと出す。中からは、乾燥させた赤い果物の欠片が転がり出てきた。カロンはその果物を乗せた手のひらを、鳩の前へと差し出す。すると鳩は首を傾げるも、手のひらから果物を一つついばんだ。しかし鳩はそれを飲み込もうとはせず、ついばんだままその場から飛び立ってしまった。クラン・ギルド本部の上空へと、飛んでいく。

家族がいて、あれを持っていくのかな、とカロンは考えながら飛んでいく鳩を見つめていた。

と、下から声がした。

「暇か？ 暇か？」

見下ろすと、同じ『ノーウェン』のスピラ使いであるウールカがカロンを見上げていた。

「ん、ウールカ？ どうした？」

ウールカはカロンと同じくレイモン族の男だ。先の尖った耳、日に焼けたような肌を持ち、いつも笑っている口元からは牙が見える。頭には長く垂れ下がったウロウ族やウサギの耳のようなものがついた帽子を被っていて、背には大きな槌を背負っている。

「暇か？ 暇か？ 暇、暇？」

いつもにこにここと笑っていて、喋り方が少しおかしい、それがウールカだった。

「うん、暇。どうかした？」

カロンはウールカを見下ろしながら尋ねた。するとウールカは何も言わず背を向けると、クラン・ギルド本部の中へと入っていく。

どうやら、ついてこい、と言っているらしい。

木から飛び降り、着地する。そしてそこにおいてあった大剣を背負うと、カロンはウールカを追って本部の中へと入っていった。するとウールカはエントランスを通り抜け、街へと出て行く。カロンハまたその後を追って駆けた。

本部から出て、街の広場へと飛び出す。広場はいつものように人々で溢れている。一瞬ウールカの姿を見失うも、大きな槌を背負った後姿をみつけ、カロンは駆けた。ウールカの隣に並ぶと、尋ねる。

「どこ行くんだ？」

「あっち」

明確な答えは返ってこなかった。ウールカはただ先へと進む。仕方なくカロンはウールカと共に先へと進んだ。

そうして来たのは、東門だった。

何故か門の外は騒がしい。カロンは首を傾げた。しかしウールカは気にせず進み、外壁の目前までやってきたかと思うと高く跳ね上がった。しかし外壁にそって取り付けられた足場には届かず、だがウールカは次に壁を蹴り跳ね上がった。そしてウールカは足場に着地し、カロンを見下ろした。

カロンは外壁に取り付けられた梯子を上り、見張り台へと上がった。見張り台に上がると、そこにはセンフィとシギがいた。二人とも、外壁の外を見下ろしている。

「あれ、何してんの？」

カロンが二人に声をかけると、センフィが振り返った。

「よかった、あんた本部にいたのね——ウールカ、呼んで来てくれてありがと」

センフィはウールカへと声をかける。ウールカは背負っていた槌

を手に握っていた。カロンは首を傾げた。

「オレ、呼ばれたの？ 何のために？」

「……あれを見る」

と、シギが外壁の外を指差す。カロンは言われるがままに外壁の外を見下ろした。

「——何あれ」

外壁の外は、妙な魔物で溢れていた。

見たことのない、黒い四つんばいの魔物が散満していた。人間の子供くらいの大きさの魔物だった。目は異様にきらきらと輝いていて、裂けた口からは鋭く細い牙が見える。黒い魔物たちは東門の前をうろついたり、外壁に爪を立てたり噛み付いたりとしている。全体を見たところ、三十体はいるだろうか。

「気付いたら増えてたんだってさ——あたし達にも、この魔物が何なのかわかんない。はじめてみた」

センフィは首を振る。そして弓と矢を構えて狙いを定めたかと思うと矢を放ち、外壁に噛み付いていた一匹の黒い魔物を貫く。

「さっきからこうしてあたし、シギ、ウール力で倒してるんだけど、減ってる気配が全然ないのよ。あんたも手伝って」

「俺とセンフィは上から攻撃する。カロンはウールカと一緒に、下に降りて戦ってくれ……門は使わず、ここから下に飛び降りてくれ、門を開けると奴らが中に入ってしまう」

シギもそう言い、杖先についた輝く水晶玉を下の魔物たちへと向けた。すると水晶玉からいくつもの輝きが現れ宙を舞う。輝きは形を成し氷の塊になったかと思えば、黒い魔物へと落ち、魔物達を押し潰す。

と、ウール力はスピラを帯びて輝く槌を構え、魔物たちで溢れる下へと飛び降りた。宙で一回転し、自身が着地する前に槌を地面に叩き付ける。ずん、と地面が揺れる。槌が帯びていたスピラが爆発し、衝撃波となって地面を這い広がり、魔物達を薙いでいく。

「ちよつと待つて！ オレ、ウール力みたいに下に降りれない……足折る……」

カロンは剣を抜くも、いざ飛び降りようとして足を止めた。下を見れば、それなりの高さがある。大樹の枝よりも高い。うまくいけば怪我はしないものの、失敗しそうで怖い。

するとシギが杖先をカロンへと向けてきた。杖先の水晶玉から、束となった風が吹き出す。風の束はカロンの身体を包むとふわりと持ち上げ、外壁の外へとゆっくり降ろした。カロンは地面に着地する。

「ありがとう！」

着地してすぐ、カロンは見張り台へと手を振った。そして大剣にスピラを流すと、襲い掛かってきた黒い魔物へと斬りかかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4727x/>

Red Shot

2011年12月25日16時48分発行